

自然文化誌研究会(冒険探検部)

INCH 50 周年記念誌

創造・パイオニア・伝統知
いろいろ ぼちぼちと その歩み



NPO 法人自然文化誌研究会

『INCH50周年記念誌』 目次

「INCH」とは自然文化誌研究会の英語の頭文字から取った略称です

The Institute of Natural and Cultural History

「はじめに」 p.1

木俣美樹男（自然文化誌研究会創設者）
中込卓男（NPO 法人自然文化誌研究会代表理事）

第1章 「自然文化誌研究会」 p.10

第2章 「自然文化誌研究会冒険探検部」 p.63

第3章 「ちえのわ農学校～サークルちえのわ」 p.96

第4章 「50周年記念座談会」 p.105

第5章 「特別寄稿」 p.119

発行物一覧 p.140

編集後記 p.141



のさちやれ



つつこみマン



『INCH50周年記念誌』

創造・パイオニア・伝統知

いろいろ ぼちぼちと その歩み

発行日 2025年10月4日 初版第1刷発行

編集委員 日比野真士 黒澤友彦 宮坂朋彦

発行 NPO 法人自然文化誌研究会

〒191-0053 東京都日野市豊田 3-28-2



はじめに

～木俣美樹男～

自然文化誌研究会（愛称学大探検部）は創立 50 周年を迎えることができ、創業者の一人としてご同慶の至りである。人生は思い通りにはいかず、紆余曲折があっても、一途の想いをもって何とか苦難を耐えて、道を補正しながら、楽しく幸せな平穏の日々に至りたい。小学生の頃から思い描いていた人生の大方が満たされて、おおかた吾唯足るを知ることだ。

多くの師友、先達、身近な家族に支えられて、栽培植物の起原と伝播の研究という趣味に明け暮れたと言え、まるで自己中、能天気な奴に分類されてしまうだろう。祖父は陸軍に徴兵されシベリア出兵、父は海軍に徴兵され、軍港呉の周辺で松根油を掘っていたそう。軍隊だけがこのくにを護っているのではない。趣味の学問と言いつつ、学術探検もかなり命懸けの職業で、友人は熱帯病、事故などで何人も死去している。教えを乞うてきた篤農の皆さんや師匠・先達も、軍隊生活での戦闘に加えて、酷い飢餓を経験してきた。

僕はこうした先人たちの経験を貴重資料として引き継いできた。彼等からタネを切らしてはいけないという厳命がありながら、京都大学学術調査隊や自然文化誌研究会ほかで収集した栽培植物の種子を含めて約 1 万系統の研究材料を、東日本大震災の際に計画停電と放射性物質を避けるため、イギリスの王立キュー植物園に急遽移管した。これは絶望的な行為であったが、日本では見捨てられた内外の在来品種が保全できたので、キュー植物園には深く感謝している。

一方で、東京学芸大学は伝統的には教員養成を主目的にしてきた古い大学である。農業教育、環境教育は義務として、実践研究および理論研究をせねばならなかった。連合大学院で博士号まで授与する教授としては、高度な教育哲学の学術研究を自ら求めた。また、学びを深められるように教材の研究開発も行った。たいそう複雑な仕事である。年休はほとんどとらず、週末も研究作業や学生・市民向けの教育実践に過ごしてきた。

こうして、自然文化誌研究会とともに日々の各種鍛錬をしながら、多くの個人活動や集団活動の成果を蓄積してきた。その技量を信頼して、子供たち向けの冒険学校や農学校、教員・市民たち向けの講習会、教育プロジェクトを実行してきた。ここに、高い誇りを持って、50 周年の事実記録を公表する。これからも、地道な活動に、多くの方々が関心を寄せてくださり、口コミで参加し、ご援助いただければありがたい。自然や生業を学び、自然知能 NIn により、心の構造と機能を豊かにするように、一緒に鍛錬し、豊かで幸せな暮らしを、近未来に再生しよう。



ウズベキスタンのスタイリストたちと（木俣撮影）

はじめに

～中込 卓男～

木俣さん（木俣美樹男）のポスターを見て、山梨県の西原調査に同行してからもう 50 年経ったとは・・・である。1975 年 6 月 22 日の予備調査で西原を歩いていたとき、走るようにいろいろなところを歩き回って、姿を消したかと思ったらまた現れるの繰り返しの若者が木俣さんであった。

その後の 7 月 20 から 22 日の第 1 回調査で、西原田和の町田さん宅を初めて訪れたとき、自分が何しに來たのかをなかなかうまく説明できずに玄関先でしばらく立ちすくんでいたのを思い出す。大学 2 年生の夏であった。ここから自然文化誌研究会が始まるのであるが、当時のことは、自然文化誌研究会の 20 周年記念誌に寄稿してある。（「植物と人々の博物館」で閲覧可能）

1976 年 1 月 27 日から 28 日の第 4 回西原調査で、田和の祭り^{なわらい}に参加した。夜、直会が始まりいろいろごちそうになった。集まった人は年配者ばかりで若者はいなかった。何十年ぶりという亀踊りを私たちのために披露してくれたおじいさん。むらの人たちは盛り上がりお酒も振る舞い、ほとんど飲めなかった私たち学生にかわって木俣さんが一人飲まされた。木俣さんは翌日まで大変であった。

西原の雑穀調査でチョウセンビエ（シコクビエの方言）に初めてであい、宝物を見つけたように自分の部屋の壁に、いただいたチョウセンビエを何年も飾っていた。引っ越しで、今はタイでカップラーメンと交換したハタオリドリの巢にかわってしまったが。

また、五日市町（現東京都あきる野市五日市）から始まった「冒険学校」については、「冒険と子どもたち「冒険学校」のあゆみ（2015 年）」に書いてある。（「植物と人々の博物館」で閲覧可能）

この 50 年間、調査活動、のびと講座、セミナー等いろいろな活動をする中で実に多くの人たちと出会うことができた。そのなかで得たことは私にとって貴重な財産となっている。家に残る未整理の自然文化誌研究会の資料を引っ張り出したら、一つの部屋がそれで埋まってしまった。2 回の引っ越しで紛失したものもあり、記憶の曖昧さもあり改めて物理的にも 50 年を感じている。

パイロットワークと時代の先を行く自然文化誌研究会のエピソードのいくつかを紹介しよう。1988 年に「第 2 回 清里フォーラム」でのこと、佐藤さん（元副代表理事、佐藤雅彦）が冒険学校の報告をした。大反響を呼び質問攻めにもあった。1 週間のキャンプ。スタッフの人数は参加者とほぼ同じ。子どもたちがそれぞれ自主的にプログラムを選択する。1 週間昼寝していてもいい。プログラムは自然、文化的、体験、遊び等様々ある。ナチュラリストのジュニアリーダーの養成等、今までの野外活動とは別物であった（エピソード 1）。

佐藤さんとは大学の同級生で当時、自然文化誌研究会にはいなかったが同じ農場付近にいてよく話した。木俣さんが敬語を使う唯一の学生でもあった。彼は学芸大が 2 つめの大学であり木俣さんより年上でもあった。卒業した 1978 年以降、数年が経ち、新たに彼とも自然文化誌研究会の一員として活動を始めた。

1988 年から始まる「冒険学校」の初代校長として彼はキャンプ全体、参加者の子どもからスタッフまで木俣さんとともに見守り、気を配った。子どもの相手に疲れている学生スタッフがいれば、1 日別の部署でリフレッシュさせたり、また増水でテントサイトが危ないと朝早く山の中の離れた沢から本部にやってきて、本部スタッフも撤退を手伝いに行ったことを思い出す。私は勤め先が五日市町の戸倉小学校であったので、いろいろなプログラムの場所（鍾乳洞、化石掘りの場所、川遊びの場所など）や施設（郷土館、紙すきなど）、人（林業家、畜産家など）との渉外に当たった。

「冒険学校」が始まってからも夜な夜な「冒険学校」について議論をした。二人ともすでに小学校の教員になっており、学校という独特の窮屈さを感じていて、子ども主体の解放された自由なものを

求めていた。彼は教室で子どもたちとウサギを飼っていたり、私は子どもたちと自然探検隊を作って野外で遊んでいたりで、他の教員から見れば何をやっているのか少々理解されていなかったのだと今になっては思う。彼とは自然文化誌研究会の運営委員会には必ずどちらかが出席できるようにしようと話し合っていた。

その清里フォーラムのときだったか記憶が曖昧だが、当時上野動物園の園長であった中川志郎さんにお会いでき「動物は夜行性が多いので動物園を夜間も開館したら面白いと思う。」と32才の私が一方的に話しかけた。中川さんはとてもよい方だったので翌年私を見つけて「労働組合に反対されて実現できなかったよ。」とご返事をくれた。「ナイトサファリ」は、今いろいろな動物園で行われている（エピソード2）。

もう一つ紹介すると、同じく「清里フォーラム」で環境学習中級指導者の養成が必要で、プログラムをどうしたらいいかと意見を出したところ、当時はどの団体や人も相手にしてくれなかった。当時は初級指導者の養成をどうするかの議論であった。中級は自分で身につけろといわれたことには閉口した。その後、自然文化誌研究会は中・上級指導者養成として、ELF環境学習過程を木俣さんがまとめたのである（エピソード3）。

私は「のびと講座」をはじめた。1991年12月の運営委員会レジュメから抜粋すると「ナチュラリストとかインタープリターとかそういった人達を私たちは「野人（のびと）」と呼ぶことにした。自然のみならず、自然と文化を伝えていくのが野人である。野人講座はそういった「野人」をめざすための研修の場としたい。」対象はある程度自然や文化について知っている人、初級修了者、「中級」のイメージの研修で、具体的には「・博物館の学芸員・自然公園等のレンジャー・公民館等子どもや大人を対象としてキャンプなどを担当している人・観光、村おこしなどに関わる人・学校教育関係者・その他興味のある人」。自然と文化をいかに共存的に考えられるかという主旨で、ビジターセンターや博物館、〇〇自然の会等それぞれの団体での活動を話してもらい参加者で議論していく。またキャンプ運営の仕方等のテーマを決めて議論していくというものであった。その当時、のびとクラブ名簿には五日市町郷土館、五日市青年の家、御岳ビジターセンター、奥多摩ビジターセンター、小峰ビジターセンター、高尾ビジターセンター、五日市役場、秋川市役所、五日市町立戸倉小学校、都民の森、山のふるさと村、体験の森などの名前がある。34、5年前のまだ建物ができただけで、各団体がいろいろプログラムを模索していた時期である。戸倉小学校で数回会議を開いたが、校内事情で私は次の小金井市立緑小学校に異動となった。もう1年活動して軌道に乗せたかったのだが、たちぎれてしまった。

私と自然文化誌研究会は切っても切れない関係であることを、改めて50周年を振り返ってみて感じる。冒険学校を五日市町で開催したことで、自然のほかに文化にも目が向いていった。

五日市町立戸倉小学校は歴史ある「愛鳥モデル校」であり、愛鳥教育の担当となった。スズメ、ハト、カラスぐらいしか知らなかった私は1年間、子どもたちに野鳥の名前を教えてもらった。それを元に自然観察路を子どもたちと一緒に作ったり、ついでにフジグリーンファンドの自然観察コンクールに応募して賞金5万円と副賞の望遠レンズ付きカメラをいただいた。子どもたちと新宿の紀伊國屋書店まで出かけて行きその賞金5万円で野鳥を中心とした自然関係の本を買い、空き教室を野鳥保護委員会の部屋とした。また家づくりが趣味な音楽の先生とチームを組んで野鳥観察小屋を校庭の裏庭に手作りした。観察小屋の木材は学校予算では出ないので、知り合いの林業家からなんとかしていただいた。

五日市町郷土館の運営委員になり、学芸員の方と地域の自然に興味のある人達を集め～五日市町自然ハンドブックシリーズ～『Ⅰ水べの生き物』『Ⅱ鳥はともだち』『Ⅲ草木となかよく』を刊行した。さらに、子ども向け郷土館主催事業の「自然体験教室・自然探検クラブ」を企画から任せられ、時刻や季節、場所を変え1990年から1992年にかけ延べ38回実施した。1992年から小金井市立緑小学校に異動しているので、最後の1年間は五日市まで通ったが、地元に関わる人に任せただけだと思いい、3年で終了した。



当時、小学校教員は一つの学校に4年から10年間在籍できた。私は、できるだけ長く一つの学校にいたようにした。何かをやるには学校内だけではなく地域とも関わる必要を自然文化誌研究会の活動から学んでいたからである。

大学も近いので小金井市を選んだ。結果、緑小学校になった。1992年から2002年まで10年間務めた。「生活科」や「総合的な学習の時間」が始まり環境学習はやりやすくなった。

まずは遠足のプログラムを変えた。冒険学校で培ったことを展開した。あきる野市(旧五日市町)の「横沢の入り」という里山的なところへ行き、帰る時間を告げ、後はお弁当を食べる、小川で遊ぶ、洞窟探検、綱渡りのアスレチックなどのプログラムを用意して、子どもたちに自由に過ごさせた。

同学年の教員への同意が一番大変であった。遠足の下見(実施踏査)で、教員自身を楽しませることに力を注いだ。遠足当日、子どもたちは喜んで活発に活動していた。



◀「横沢の入り」の遠足でロープ遊びや洞窟探検をして遊ぶ子どもたち

次に、5年生が一泊二日で行く林間学校、二泊三日で6年生が行く、海の移動教室のプログラムを変えた。これも子どもたちに好評であった。(中込卓男「遠足・林間学校における環境教育プログラムの開発と実践」)

日常子どもたちが最も活動する学校園に、ビオトープを作った。同僚からは、「環境教育」「ビオトープ」って何?の時代である。

専門業者が作るのではなく、6年生の子どもたちといっしょに池づくり、植樹、落ち葉のプール、花壇などを作っていた。

作った池の周りには風力発電や太陽光発電の装置をつけた。池の水の循環につかった。また屋根の雨樋から雨水をためるドラム缶を設置加工して、池の水の保水に使用した。

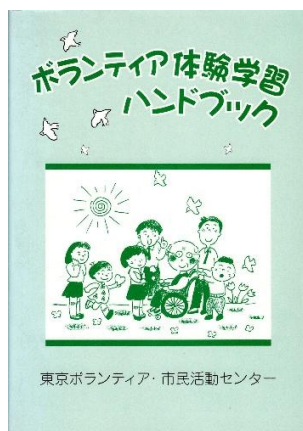
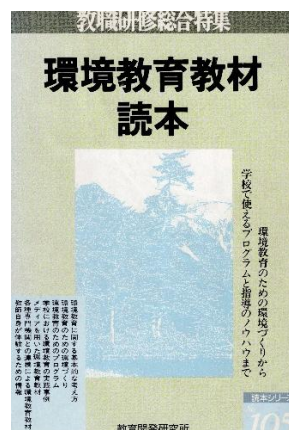
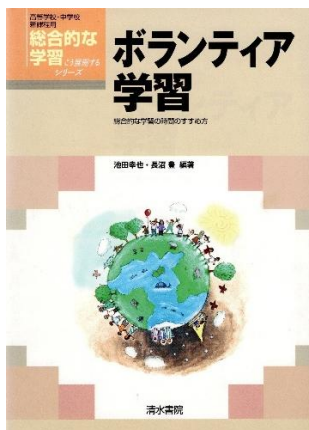


◀ビオトープの池。JR から枕木をもらい三鷹から運んだ。

校内研究に、環境教育部会を作り、子どもたちの環境委員会といっしょに、池の周りに自然観察路、掲示板を作ったり、地域の NPO（野川の自然を守る会だったと思う）から、野川で捕れた魚をいただき校内にミニ水族館を作ったりした。

2001年には『緑小の環境教育』という小冊子を作成した。また地域で活動する団体や関心を持つ方々に連絡をとり、「緑小ビオトープ公開シンポジウム」を開催した。

またこの時期、環境教育のブームで、木俣さんからいろいろ仕事を紹介していただいた。講師として神奈川や埼玉県まで出かけたり、原稿も頼まれた。





▲東京ボランティア・市民活動センターとはいくつかまとまった仕事をした。

2002年からは、町田市立大戸小学校に勤務した。この学校はヤギやウサギ、ニワトリを飼育していた。ここで用務主事の若狭さん（若狭浩二）と出会い、ふれあい広場を中庭に作った。彼はログビルダーで、動物飼育舎を丸太で作ろうということになって、地域の人々の山から一夏かけて丸太を切り出し、子どもたちとその丸太の皮をむき、チェーンソーで加工して組み立てた。

ふれあい広場にビオトープの池、ピザ釜、堆肥置き場、雨水貯水ます、ハーブ園等を地域の人達の協力も得て作った。



▲ふれあい広場 右奥がビオトープの池



▲若狭さんと子どもたち

後に若狭さんを自然文化誌研究会に誘って、小菅のいつものキャンプ場にログハウス群を作ったのである。私は、校内事情で図工専科となり、元々好きだったアートの世界に入ってしまった。また少人数の学校でもあったので、5年生の移動教室を小菅村で実施した。

プログラム	主な内容
自然散策	雄滝・しおしの森・源流探検
小菅小学校児童と交流	・村内ウォークラリー （地元の小菅小学校の5,6年生と一緒に小グループに分かれ村内見学） ・雑穀収穫体験（キビ、アワ、等） ・たねあな見学
山登り	山頂から小菅村の様子を見る 木の実、動物の足跡、食痕の観察
ナイトハイク	都会にはない暗闇を体験
星空観察	天の川、夏の三角など観察、流星も
畑見学	急斜面の畑見学 コンニャク・サトイモ・トウモロコシ・モロコシ等畑の持ち主に話を伺う
蕎麦打ち体験	民宿のおばさんに蕎麦打ちを教わり自分たちで作ったそばを昼食に食べる
農山村の生活体験	雑穀や郷土料理を食べる
その他	ヤマメを焼くお手伝い ドラム缶風呂入浴

▲様々なプログラム



▲ドラム缶風呂



▲アワについて説明（黒澤さん）



▲ヤマメを焼くお手伝い



▲朝の一コマ



▲そば打ち



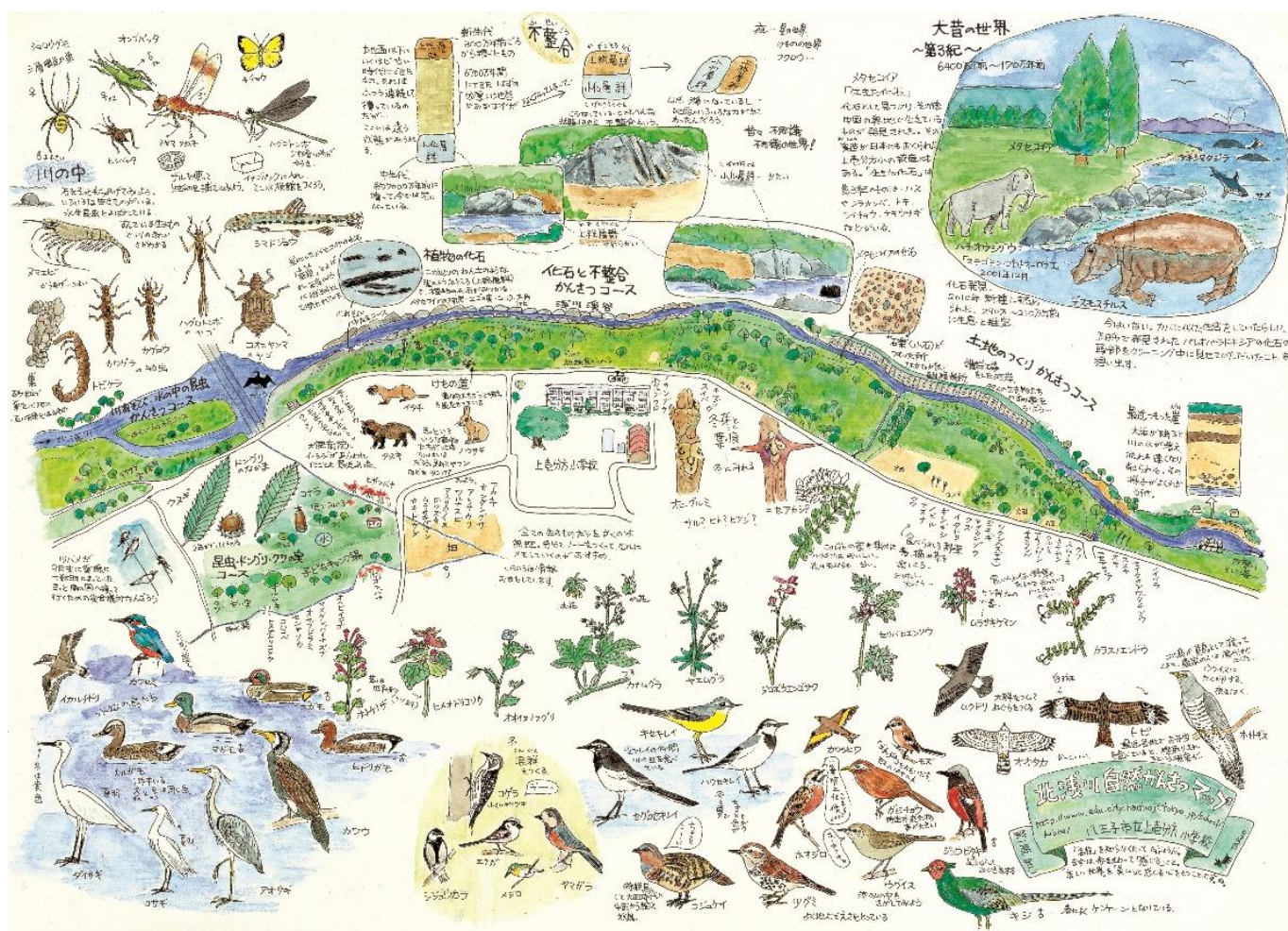
▲小菅小の子と村内ウォークラリー



▲「植物と人々の博物館」見学

船木^{ふなぎ}民宿を貸し切り、事務局長の黒澤さん（黒澤友彦）にもお手伝いいただき、小菅小学校とも交流して INCH で培った楽しく意義のあるプログラムを実施できた。

次に異動した先は八王子市立上壱分方小学校で、ここでも図工専科として子どもといろいろな活動した。八王子市教育委員会が決めた「パワーアップ研修」というのがあり、教員は子どもたちが夏休み期間中に受講しなければならなかった。研修内容が一覧表で回ってきたがどれも面白そうではなかった。そこで自分で作ることにした。学校のすぐ北側に北浅川が流れていて、メタセコイアの化石もあるし、地質的に面白そうであった。そこで地質に詳しい鈴木さん（鈴木英雄）と沢登りの黒澤さんに声をかけ講師を引き受けていただいた。このパワーアップ研修会「北浅川での自然体験」の受講者は、ほとんどが上壱分方小学校の教員で大好評であった。授業にもすぐに役立つし、何よりスリル満点で暑い夏に涼しい1日を過ごすことができたのだ。川におり、そこから川底を歩いて遡っていく。要所要所で先頭の鈴木さんが地層の解説をする。途中川幅が狭くなり、河原がなくなりちょっとした溪谷になる。深さも増してきて背も立たず、泳ぐしかない。そこは黒澤さんの出番である。私はしんがりを務め全体を見渡した。途中でお弁当を食べ、元気のいい若者は、岩から飛び込んだりして研修を終えた。好評につき3年ぐらいこの研修は続いたと思う。噂を聞きほかの学校の教員も参加するようになってきた。



▲北浅川観察マップ (2011年)

自然文化誌研究会のことを書いているうちに、自分のことを書いてしまった。私にとって自然文化誌研究会でやってきた活動も、自分の教員としての活動も同じことで、あまり区別できていないことが50年関わってきてわかる。運営委員会のレジュメを見ると、本会の流れがよく見えてくる。会報誌「ナマステ」より、そのときの議論がわかる。いろいろ話し合い、いろいろな活動をし、自分の仕事にも生かしてきた50年であった。

最近はzoomミーティングができ、それなりに話し合いを持つことができる。埼玉、岐阜、山梨、新潟、東京など離れていてもミーティングが可能となった。これを活用しながら実際の活動の場でまた話す。これからの自然文化誌研究会、百周年どうなっているだろう。楽しみである。

最後に私が冒険学校等の活動で大切にしていることの一つを以前書いたもののなかから引用してしめくりとしたい。

環境教育へのアプローチ～伝えたいもの～

1. 森の感動

中学2年生といっしょに森の中を歩いていた時のことです。彼は、うっそうとした森の中のトレイルを歩きながら、私といろいろ話をしていました。ある瞬間、木もれ日が地面の小さな下草を照らしました。まるで舞台に立った小さなマドンナにスポットライトが当たっているかのようでした。彼は詩人のように、その光景を、美しいと感じ、感性のままにしゃべりかけました。自分の発見を、感動を誰かと共感したくてたまらないようでした。私は、感動し興奮している彼に、感動していました。

「学校でもそんな話をするの？」私は尋ねました。

「まさか、そんなこと言ったら、ばかにされちゃうよ。」

「えっ？」

「アイドルとか、野球とか、サッカーとか、テレビのお笑いのこととか、そんな面白い話をして笑っているだけ。真面目なことなど、言える雰囲気ないよ。」

その後も彼は、自分で見つけた自然の素晴らしさを語り続けました。日常押さえていたものが、一気に解き放されたように。

中学生という、不安定な時期ではしょうがないのかもしれませんが、自然の素晴らしさを発見した時に、いっしょに共感してくれる人が一人は必要です。友達が無理なら、周りの大人たちがその役割を担ってやろう。親でもよい。学校の教員でもよい。地域の人でもよい。そんな小さな共感が、その子の感性を育むことにつながっていくかもしれないのです。

環境学習は、酸性雨や地球温暖化、オゾン層の破壊、ごみ問題、水質汚染、エネルギー問題等地球が抱えてしまった人間存亡の危機をどうにかしてくれる次世代を育てることと思われがちです。でもその根源は、自然の中にいて心地よいと感じること、自然に感動する感性を持つことなのです。

「ボランティア体験ハンドブック」(2000)より



第 1 章

自然文化誌研究会



自然文化誌研究会 の主な活動歴

- 1975 年 「設立」 自然文化誌研究会学大探検部
- 1981 年 「設立」 冒険探検部
- 1985 年 「合併」 自然文化誌研究会冒険探検部
- 1988 年 東京学芸大学公開講座「子どものための冒険学校」を五日市にて開催
- 1993 年 東京学芸大学公開講座「子どものための冒険学校」を大滝村にて開催(2002 年まで)
- 1993 年 中央アジア 5 カ国に第一次学術探検隊の派遣 JT クロスカルチャー大賞受賞
- 1996 年 コカ・コーラ環境教育大賞受賞
- 1998 年 北海道二風谷でアイヌ文化を学ぶ冒険学校の開催
- 1999 年 TJ ネイチャークラブの結成(タイとの交流)
- 2002 年 東京学芸大学公開講座ぬくい少年少女農学校共催(現ちえのわ農学校へ)
- 2004 年 NPO 法人の認証を受ける。小菅村に拠点を置き、現在に至る。
- 2004 年 第 1 回雑穀栽培講習会を中組地区においた「雑穀見本園」で開催
- 2005 年 ミューゼス研究会の呼びかけ(企画を中心に)
- 2006 年 小菅村中央公民館を「植物と人々の博物館」として整備も開始する。
- 2007 年 「雑穀展」展示・「小菅の名人展」展示(吉富研究室)
- 2009 年 9 月 「日本エコミュージアム研究会第 15 回全国大会」を小菅村で開催
- 2012 年 9 月 「雑穀研究会 第 26 回シンポジウム」を小菅村で開催



創設から現在まで

木俣美樹男（初代事務局長）

自然文化誌研究会創立;1975～1990 年

東京学芸大学に助手として就職したのは1974年である。東京教育大学大学院の指導教授であった西川五郎先生たちからは人生の坂道を上るための重荷「骨を埋めるつもりで、日本の農業教育を再建せよ。」と教示をされて、東京学芸大学に送り込まれたのである。

阪本寧男先生には、穀菜食による長寿で有名な上野原町桐原に行き（1974年秋）、東京で就職するのならここをフィールドと決めて文化人類学の野外調査の練習をせよと教唆された。そこで、「自然誌研究会」を創って、学生たちを募って調査するとお答えした。それなら、「自然文化誌研究会」とした方がよいと助言された。これが、東京学芸大学探検部の一源流になった（1975年春）。学内に募集のポスターを張り出したところ、現代表理事の中込卓男ほか女性3名が応募してくれた。うち3名が理科生、1名が音楽科生であった。さらに、すぐに学生会員も増えて、上野原町から奥多摩町まで雑穀栽培を中心に、文化人類学的な調査の練習や登山の練習をした。

しかし、一方で、2年ほどして個人研究の成果が出るようになり、研究発表にあたって実質のない共同研究（共著論文）を拒否したので、職場でいじめ（今でいうパワハラ、アカハラ）に合い、助手ゆえに「サークルの顧問はできない。学生と関わるな。」などと圧力をかけられた。このいじめに屈して、自然文化誌研究会の顧問を、上司原沢伊世夫先生に依頼せざるを得なくなった。その後、いじめに同情した教授たちが、いじめ助教授が海外留学でいない隙に、お情けで講師に昇進させてくださった。これによって、学生サークルの顧問になる資格ができ、改めて、自然文化誌研究会の顧問に復帰した。国内では関東山地調査から、次に北海道の北方農耕文化調査に新天地を求めて行くことになった（1981年）。

この時期には、現副代表理事の中込貴芳や塚原東吾らが冒険探検部（もう一つの源流）を創っていた（1981年2月）。同じ志の若者たちが集まろうと小林正雄や宮本透らが合同の話し合いを続けて、東京学芸大学自然文化誌研究会冒険探検部、愛称学大探検部になった（1985年8月）。こうして学大探検部は黄金時代を迎えたのである。創部15周年記念シンポジウム「風と人と」（1990年）には多くの大学探検部の参加を得た。加えて日本環境教育学会の創立準備の事務局を始めた。

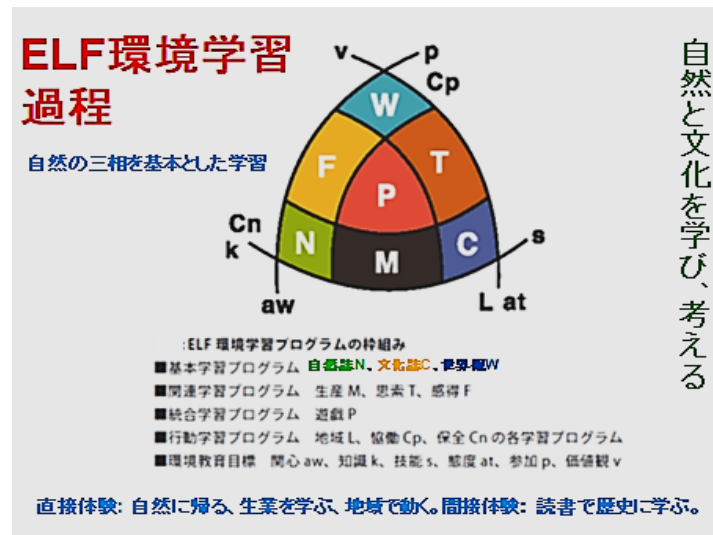


*写真左は愛車スカイラインで北海道を3000kmは走った時の様子である。柴田一や河口徳明がいる。右が北岳にトレーニングに行った時の集合写真である。現副代表の中込貴芳や小川泰彦、初代事務局長の岩谷美苗（リーダー）、佐伯順弘、瀬谷勝頼、柴田一、宮本透らと一緒にであった。

自然文化誌研究会の関わった諸活動

1) 環境教育学習/農耕文化基本複合の教材開発

環境学習を深めるための各種教材を開発し、印刷して講義などで配布してきた。『野外学習 I』(1983)、『野外学習 II』(1984)、『野外学習 III』(1986)、『学術調査報告 I』(1987)、“A Preliminary Report of the Studies on Millet Cultivation and Environmental Culture Complex in West Turkestan”(1993)、『ELF 環境学習指導者研修会テキスト』、『ELF 環境学習過程』、『雑穀展』(2008)などを制作して、講義やセミナーで無償配布した。



2) 野外教育セミナーから環境学習セミナーへ

野外教育セミナーは1984年から始めて、野外教育シンポジウムなども派生させ、第5回野外教育シンポジウムをもって、日本環境教育学会の創立大会を行った。その後、環境教育セミナーとして、第40回(2018)まで実施した。このほかに、「国際留学生の集い」(1985)、「連続講演会；アジアを考える I」(1989)、「連続講演会；アジアを考える II」(1991)、「環境学習シンポジウム」(2012)などを数多く開催した。

3) 冒険学校

教育研究実践として冒険学校を始めたのは二つの主な理由があった。第一は、大学生たちの自然体験があまりに貧弱で、子供の時に体験しておかないと後追いでは得られないと考えたことである。第二は、すでに大人になってしまい、子供の頃のことを忘れてしまったので、教育学として子供を学び直したかったからである。

大学内の農園（彩色園）での実習だけでは、自然体験は不十分であるので、奥多摩地域に実習の場を探した。その中で、当時、中込卓男が五日市町の戸倉小学校で「秋川自然探検隊」という教育実践をしていたこと、宮本透の老家が五日市町にあったこと、この2点で、五日市町の協力も得られ、五日市青少年旅行村を借りて3年間（1988～1990年）、東京学芸大学公開講座「子供のための冒険学校」を実践した。大学公開講座に子供向けを加えることに、大学本部事務局担当係長は賛成しなかったが、横で論戦を聞いていた文部省出向の若い女性主幹が認めてくださり、相応の予算を与えていただき、テントなど十分な装備をそろえることができた。この3年間はとても充実していたが、二つの理由でキャンプ地を移動することになった。一つは、小川泰彦らが留年してまでして旅行村内に建設した小屋があまりに立派であり、地主管理者から建築法に抵触するので撤去せよと求められ、これを理不尽だと考えたことである。この小屋は撤去した。二つは、忌まわしい事件が同時期に現地近隣地で起こったからである。このために、別のキャンプ地を求めることになったが、容易に借地できる場所がなかった。

そこで、高本文雄先生のご助力を得て、林野庁経由で秩父営林署管内の造林宿舎・大河俣小屋を借りて、小西司が中心となって改修した。重ねて、中津川キャンプ場（幸島管理）を借りて、第4回から第13回冒険学校（1991～2000年）を秩父の大滝村で行うことになった。大滝村エコミュージアムのビジターセンターとして地区公民館を借りて富士フィルム・グリーンファンドやサンワ緑基金の助成を得て整備した。中津川キャンプ場、大河俣小屋、および民宿中津屋（山中進夫妻）、甲武信小屋・十文字小屋（山中一族）、秩父

営林署他の協力を得て、非常に自然度の高い秩父山塊において、ダイナミックな野外活動を展開した。文部科学省の環境教育教員研修などもグリーンスクールで開催した。ところが、また、地元の地権争いがあり、ビジターセンターを撤去せざるを得なくなり、第14回は東京学芸大学の農園（彩色園）で、第15回は同じく「ぬくい少年少女農学校」として実施し、ここで大学公開講座としての開催は停止した。2003年以降、冒険学校は自然文化誌研究会主催で、小菅村で開催を続けることになり、ぬくい少年少女農学校は東京学芸大学の農園（彩色園）で学生サークルちえのわが引き継ぐことになった。この間に、コカ・コーラ環境教育賞（1996年）を受けた。

自然文化誌研究会の事務局は野外教育実践施設（現・環境教育研究センター）、木俣の研究室に置いていたが、同僚教授から特定NPOの事務局を施設に置くのはよくないとの強い異論があり、本多事務所を借りることになった。自然文化誌研究会が連携して、多くのプロジェクトを可能としてきたのだが、彼の正論には抵抗できずに移転した。

その後、東京学芸大学との社会連携協定により、小菅村の中央公民館に事務所を置いて、植物と人々の博物館の展示を行っていたが、これも現村長になって、耐震工事を理由に出されてしまった。現在は、木下稔理事の好意で、倉庫を借用して、村内移転している。

4) 日本環境教育学会

日本における環境教育学会の創業には自然文化誌研究会の面々が事務局として重要な下働きをしたのだが、公的な文書や書籍には事実として記述されてはいない。有名有利やメディアを避けて、地道な現場実践と自律した理論構築の作業を続けているのだが、このくにでは、名利を声高に言わなければ、無名非利の任意な市民活動や調査研究の成果は世間に知られず、黙殺され、無かったことになる。たとえ一時有名になっても、学問・思想すら商品とされて、情けないことに消費され、売れ残って賞味期限が過ぎればゴミ箱に捨てられる。

1974年4月から東京学芸大学職業科農学教室の助手になった。中学校職業科という教科は、他教育学部では中学校技術科（工業）に大方編成されたにもかかわらず、東京学芸大学は規模が大きかったので残存して、農学教室は主に農業高校教員、商学教室は商業高校教員の養成をしていた。教員免許職業科は残存していたが、すでに中学校ではこの教科は実質上なくなり、養護学校（現在の特別支援学校）にのみ、有効であった。いわゆる特殊教育・障害児教育には、農耕・園芸作業が機能改善に有効であるとするモンテソーリ・メソッドの影響が強かったからであろう。

文部省教育大学室長からは「職業科を廃止せよ」との行政指導が強くあると聞き、就職したとたん「農業教育」は不要だと冷水をかけられた。年齢も大して違わない学生たちも、役立たない職業科教員免許とこの理不尽に不満を抱いていたので、何とかしようと考え出したのが、農業を基盤とした「環境教育」であった。教授たちは不賛成、助教授たちは何とか賛成してくださったので、環境教育研究会を創ることになった。事務担当として文書の草案はこの助手がほとんど作成していた。環境教育研究会は3人の助教授が唱道して創立したと当時の教育新聞に載った。研究会の事務作業は助手の仕事であり、研究会の準備、雑誌の編集、経理など、ほとんどの裏方を喜んでしていた。

その後10年ほど、環境教育研究会の事務方は続けたが、残念ながら先細りになった。代表助教授の功名心の強さが人々の集まりを阻害したのだろう。この経験から、以後心して、私利私欲と有名有利を一層戒め、マスメディアを避けて裏方に徹した。志を達成するには多くの人々の助力が必要で、ほんとうに無欲でなければ、誰も援助はしてくれないことを、大学就職2年目で心にしみて学んだのである。

低迷した環境教育研究会を離れて、日本環境教育学会準備会を始めることにした。前轍を踏まないように、3年間かけて、周到に呼びかけ人を500名ほどに増やしたところで、日本環境教育学会を創立する戦略をとった。自然文化誌研究会が着実な地ならしをしていたのである。

また、農村開発企画委員会の石川英夫専務理事が第1回野外教育セミナーの開催告知（たった2行程度）を新聞で目にとめられ、明峰哲夫の都市を耕すが話題であったので、聞きにお越しくださり、その後とても親切に支援してくださることになった。森とむらの会を創るので参加するように誘っていただき、石川先生の紹介で森とむらの会の高本文雄会長にお引き合わせいただいた。この時から高木先生は行政学の老師とな

ったのである。彼は大蔵次官の後、国鉄総裁など多くの役職を歴任された。もちろん自然文化誌研究会会長もしてくださった。こんな偉い方と会議や研究会の後で、石橋隆明事務局長と3人で、奥様には内緒で、親しくビールなど飲んでいたとはだれも知らないことであった。高木先生は願いを大方聞いてくださり、先生のかばん持ちということで、多くの省庁長官・次官・局長など高級官僚にご紹介くださった。ただし、高木先生もその王道通りに、決して政治家には私をご紹介してくださらなかった。

しかし、この国は{注：漢字と平仮名は使い分けしている。私は日本くになが好きだが、国にはちょっと抗っている}、志を実現するためには、もちろん政治家と高級官僚の支援が必要だ。義父がたまたま建材業界団体の会長だったので、訳も解らずといっちは余りにも有り難かったのだが、娘婿のために当時の中曽根総理大臣の政治団体理事長に紹介してくれ、環境教育の大事さを申し上げた。遠藤理事長は自由民権運動の壮士のような風貌の方で、私が真摯に国事を思っていることだと快くご援助を約束してくださった。中曽根総理は大学（旧制静岡高校）の先輩でもあり、ご当人もご存じないところで、多分秘書が環境教育の推進に手を貸してくださったのだろう。このような経緯で、日本環境教育学会は創立に至った。高木先生のおかげで、北山財団の助成もいただいて、準備会事務局の運営もでき、自然文化誌研究会の岩谷美苗初代事務局長、小川泰彦第2代事務局長や小松真木子さんが手伝ってくださった。こうした黒衣が水面下で誠意を尽くして働いていることは大方の人々は知りもしない。自然文化誌研究会の皆さんの協力を得て、人知れず縁の下の作業員である事務局（企画調整）担当として、日本の環境教育学会を創業した（1990年）。もちろん、世間向けに会長は偉い方々になるもので、沼田真先生にお願いした。



野外教育シンポジウム、上；正門の案内看板、中；INCHメンバーによる開会の挨拶や司会、下；石川英夫先生の講演。

5) 雑穀研究会

自然文化誌研究会は創立当初から、雑穀栽培と調理に関するフィールド調査研究を主課題にしてきた。このために事務局として雑穀研究会を創立した（1988年～2003年）。阪本寧男先生に会長を引き受けていただいた。『雑穀研究』の発行、シンポジウム・研究会の開催準備などをしてきた。特に、第2回シンポジウムや家庭栄養研究会・雑穀シンポジウムは東京学芸大学、第3回シンポジウムは上野原町、第16回と第26回は小菅村で開催した。

6) 自然文化誌研究会のNPO法人化

財団法人化することは頓挫したので、東京都の担当職員廣島照久さんの勧めで、NPO制度ができてすぐに、中込卓男代表理事で東京都に登録をした（2004年）。

7) タイ・日本自然クラブ

タイから環境教育視察団が来訪し（1994年）、翌年にUNESCOの講師としてタイに呼ばれ、ラダワン・カンハスワン先生と意気投合して、ラジャバト・プラナコン大学大学院の客員教授を引き受けた。以後、相互交流を深めて、タイ・日本自然クラブを創り、大学間でも学術及び学生交流協定を結んだ。



8) エコミュージアム日本村

大滝エコミュージアムの発展を求めて、このくには日本村がないので、小菅村の長老方の賛同を得て、エコミュージアム日本村を始めた（2005年）。村民有志とミュージアム研究会を作り、学習会を続けた。日本の山村に伝承されてきた伝統的知識体系を学習し、環境保全・創造する活動を通じて、持続可能な地域社会を形成する市民活動である。山住の縄文文化の系譜を受け継ぐ山村の暮らしから地域社会の社会的共通財、自然や生業の在り方を学ぶ。学校で伝達される科学的知識体系に、山村で体験する伝統的知識体系を加えて、自ら学び、調和の取れた世界観を鍛錬する。植物と人々を巡る伝統的智恵を受け継ぎ、秩父多摩甲斐国立公園内での山村振興モデルを提案する。この間、三菱UFJ環境財団寄附講座助成、東急環境財団助成、森林環境基金助成等を受けて、冒険学校やログキャビンづくりなどを実践活動や研究プロジェクトを行ってきた。



9) 植物と人々の博物館

ミレット・コンプレックス創立（2003年）、雑穀栽培講習会を開始。ミレット・コンプレックスを植物と人々の博物館に改称し（2006年）、エコミュージアム日本村のコア博物館として、自然文化誌研究会のプロジェクトに位置付けた。東京学芸大学との社会連携協定に基づき、小菅村中央公民館に置き、小菅村の民具整理とその展示を中心に作業を進めた。環境教育研究センター、環境デザイン研究室、文化財修復研究室などの協力で、学部生、院生の実習の場としても活用した。

生物多様性条約締約国会議（2010年）COP10においては、「タネと人々の未来作業部会」として、NPO団体、名古屋大学、筑波大学の研究者らとポジション・ペーパーを提出し、ブース展示も行った。



小菅村の雑穀栽培見本園



上野原市西原の雑穀栽培農家



10) 雑穀街道普及会

FAO 世界農業遺産とは、伝統的な農業と、農業によって育まれ、維持されてきた、土地利用（農地やため池・水利施設などの灌漑）、技術、文化風習、風景、そしてそれを取り巻く生物多様性の保全を目的に、世界的に重要で、持続可能な農業の実践地域を FAO（国連食糧農業機関）が認定するものである。FAO も大いに反省したのか、大規模農業の称揚のみから、小規模家族農耕の重要性を強調するようになった。日本ではほとんど無視されてしまったが、2014 年は国際家族農業年であったようだ。FAO 世界農業遺産は、第一に、先祖の生業の歴史、暮らしの基層にある伝統的知識や技能を受け継ぐ責任と誇りである。観光客が増えるとか、助成金がもらいやすくなるとか、これらお零れは二の次のことである。学術的な内容保証が求められてもいるが、現実には行政主導でその担保がなくてはならない。

自然文化誌研究会の成果に基づいて、雑穀を栽培する生物文化多様性が日本でもっとも豊かに保たれてきた地域、多摩川水系の丹波山村、小菅村から相模川水系の上野原市、相模原市緑区までをつなぐ道を、雑穀街道と呼ぶことにした。この雑穀街道に沿って、今も雑穀など作物在来品種を多様に栽培している山里が多くある。山女魚養殖を初めて成功させた小菅村橋立、穀菜食による健康長寿で世界に知られた上野原市桐原、トランジション・タウンで知られた相模原市藤野などが続き、FAO 世界農業遺産に認定を受けるにはふさわしい地域と言える。

2014 年、雑穀標本を小菅村に移動、ローカルシードバンクを藤野に設置。第 34 回環境学習セミナー／小菅で雑穀街道の提唱。種市、藤野で雑穀街道の講義。2015 年、展示解説、雑穀栽培講習会、小菅村。雑穀街道展示、藤野倶楽部結びの家。雑穀料理教室、藤野倶楽部結びの家。生物多様性アクション大賞審査員賞。2016 年、展示解説、雑穀栽培講習会、小菅村。自給農耕ゼミ 7、藤野。上野原市保健センターで、雑穀街道の講義。自給農耕ゼミ 8、藤野。小菅村長および上野原市長に雑穀街道の提案。農水省環境保全官を訪問。2017 年、東京都公園協会講座で雑穀街道提唱・講義。関東農政局環境保全官を訪問。雑穀街道普及会の賛同者募集開始（伝統知シンポジウム＝第 39 回環境学習セミナー／藤野、エコ・プラスと共同事業、森林基金助成）。展示解説、雑穀栽培講習会、小菅村。

2018 年～2020 年、行政担当者に趣旨説明。2021 年、雑穀街道普及会の創立、上野原市長や相模原市長に面会して、趣旨説明をする。2022 年、桂川・相模川流域協議会で趣旨説明。2023 年、雑穀街道普及会は多くの方々や団体による協力があったにもかかわらず、地域行政や地元市民などの関心を得ることが充分にできなかった。国際的には FAO のウェブ・セミナーでも日本の事例として発表を依頼された。国際雑穀年であったにもかかわらず、国内の関心を得ることができずに、また、地域社会の生活文化に対する誇りの喪失、私利私欲および個人的名誉欲に阻害されて、目的の実現が困難であると判断して解散することになった。

11) 環境学習市民連合大学

日本村塾は2012年から試行を始めた。学びたい人々が学びの本質を探り、互いに学び合いたいと考えた。不定期に、自給農耕ゼミ、扶桑こくゼミ、民族植物学ゼミ、環境学習会などを実施してきた。さらにこれを進めて、ネット上で「大学」を創ることを考え付いた。

市民社会の自由、平等、友愛を基本原則として、自らが環境を学び合う市民連合大学を、市民による環境学習の普及、深化を目的としてインターネット上に創立した（2021年）。原初の大学は学び合いたい人々が存在するだけであった。学ぶ意味や大学について改めて考え直したい。入学資格、試験、授業料、卒業資格はない。大学の芽生えは、12世紀ルネサンスの先駆けとして、社会の基礎を造った。人新世に再びルネサンスを起こしたい。運営協働団体及び個人：小金井環境市民会議/環境学習部会、NPO こがねい環境ネットワーク、NPO 自然文化誌研究会/植物と人々の博物館、NPO 環境文明 21、福田恵一、渡辺隆一、木俣美樹男。

12) 財団法人森とむらの会との連携

この会は、森林、林業、木および山村が、国土の保全、国民経済の均衡ある発展、良好な生活環境・自然環境の形成、健全な社会文化の育成など多面的かつ重要な機能を有することに鑑み、これらに関する諸問題を、経済、社会、文化、科学技術、国土利用、人間生活などの各視点から、総合的、実態的に探究するとともに、その成果を広く国民に普及啓蒙することにより、緑豊かな国土の育成と国民生活の向上に資することを目的としていた。

この会の高本文雄会長は、自然文化誌研究会の会長も引き受けてくださっていたので、いろいろなご援助をいただいた。日本環境教育学会創立、JT クロスカルチャー大賞による中央アジア学術調査隊もご支援を受けた。自然文化誌研究会は、森とむらの会の志を受け継ぐべく、財団解散に当たって、全ての資料を預託されたので、これらは植物と人々の博物館に収蔵している。なお、関連書籍はNPO さいはらに貸し出している。



森とむらの会、檜原村の林業視察旅行：高木先生を囲んで、田中惣次さんほか、林野庁幹部、大林業家ほか。

13) 東京学芸大学との連携

日々の研究や講義、会議に加えて、プロジェクトなどを実行するには大学の教職員はあまりにも少ない。このために、自然文化誌研究会や市民活動団体との連携は、とても有効であった。こうした団体や市民がいたから、現在の環境教育研究センターが創業でき、彩色園（旧農場）も守り、有効にコモンズとして活用できた。

環境教育研究センター（現在の名称）の創業にあたって、環境教育学会づくりは戦略的な必要性によるもので、第二義的であり、本来、第一の意義は新たな学問、環境教育学の構築であった。農業教育は不要との中央政府の政策により、当時の文部省教育大学室長から附属農場（学則、学内措置）廃止の強い行政指導があった。学内からも、駐車場、サッカー場、第2附属高校、小金井市からは廃棄物処理場にせよとの提案

が続いてきた。

農業関係の諸先輩にも助力を求めたが、彼らも農業技術や行政に携わる人たちで、農業教育の必要性を認めてくれなかった。いまだに、林業関係者に比べると、農業関係者は一般教育としての農林業に冷淡だ。孤立無援であった。そこで、農業学習を主要な基礎とする環境教育学の構築へと発想を変えざるを得なかった。農場を守るために、環境教育施設に改組する概算要求を続けた。この過程で、高本文雄先生ほか多くの方々の助力を得て、改組は認められ、附属野外教育実習施設（文部省令）が創立できた。文部省側は「環境教育実習施設」を認めず、名称を「自然教育実習施設」にするように指示してきた。抵抗の結果の妥協点が「野外教育実習施設」の名称である。その後、さらに改組拡充の概算要求を続けて、「環境教育実践施設」になった。この間、他大学では、農場から「〇〇環境教育センター」への改組が続いた。教育学部農学関係の先輩方からは、けしからんと言われていたが、結果的には他大学にも波及して全国で数か所の農場を環境教育センターへの改組の方向で守ったことになり、後に「君は良くやった」とお礼を言ってくださる方も少しはあった。現在では、多くの学生、生徒、教職員、市民が彩色園（農園）を活用してくださり、人知れず満足している。

「環境教育推進法」のことを記録しておきたい。せっかく、日本環境教育学会も創立し、2,000名の会員を迎えたが、この10倍の20,000人の会員を獲得して、日本医師会ほどの影響力を持たないと、日本の環境問題を解決に導き、「受験体制」教育の在り方を良い方向に変えられないと考えていた。でも、そのようには発展しなかった。学会の運営から外れて、第一義的に重要な環境教育学の核心である「環境学習原論」の構築に専念していた。そこで、第三義的な戦略として、環境教育推進法をアメリカに習い日本でも制定して、環境教育の発展を期すことにした。環境文明21の藤村コノエ代表に助力を求め、一緒に国会議員に請願するロビー活動をした。学習会やシンポジウムに多くの国会議員も参加してくださり、超党派で議員立法されることになった。参議院本会議の議決まで傍聴に行き、3名の反対があったが圧倒的多数で法案は成立した。NPOによる提案が議員立法されるのは、民主主義のもっともな道筋だ。

ここに至るまでに、日本環境教育学会の運営委員会に、私はすでに1会員に過ぎなかったにもかかわらず、呼び出されて、「環境教育は法になじまない。怪しからん考えだ。」などと、お説教を受けた。しかし、成立してしまえば、そのような意見は忘れ去られ、お説教なされたご本人たちも、自分たちの成果のようにふるまい、活用せよとばかりに変節してしまった。最初の提案者が誰かは文部科学省や環境省の有力者も知っていたはずだ。したがって、具体的に運用する委員会に呼ばれ、とても忙しくなることを恐れたが、まったくお呼びはなく、提案者の趣旨は黙殺された。第一義、学者として暮らす自分の時間を失わずに済んだので、結果良しなのだが、とても不条理を感じた。環境省が閣法として提案できずにいたので、渡りに船と議員立法に乗り移り、換骨奪胎しようとしたのだろう。

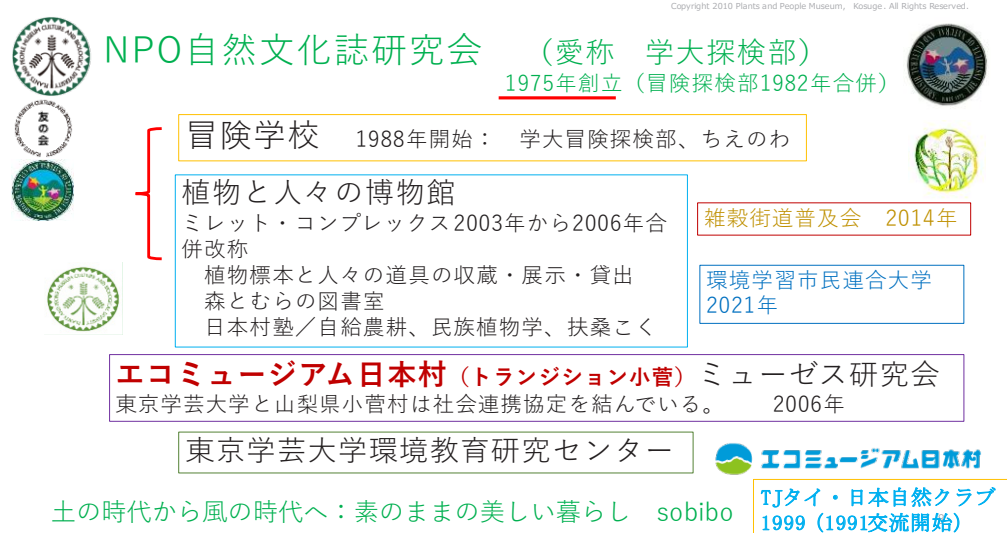
14) 山梨県小菅村との連携

自然文化誌研究会が関東山地における雑穀栽培と調理の調査研究を始める切っ掛けは、山梨県上野原町桐原が小守豊甫医師の長寿村研究に触発されたからである。1972年頃、阪本寧男先生が風邪を召して、三島の国立遺伝学研究所研究補助員の実家尾上医院に視察を受けに行った際に、『健康医学』誌に雑穀で長寿の村があることを読んだからである。東京で就職するのなら、この地域で文化人類学調査のトレーニングをせよとの教唆をうけたことによる。ここから、定点研究の地域としてお付き合いが続いてきた。

井村礼恵は小菅村の「すげのこ祭」にて、1996年から学生実習を始めた。雑穀・蔬菜の在来品種の追跡調査（1998年、住友環境財団助成）、「のびと講座」の開催（2002年）、ミレット・コンプレックスを開始（2003年）、主たる活動拠点を小菅村に定め、雑穀栽培講習会を開始した（2004年）。文部科学省現代的教育ニーズ取組支援プログラム「持続可能な社会づくりのための環境学習活動～多摩川バイオリージョンにおけるエコミュージアムの展開」（2005年）が採択されたので、小菅村でミューゼス研究会を、村民を中心に組織した。ヒエ焼酎の試作を笹一酒造に委託した。小菅の湯レストランにて、雑穀メニュー、雑穀クッキーなどの商品化を試みた（小金井夢基金助成）。

第1回多摩川流域エコミュージアム・ネットワーク・シンポジウムを開催、エコミュージアム日本村/植物と人々の博物館づくりを構想して、中央公民館に整備を始め、東京学芸大学と社会連携協定を結んだ（2006

年)。第2回シンポジウム開催、特別展示「雑穀展」を開催した(2007年)。第3回シンポジウム(2008年)、特別展示「インドの雑穀と生活文化」・「山村を支えた養蚕」を開催、雑穀発泡酒「Sobibo ピーボ」を開発、日本エコミュージアム研究会第15回全国大会を開催した(2009年)。雑穀研究会シンポジウムを開催した(2012年)。



まとめ

この様に、現場で自ら働き、かなりの仕事を成したと自負しているが、現実には黙殺されてしまった。民主主義の時代で、暗殺こそされなかったもので、それでも良しとせねばなるまい。自己の名利を言いつのり、売り込まないので、仕事量の割にはあまりに無名である。それで個人として子供の頃からの信条だから構わないが、自然文化誌研究会のせつかくの膨大な成果が正当な評価を得ず、趣旨が世間を良くするために普及していないことのみがまことに悔しく、無名は無力に等しいこの国の先行きが悲しい。

環境教育実践施設は、やっと名称変更して、環境教育研究センターになった。国立大学が法人化されたので、名称は文部科学省令による必要がなくなったからだ。20人規模の研究所にしたかったが、大学幹部からは「あんたは頭がおかしい」と一蹴された。しかし、引退して3年ほどたつが、いまだに数多くの環境・教育課題が解決していないばかりか、さらに深刻化しているにもかかわらず、環境・教育を学ぶ意味が深く探求されなかったことに、とても無念を感じている。意味・信念あるいは思想・信条がなければ、人の行動は浮動し続ける。家庭や地域社会、この国や地球規模であれ、自然環境のうえで暮らす私たちにとって自然や生業の教育はもっとも基礎的な学習行動だ。不登校が10万人以上、自殺者が3万人前後、高い地位にある人や学歴ある人の犯罪も少なくない。教育関係者は猛省し、職業的誇りを回復して、社会を改善するため、本気の「教育学原論」を求め、子供たちに向き合ってほしい。

外見流行と内面不易を対比させて、環境・教育関連の教育・研究組織の創業、環境教育推進法の成立の顛末を、個人史的事実として記録しておきたい。第四紀人新世が幸せな時代になるようにするには、せめても環境学習を再生し、心の構造と機能を築き直さねばならない。進化の基盤である自然知能 NIn の再生はAIでは代替できない。いずれ近い機会に、再認識することになるだろう。第四紀人新世はカリ・ユガの時代なのであろう、まっとうに暮らすだけで、修業になるとカラス仙人は言った。



興農学園農場跡の石碑” Boys be ambitious.”

事務局の覚書

小川泰彦（三代目事務局長）

自然文化誌研究会事務局員として十数年お世話になった。本会の主催事業の理念や意図や成果・内容などは他で紹介しているので、事務局しか知り得ない話や誰もあまり覚えていないであろうことを思い出すままにつらつらと書き記すことにする。

◇会報ナマスデ

現在も発行している会報「ナマスデ」。もちろんヒンディー語の「ナマスデ」からきている。会報名は何にしようという話し合いの時に、いろんな意味で本会に縁のあったインドの、清濁もろもろを飲み込みながら静かに流れるガンジスのイメージが重なっている。当初印刷を頼んでいた印刷屋のおじさんが、出来上がった会報をくるんだ紙にさらっと書いた「ナマスデ」の文字の力の抜け具合やさりげなさが秀逸で、ぜひ会報の題字にしたいとおじさんに許可を取りに行ったら、快く OK してくださった。会にまったく何の関係もないおじさんの字ですが、現在も使用していますね。

◇キッズ会報

子供の会員の拡大に伴い、子供向けの会報も作るようになったが、担当することになったのが残念ながら私だった。最初の数回はおとなしく作っていたが、不真面目な私が我慢できるはずもなく、徐々にアクセルを踏んでいったら手が付けられなくなった。年始の目標に「鼻くそを食べない」だの、しょんべんのポエムだの、会員の失敗やドジの暴露だのとやりたい放題であった。私のガス欠で最終回を迎えたが、各方面にご迷惑をかけたと、深く反省しておる次第です。

◇一心堂ビル 本会初の事務所

本会も大学にお世話になっているばかりではなくて、校外に事務所を構えようと不動産屋をめぐり、見つけたのが国分寺駅北口徒歩8分、鉄筋3階建てで赤紫が印象的なアパート一心堂ビルである（現在は取り壊されているのかな？）。その一部屋を事務所として借りることになったが、昼は学生のたまり場、夜は雀荘とひどい有様であった。結構高い家賃で維持費が大変で、当然本会のお財布事情から長持ちするわけもなく、引き払うことになった。

◇五日市冒険学校（詳細は冒険学校のあゆみ参照）

① きっかけなど

現会長が在職していた東京都五日市をフィールドにして、野外環境教育への思いを形にする試みの第一弾がスタートした。今でこそよく見られるようになったが、1週間という長期にわたって自然の中での生活をメインにした野外活動は当時としては非常に珍しかった。だってみんな日帰りか長くて2泊3日が多かったんだもん。自然の団体が集まる話し合いとかで、1週間のキャンプを実施していますと言うと、「ええっ！！」と驚かれ、安全面に配慮しスタッフ数は参加者と同数以上ですという「えええっ！！！」とのけぞられた。しかし、活動に文化的な視点を多く取り込んでいることが本会ならではの特色であって、個人的にはちょっとした自負があった。「パイオニアワークやっちょるわああっ！」と思っていたのだ。

② 募集

大学の公開講座として実施することで、東京都の全小学校に教育委員会を通じて参加者募集のポスターを配布した。色紙こそ使っているが単色で手作り感満載のつたないポスターであったが、教育系大学の子供向け公開講座というネームバリューもあるのか定員オーバーの申し込みがあった。参加者のすべてを受け入

れると安全が担保できないので参加希望者に作文を書いてもらって参加者を決めていた。集まった作文を読んで選考するのが癖の強い私たちであるので、素直な感じの子よりも、ちょっととんがってる子や専門性や独自性の強い子を選びがちだったように思う。親が書いていたら「はいだめー！！」とか言ってたなあ。ただ参加をお断りすることは、やはり断腸の思いであったので、この受皿として小キャンプの開催をするきっかけともなった。

③ 山小屋

五日市青少年旅行村（キャンプ場）を拠点にして開催したが本部が行事用テントでは不便ということもあり、会員から募金を募り、キャンプ場内に小屋を建てて倉庫兼本部として活用した。ど素人の大学生が見よう見まねで1年かけて作った粗末な建物であったが、建築基準に則らないものであったため、のちに取り壊しとなった。崩壊してけが人が出る前に取り壊しとなったことに、ちょっとホッとしたことが懐かしい。

④ 事故と事件

自然の中で人様の子どもを預かって、事故など起こしたら子ども・親にも申し訳なく、活動自体も即ストップ、責任の取り方も大変である。みんなが無事に帰ることが最優先であり、冒険学校が無事終了したことがわかると、全身の力が抜ける思いであった。日ごろの準備・トレーニングがしっかりしているだけでなく、参加者と同数のスタッフをそろえること、開催場所を熟知することで、本会の無事故記録は現在の小菅まで続いている。ありがたいこっちゃ。しかし、日本を震撼させる某大事件が開催場所である五日市青少年旅行村の徒歩数分の所で起こった。冒険学校への実害らしきものがあって（勘違いかもしれませんが）、肝を冷やしたことを記憶している。

◇大滝村冒険学校（詳細は冒険学校のあゆみ参照）

① きっかけ～大河俣造林宿舎

財団法人「森とむらの会」の事務局長石橋さんから紹介を受け、埼玉県大滝村の大河俣造林宿舎を次の活動の拠点とすることになった。埼玉県大滝村にお世話になるきっかけとなったのがここである。初めて行ったときに、舗装道路が終わって、落石ばらばらの砂利の林道を車で登って行きながら、テンションが上がっていったことを今でも覚えている。人里離れた自然真ただ中な感じ居心地よく、野外キャンプ活動には最適であった。床の張替えやトイレなど自分たちで改修して、大滝村冒険学校の川コースの拠点となった。未だに建物自体はあると思うのだが・・・。

② 中津川村キャンプ場

大滝村中津川集落の中にあり、電気ガス水道水洗トイレ完備の快適なキャンプ場であるが、周りのダイナミックな自然はそのままで、村コースの拠点として活用した。朝からビール、昼から秩父錦（日本酒）の酒豪オーナーに大変お世話になった。大滝村の広大な山林を所有するお大臣で、視野も広く寛容で私たちを快く受け入れてくださった。酒だけでなく麻雀がえらく強くて何とか打ち負けそうと夜な夜なチャレンジしていたことが今では懐かしい。現在は息子さんが後を継いでいるので、機会があったら中津川村キャンプ場へ是非どうぞ。

③ 大滝村ビジターセンター

大滝村エコミュージアムの拠点として活用すべく、地区の公民館として使っていた建物をお借りした。大滝村を訪れたいろんな人が立ち寄れる情報拠点・装備全般の収納倉庫・会員の宿泊施設として活用した。中津川地区の中心地で非常に使いやすく便利であったが、地元の青年団との宴会場、朝まで雀荘という使い方が多かったのはここだけの話。ビジターセンターの土地所有者同士にトラブルがあり、大変ややこしい話になったので、あえなくビジターセンターを放棄することとなった。大滝村を去ることになったきっかけの一つ。



④ 甲武信小屋と登山道整備

大滝村冒険学校の山コースは、甲武信岳登山と甲武信小屋を拠点にした活動がメインであった。大滝村冒険学校終了後も、登山道整備としてしばらく小屋にはお世話になった。3つの川の源流であるその地域は、シーズンにはピンク色のアズマシクナゲが登山道を彩る。その保全が十分行き届いていないという小屋の方の言葉を受けて始まったのが登山道整備活動であった。甲武信岳に登るだけでも大変なのに、登ってから本番の肉体労働が始まる。「整備を手伝いますよ」と軽い気持ちで臨むと、痛い目をする本会屈指の重労働であった。ただし、人生で一番うまい日の丸弁当と、極上の夕食カレーが食べられ、しかも2000m越えの山頂で風呂に入れるというおまけ付きの活動はコアなファンを引き付けた。

⑤ 大滝のおばあおじい

大滝エコミュージアムの大きな売りの一つが、地元の普通のおばあとおじいであった。昔ながらの栃餅やツトコづくり、炭焼きや竹細工の講師として招き、アクティビティーとして成り立たせたり、通訳(?)したりする役をわたしたちが受け持っていた。最初は恥ずかしがるじじばばたちだったが、さすがにそこに住んでいる人たちの話や所作には説得力があり参加者から大好評であった。また、参加者が喜ぶ姿をみて、おばあおじいたちが地域の何気ない生活文化の価値を再確認しているようであり、そのことは私たちにとっても大きな喜びだった。いまだご健在の方、すでに旅立たれた方、本当お世話になりました、感謝しております。

◇四季折々のテーマキャンプ

夏の自然体験活動だけでなく、いろんな季節に気軽に自然体験活動ができるようにと、2泊3日程度のキャンプを行ってきた。会員非会員関わらず参加できて、1年を通して様々な自然体験活動ができるようそれぞれに特色を持たせたキャンプであった。会員の交流の場ともなり、新規会員の冒険学校に参加できなかった子の受け皿ともなった。

新緑キャンプ・もみじキャンプは大滝村の春の新緑や秋のもみじを楽しみながら、その季節の郷土料理づくりや自然体験を行った。地元のじさまばさまの自宅に直接行って、その軒先での活動することもあった。野生キャンプは秩父の自然の中でちょっぴりレベルの高いサバイバル感のある活動を行った。例えば、西武秩父駅から大滝村中津川地区までの約40キロを野宿しながら踏破したり、食料を極力持たずに自然のもので調達したりした。クリスマスキャンプは東京都桧原村の林業家の田中さん所有のログハウスをお借りして、冬山登山・ペーゴマ回し・凧飛ばしなど活動し、特に超でかプリンが名物だった。雪中キャンプは三菱UFJ環境財団と協力して、群馬県水上町の雪山でキャンプを行った。雪洞を掘りその中で寝たり、雪景色を楽しみながらのドラム缶風呂に入ったりして好評であった。

これらは現在の小菅のむらまつりキャンプやまふゆのキャンプにつながっている。



冒険学校の答え合わせ

岩谷美苗（二代目事務局長）

年2回ぐらい、うちにしょーこやけいちゃんが遊びに来て「ヤスに会えると思ったのにーいないの!？」と文句を言われます。なぜか「来んな」というヤスが好かれるのか? 「みんなに会いたい」と思っている私を、もっとありがたがって欲しいものです。全くこの人たちは子どもの頃から変わりません。しかし冒険学校に参加していた子どもたちと、まさかこんなに長く付き合えるとは思っていませんでした。

冒険学校を始めた当初は、参加した子たちの将来は「どんな中学生になるのかな?」ぐらいなもの。中学生のジュニアリーダーの子たちも、高校になったらきっと来なくなるだろう。と思っていました。でもあの子たち、ふらっと来るんです。気がつくと、もう参加者たちは30-40代。「あの子がこうなるのか!」と、解答がまるでドラマのようです。

一番面白かったのは、R君。いつも来るんだけど、まったく喋らないし、片隅で一人座ってプラモをいじっているという参加スタイル。何が楽しいんだか、毎回来るんです。私もたまに「やる?」と聞いたり、「ちょっと手伝ってー」と頼んだりする程度で、ほぼ放置していました。でもなんだかR君が来ると、うれしかったんですよね。その彼が大学生になって、どうなったと思います? 真っ赤な車で乗りつけて、サングラスかけたチャラいのが出てきたと思ったら「ミナエさん元気い?」と、すごいしゃべるし! まさかR君だなんて! 「ウソでしょ? あんた誰よ」と言いました。キャラの変貌ぶりに驚愕です。いったい彼に何があったのでしょうか?

今R君は、仕事の合間に森林ボランティアリーダーをしているみたいです。当時冒険学校に参加していた子たちは、その体験が生かされているのかいなのかわかりませんが、まさか放置だった彼が森林ボランティアを続けているなんて…一番環境的なことやってんじゃん!

あの時、「なんであの子だけ一人で違う事やるの? 注意しないの?」と同調圧力が強かったら、違っていたのかもしれませんが。「冒険学校は好きなことをして過ごす」というのが前提にあったので、参加していた子どもたちも自然に彼の存在を認めていたと思います。冒険学校が彼自身の人生に関係



しているとは限らないですが、少なくとも邪魔はしてなかったのかなと…。むしろ彼のような存在が、冒険学校の自由度を上げてくれたとも言えます。違うことをする子は「空気読まない」とか煙たがられるけど、自由度を上げ、間口を広げてくれる大事な存在なんだと今になって思います。しかも、そういう子は大物になる可能性が大きいので、今後もそういう子がいたら、暖かく見守ってあげて下さい。

もう一人S君。私は樹木医という仕事をしている関係で、最近樹木を介して冒険学校の参加者から連絡がありました。当時の懐かし話から、S君の保護者から以下の感想をもらいました（抜粋）。

「本当は次男のために兄弟で申し込んだのですが、長男の方がドマハリしました。それまで「なんで勉強しないといけなのかわからない」と言っていたのが、それ以来全く口にしなくなりました。あまり自分の事は親には話をしない子ですが、1回目参加の後、鉱物に詳しい社長さんの話や、夜中じゅう話をしていたとか、川に飛び込んだとか、ヤスの話はよくしていました。こんな大人もいるんだという事、いてもいいんだという事に感動したみたいです。その後中学生になってアシスタントのような立場で夏冬参加したように思います。私にとっては、この冒険学校に参加した事が、息子の人生に大きく影響したと思っています。そんな長男も、もう38歳。今は化学系の研究者になって、中国に出国。たまに帰国しますが、スノーボーや魚釣りが趣味で、自由人のように楽しんでいます。私は生物の教員ですが、仕事が忙しく、冒険学校のようなキャンプは、理想の仕事です。」

私は30年後にこんな感動をもらえるとは思っていませんでした。「何で勉強？」と言っていた子が、研究者になるなんて！人間は面白いです。人って変わる時は180度変わるんだ！と目の当たりにした感じです。

この前グレートジャーニーの関野吉晴さんの講演を聞いたら、関野さんは過保護に育てられたそうで、そこから探検家になったようです。意外と探検部に入る人って「危険だからやっちゃダメ！」と言われてきた人かもしれないですよ。禁止されるとやってみたくなる的な？

他にも溪流の研究している方がいるんですが、その方はどぶ川のそばで育ったらしく、想像なんです。そういう人は溪流に魅了されたんじゃないかと思うんです。勉強嫌いでもなぜ勉強が必要

なのか知りたい子は、研究者になる素質がありますよね。反対に見えるけど、すごく密接。みんながみんな変わればいいのかという事ではないんです。多少成長したけど、ありのまま変わらない子は、それが面白いんです（しょーことか）。ただ、「勉強嫌い」のレッテルの裏には研究の可能性、「無口」のレッテルの裏には饒舌さの可能性が広がっていたんだと、今ありありと実感しています。まあ、うちの子たちは「なんで勉強しなきゃいけないの？」と言われ続け、何も変わっていないのですが。。

結論として「真反対の選択肢って、意外とアリ」というのが冒険学校で私が得た答えです。なので、「そういう子がいたなー」と思って今後冒険学校を続ければ、30年後面白い答えが待っているでしょう。気の長い話ですが、こんな面白いドラマはありません。



岩谷美苗（いわたにみなえ）
You Tube「樹木医の偏った植生活」
→みてね



2000 年～2025 年はこんな感じでしたか

黒澤友彦（四代目事務局長）

◇出会い

1996 年、東京学芸大学教育学部 N 類総合社会システム課程入学（当時流行りのゼロ免課程）

同年 6 月冒険探検部入部。入学後にバシくん（石橋勝也）が表紙の「冒探王（1996 年 2 月発行）」を購入して読んでいたため、冒険探検部の門を叩いた。あらたさん（長島新）の文章が斬新でした。

当時は自然文化誌研究会の事務所は国分寺市本多のアパート（一心堂ビル）。ヤスさん（小川泰彦）、みなえさん（岩谷美苗）、ピピノさん（日比野真士）などに会う。よく名前を聞くこまっちゃん（小松真木子さん）は亡くなった後だったので私はお会いしたことはない、という世代になる。

1997 年、「第 10 期子どもための冒険学校」にスタッフとして初参加。山コースでした。

1998 年、子どもたちとの関わりがあまり好きではない自分に気づく。自然文化誌研究会と冒険学校は楽しいので、本部スタッフに手を挙げる。使える人間になりかった。

2000 年、大滝村で最後の「子どものための冒険学校」に不参加（北アルプスで沢登りをしていた。自分で勝手に不完全燃焼状態になった）。

2001 年、自然文化誌研究会が大滝村からの撤収、同時に事務局長のヤスさんの引退の話があり（当時は教員採用試験に年齢制限があった）、会そのものの存続が検討されていたと記憶している。規模を縮小して存続するか、ここでおしまいにするか＝これについては、当時の事務局長のヤスさんは、幕引きは自身で行うという感覚があったと推察する。

自然文化誌研究会の運営委員会に出席させてもらっていたが、自分が後任をやってみたい気になっていた。ただしそれは承認欲求であり、「事務局長というステータス」を求めている情けない自分であったと振り返ることができる、いや今もその気持ちは鮮明に覚えていて嫌な気分になる。就職活動、教員採用試験の勉強という名目のもとに留年と休学をしていたが（人生に箔をつける的な感覚に浸っていた…）、実際には勉強なんてほとんどせず麻雀ばかりしていた。当時は就職氷河期とはいえ、それ以前の問題であった。

運営委員会で、ごみさん（中込貴芳・現副代表理事）あたりから「黒澤どうよ？」と声をかけてもらったのだが、その時には「僕を指名して！！」オーラを出していたと思うので、今思うととても恥ずかしい。そしてもしかしたら「子どものための冒険学校」「大滝村エコミュージアム構想」「JT クロスカルチャー賞」をはじめとするパイオニア・ワークを達成し、伝説を残したまま終了を迎える予定であった自然文化誌研究会を自分の小さい欲のためにズルズルと引き延ばさせてしまったのではないか…！？どうですか、先輩方。当時どう思っていたんですか？？？それから 20 年余が経ちました。どう思いますか？

◇4 代目事務局長スタート

2002 年 3 月、学部 6 年を済ませ卒業。4 月より自然文化誌研究会事務局長となる。職員は 1 人なので最初から事務局長である。事務所は現在の環境教育研究センターの事務室、自然文化誌研究会の給料は月 10 万円で、兼業として環境教育研究センターの非常勤職員（臨時農夫）を用意していただき、二足のわらじでの事務局生活が始まる。なお二足のわらじについては今も変わらない。今現在は小菅村の木下養魚場を兼業していて、数年後には後を継いで個人事業主になる可能性は今のところ高い。その時には 5 代目事務局長が誕生することだろう。

「子どものための冒険学校は」6 泊 7 日を月 1 回に分割して第 14 回として開催し、その後「公開講座ぬくい少女農学校」として、学大農園が舞台になる。ひっしー（菱井優介）、にっしー（西村俊）が活躍する。

大滝村以外の事業はそれぞれ継続していたので「タイ環境学習キャンプ」、「沙流川冒険学校（北海道二風谷）」に事務局として連れて行ってもらった。ごめさん（中込卓男・現代表理事）、ごみさんと行動を共に

することができた事は大きい。

かつてのフィールドである大滝村や檜原村に行ったりしつつ、会報ナマステを書き、苦手なキッズ会報を出したりしていたが、徹夜で出勤したり、飲み過ぎて遅刻したり、心は大学生のままで真面目に仕事していたとは言えない。引き継ぎも曖昧だった（自分から聞きにいけば良いだけのこと）。個人的には反省ばかりである。

学大に残っていたため、冒険探検部の部室に顔を出し、冒険探検部から派生した山岳サークルアンナブルナに顔を出し、大学時代に住んでいた大学寮（大泉寮）に顔を出し、要は麻雀・酒飲みなど後輩たちに絡んでいたわけで、邪魔な先輩だったんだろうなあと思う。他にやる事はねーのかよっ！！この非生産的で愚劣な日々を過ごしたという観念を共有できるのは雫さん（雫永法）だけである。

◇小菅村へ

あべちゃん（井村礼恵）さんに尽きる、あべちゃん自身のきっかけは木俣先生（木俣美樹男）であろう。あべちゃんは小菅村で研究を進め、小菅村が立ち上げたシンクタンク「多摩川源流研究所」の主任研究員であった。

あべちゃんとの出会いは、大滝村の冒険学校。学大出身ではないが、院生として学大に来ていた。私とは2つ違いで、私の姉貴のような存在のあべちゃんと話していく中で、かつての大滝村のような、フィールドとして、小菅村はどうかということで、小菅村という存在が浮上した。

2003年の「第二期ぬくい少年少女農学校」では、夏のお泊まりとして（現在も「ちえのわ農学校」で学大農園でのお泊まりがありますね）、小菅村の船木民宿へ。まだ、旦那の竹治さん（守屋竹治）が生きていた。

2004年、3月頃であろうか。私は単独で船木民宿に泊まった。これは業務で、5月より小菅村で自然文化誌研究会の拠点となる古民家を借りるための下見というか実踏であった。ちなみに古民家を借りるための選定や下準備を私は行ってはいない。私は言われるがまま、小金井に未練を残したまま小菅に移住をただけ。

2004年5月より小菅村での生活がスタートした。移住に伴い、学大農園での仕事が無くなったので、小菅村で山仕事や諸々の仕事、そして木下養魚場を紹介してもらい、古民家での一人暮らしが始まった。そこで足しげく通ってくれたのが佐々木さん（佐々木正久）、夏には3週間ぐらい一緒に生活したりしていた。大滝時代は顔見知りぐらいだった。

当時は自然文化研究会の会計状況も苦しく、車が無い。こんな田舎で車が無いというのは身動きが取れない。そして東京が懐かしくて当初はくすぶっていた。終バスで東京に行き、飲んで麻雀して始バスで帰ってきたりしていた。しかしながら、雑穀栽培講習会で雑穀見本園を担当したり（学大農園での経験が非常に有効だった）、村の行事に参加したりしていたが、とにもかくにも懐事情が厳しく、将来に対する不安は大きかった。

この古民家は小菅の湯の近くで非常に良かったのだが…若かったのも酒と睡眠を欲し、片付けをせずに飲み散らかし、仏壇があり大家さんがよく出入りしていたのでよく叱られた気がする。まだ「地域おこし協力隊」がない時代であり、多くの人が出入りする自然文化誌研究会は怪しい団体？に見られていたかもしれない。2年間でこの古民家はさよならすることになった（私個人はこの地区が小菅で最初に出会った地区なので思い入れがあり、後に我が家をこの地区に建てに戻ってくることになる）。

次に移転したのは、今現在「こすげ冒険学校」を開催している「いつものキャンプ場＝清水バンガロー」のある小菅村の橋立地区の古民家。当時は東京学芸大学の連携推進室と言うことで、多摩川エコモーション等の取り組みもあり、自然文化誌研究会が管理するけれども、学芸大の小菅村での活動の分室と言う立ち位置でもあったと記憶している。後に事務局になった菱井優介もこの時に小菅村に移住した。

いつものキャンプ場でログハウスを作っていた時期である。家のお向かいがいつものキャンプ場のオーナー

一である善さん（木下善晴）の自宅であり、その縁もあってよく飲みに来てくれました。これはとても大きな縁だったと思う。これを書いている2025年8月現在、善さんは92歳になった。頭はしっかりしているが運転を止めたので体と気持ちが一気に衰えたように感じる。畑をはじめ自分が主体的に関わる場所に行けなくなるということは当事者意識が低下する事でもあり、農山村における老いと運転っていうのは解決が難しいと感じるところ。そしてお世話になった人たちがどんどん年老いていくのを目の当たりにしている現在。

◇小菅村での活動

ということで、大滝時代に倣って冒険学校を開催した。当初は3泊4日、後に6泊7日にすることができた。ゴールデンウィークには「むらまつりキャンプ」、冬には「まふゆのキャンプ」、味噌作りなどの「のびと講座」など当時はよくやりました。参加者が集まらず、また事務局が2人体制っていうのが会計上とても大変でいつも苦しくて、理事の皆さんの寄付で成り立っていた、いや成り立っているとは言えないか…。

ちなみに自然文化誌研究会の会計について。収入は①年会費、②事業収入、③寄付、④補助金収入、の4本柱。「特別会維持会員」っていうのがあって、その人たちは年会費が10万円なんです（正会員は1万円）。創設から関わっている人たちの中には、自然文化誌研究会に1,000万円を超えるお金を使っていて、お金を出して労力も出していて、なんともまあ凄い人たちというか稀有な人というか…ということで、自分も事務局を降りることがあれば、「特別維持会員」になるしかないですね。50年の歴史は長いのか短いかわからないけど…それが正統？であり、前事務局長もそうしていました。経営は常に難しく、この業界で人並みの給料をもらうには、業務を拡大する必要がある、その業務には参加者が集まらなければならず、それもまた苦労。思いのある事業だけやる訳にはいかなくなる。随分前に、「給料下げてでも仕事を減らす」と言い張って（兼業の方である程度給料を確保できるようになったのも大きい）、今は主催事業を減らしている。妥協なのか、意固地になっているのか、このままじゃダメなのか、地に足が着いた形なのかはわからない。後になれば多分わかると思うが個人としては是非を問わずこれが一番動きやすい。毎年8月はゲロを吐きそうになるぐらい追い詰められ、9月になることを願っていたことは確かである。

◇小菅での冒険学校（「こすげ冒険学校」ほか）

当時はデジカメはあったもののガラケーでした。今現在2025年の冒険学校の運営は、グループLINEを事前に作って情報共有。冒険学校本番の最中もフル活用して情報共有しています。それに比べれば、アナログな時代で、事前ミーティング、反省会は直接会ってやっていました。井村家がいつも会場を提供してくれました。情報共有はメールと掲示板。小菅での20年間を思い返すと、20年間フル参加しているのは事務局の私だけです。それはもちろん業務でもありますから、冒険学校を運営していて、苦しかったと言う記憶の方がどうしても前に出てきちゃいますね（良かった、楽しかったことは忘れてしまう）。若すぎて自分でなんでもやっちゃう癖もあったし。事務局辞めたいと思ったことも数回あり…参加者が集まらないのが一番キツかった。

この数年は参加者も定員に達し、スタッフもベテランと若手が噛み合いとても良い状況になっていると思う。その状況作ったのは自分自身ではないので、自分自身を褒めるとしたら、まあこの状況が来るまでよく辛抱したね、みたいなのところか。もっと努力できていれば、もっと賢ければ、もっと地に足が着いていれば、もっと早く良い状況にできていたのになあ…ご容赦ください。

ウチの会は冒険学校の時に女性のベテランが少ないのですよ。個人的に2019年に子どもができて、その後コロナを迎えてっていうことがあって、なので我が家は妻（はるちゃん＝黒澤東江）が冒険学校に前後の準備を含めてフル参加でスタッフをしています。私は兼業の養殖業の方もあるので後ろに回って現場に入らず、事前準備と後片付け＋スタッフの送迎＋養魚場の仕事と夜は子守り担当です。英雄さん（鈴木英雄）、佐々木さん、佐伯さん（佐伯順弘）、雫さんをはじめ、ベテラン勢はいるし（おっちゃんも足りている）、若

手はだにえる（贅田隼人）、みややん（宮坂朋彦）、風馬（鈴木風馬）をはじめ揃っている。本部スタッフつばくて、1998年頃の25年前に戻ったようで実は快適だったりします。

冒険学校そのものについては、既にパイオニア・ワークでは無いでしょう、でも問題無し。本会はパイオニア・ワークを大事にしていますが、地に足がついている活動は大切です。現場が無いと何も語れません。パイオニア・ワークを志向することはもちろん同時に大切です。

冒険学校については、この後のページで村長経験者が語ってくれます。

◇小菅での生活について

移住した最初の頃は何でもかんでも顔出しました。単身の移住者とか居なかったですから、声をかけてもらえることも多かった。関係ないところまで顔を出していました。今思うとナンセンスなんですけど、物事の分別ができなかったからしょうがない、どこまで仕事かわからない、断り方も分からない。でも地域に馴染む、自然文化誌研究会を浸透させていくミッションというか、良く言えば「顔を売る」業務でもある訳で。

移住して4年目に結婚しました。結婚式は小菅村の中央公民館（YLO 会館）。かつては小菅村での結婚式が行われ、それを復元するという名目で自然文化誌研究会のみなさんが手づくりし、小菅村からもご支援・ご協力をいただきました。その後、小菅村に家を建てました。キャンプ場のログハウスの続きで3棟目のログハウスというカウントもしちゃいます。仕事と生活が完全にごちゃまぜになっていますね。

そこで「一時的な移住者から永住」になりました。これを機に、自分の立場が変わりました。自然文化誌研究会が小菅村というフィールドで実践している活動を「小菅村民」という目で見ると側にもなりました。

小菅村民の目で見ると、私たち「自然文化誌研究会」の活動は、「私たちが小菅村というフィールドにある人的・自然的資源を活用して、パイオニア・ワークであり未来のモデルづくりとして「自前」でやっている」というところであり、直接的に小菅村自体を盛り立てるためにやっていない、結果的にそうなれば良いとももちろん思っているのだけれども、というところです。

小菅村の事情もあります。「源流の郷協議会」「源流大学」など、多くの似たような取り組みがあります。目指すところはどれもほぼ差が無いと思います、農山村が豊かに継承される事、見直される事、それは農山村のみならず、日本全体、世界全体に寄与する。

大滝村時代の事は学生だったのでどのような苦労があったり、地域にどのように受け入れられていたのか…私は知らない。きっと先輩たちの寄稿に書いてあると思います。

今現在、人口が600人の小菅村では村民一人一人のやる事が多すぎる、逆に言えば私自身は自然文化誌研究会の取り組みに手一杯で、他の行事や勉強会には参加しないですね、向上心が無いだけかもしれないけど。という事はウチの会もそう見られているかなと謙虚に思う。

小菅村の良いところは排除しないところ、我々がやる分には OK。村民の協力も得られるし邪魔もされない、ただし継続やゴールまで物事を進めるのは自分たち（自然文化誌研究会）で完遂するというのは間違いないと思う。

最近の子育てもあるのだけど、自分が歳をとったのでかなりスリムにやることを選択しています。スリムに選択しすぎて、村の地の人からは生意気と思われているかもしれません。「何かを得るためには何かを手放す」というのを意識しています。子どもが急に熱を出して看病で自宅待機になるかわからない、養魚場の親方が体調を崩すかもしれない、でも自然文化誌研究会の業務は優先して行わなければならない。結果、お世話になった猟友会も10年で辞めました。

地域の伝承や伝統、エコミュージアム関係で大事にしているものも、私の中では現在の80代から90代、結局生まれた時から苦労して育った生業だらけだった人たちの世代はもう本当にすごいなと思います。そのかわりスマホとかパソコン使えないですけど。その下の世代になると、もうなんかそこまで差がないかなみたいな。もう個人の能力差みたいなのところなんじゃないかと感じます。良くも悪くも不便をした世代は強い

という事か（そりゃそうだ）。

伝統知みたいところをウチの会は大事にしているのですが、伝統知の必須のものは選抜されて面倒な事は淘汰されていくわけです。だからエコミュージアムの絡みも含めてたくさん記録を「あの時に」記録を取っておいてよかったなと言う解釈をしています。農山村も効率化して現代に合わせて生活する、同時に農山村ならではの安定感というものは水があり、エネルギーがあり、地に足がつく生活リズムというか、生業がある事だな、自信というか誇りを持ちやすいな、と。でも脳ミソは常にアップデートしていかないと自分で自分の首を絞めることになる。誇りと妥協と実質と懷疑とその中で自分で判断しなくては、と。

それでは自然文化誌研究会の目指すところはどこか？

大義に立ちつつ、現場を大切にするとところかな。

木俣さん（木俣美樹男）が引退した時に、ウチの会が小粒にならないように今のうちから体制を整えておくこと。「パイオニア・ワーク」、「フロンティア・ワーク」、「冒険」、「探検」など、キーワードはたくさんあるんですけど、私はあまり得意ではなく、研究もしてないです。学生時代からそうで、あんまり伸びなかったですね。せかせか動くのは好きなんですけれども。

事務局という立場を与えてくれた自然文化誌研究会に本当に感謝しています。今後もよろしくお願いします。

最後に、小菅村で特にお世話になっている人たちを紹介して結びとします。



亀井雄次理事と木下稔理事：いつも支えてくれている。 木下善晴さん：キャンプ場、博物館館長、生き方。



加藤原久さん：冒険学校ではいつも講師をしてくれる。 守屋アキ子さん：アキコさんも90代になった。

「子どものための冒険学校」とは

冒険学校を始めようと思ったのには2つの理由がありました。一つは、自分たちを常に現役探検家として鍛えることです。二つは、子どもたちを冒険に誘うように育てることです。東京学芸大学自然文化誌研究会冒険探検部（以下、学大探検部）の独自性がここに見出せると考えたのです。私には、さらに三つ目の目的があり、自然や伝統文化の中での子どもの生態を学びたかったのです。当時、大学生相手の講義に慣れて、言い換えれば、自然や伝統文化についての学習体験の乏しい大学生あるいは大人に対する教育の可能性を疑い始め、子どもたちから始めないと環境学習の可能性は開けないのかと考えていたようです。

木俣美樹男（2005.8.8 カンタベリーの丘にて）

1988年に東京学芸大学の公開講座としてスタートしました。

1998～1990年は、東京都五日市、1991～2000年は、埼玉県大滝村で開催。

その後、ぬくい少年少女農学校、ちえのわ農学校、こすげ冒険学校に変化していきました。

五日市・大滝時代の詳細については2015年に自然文化誌研究会が発行した『冒険と子どもたち「冒険学校」のあゆみ』にまとめました。

現在、自然文化誌研究会のホームページよりPDFで閲覧することができます。

今回の50周年記念誌では載せきれないので、そちらをご参照ください。全83ページです。

http://www.npo-inch.ppmusee.org/_src/18657/Ayumi-2025.pdf

冒険学校の基本的な考え

冒険学校では長い歴史の中で、試行錯誤を繰り返し、内容に工夫を凝らしながら活動を続けてきました。その基本的な考え方は子どもたちの自主性を尊重し、行動を促すのではなく、行動を「待つ」という姿勢にありました。これは十分なプログラムを用意しながらも、選択は子どもに任せることです。極端に言えば、子どもは何も選ばず、森の中で一週間昼寝をして暮らしてもよいということでもありました。この考えは、現在の自然文化誌研究会の環境学習活動にも生きています。

大まかにまとめると以下の通りです。

- ① 秩父多摩国立公園に隣接した農山村の自然・文化環境の中で、教育的配慮のもとに野外活動を行い、地域の自然・文化遺産を継承するナチュラリストのジュニアリーダーを育成する。
- ② 安全が確保される限りにおいて、子どもの自主的な活動を尊重し、見守り、援助する。
- ③ プログラム選択の自由を可能な限り拡大する。これには子どもの発案による新しいプログラムを一緒に作ること、プログラムに参加しないで森の中で寝て暮らすことも含む。
- ④ 国立公園内での活動であるので、環境保全のためにロウ・インパクトを心がける。
- ⑤ 環境教育の研究普及活動の一環として、子どもと一緒に新しい自然接触・自然認識の方法を試行する。
- ⑥ 子どもが自然に抱かれて、心身を解き放ち、多くの友達を得て、満ち足りて家庭に帰ることを期待している。

2004年より、本会が山梨県小菅村に拠点を移したので、五日市～大滝村以降の冒険学校と地域での取り組みについて紹介していきます。

具体的な活動については「黒澤友彦（2023）.“こすげ冒険学校の小史”. 民族植物学ノオト第16号:20-31」にまとめてあるので、そちらをご覧ください。

http://www.ppmusee.org/_userdata/oto_No16.pdf

冒険学校～小菅村での歴史*表中は敬称略		
2001	4	小菅村が「多摩川源流研究所」を創設、井村礼恵（あべちゃん）がオープニングの主任研究員となる。
	年間	「第14期子どものための冒険学校」デイキャンプ×7回 @東京学芸大学農園
2002	4	事務局が小川泰彦（ヤス）から、黒澤友彦（くろ）に代わる（黒澤は農園職員を兼任）
	年間	「公開講座 第1期ぬくい少年少女農学校」
2003	年間	「公開講座 第2期ぬくい少年少女農学校」、8月に小菅村の船木民宿に宿泊
	12	小菅村で初の冒険学校は「冒険学校まふゆのキャンプ」、@玉川キャンプ村で開催。以降2025年も継続中
2004	4	自然文化誌研究会は東京都認証のNPO法人となる
	年間	「公開講座 第3期ぬくい少年少女農学校」
	5	「新緑キャンプ」を開催、@現在の清水バンガロー（いつものキャンプ場）を初めて利用した
	5	小菅村に拠点となる古民家を借りて事務局を移転する（黒澤が移住を開始）
	8	「野生キャンプ①」を開催、3泊4日 @清水バンガロー
2005	4	「第1期ちえのわ農学校」が開催
	5	「冒険学校むらまつりキャンプ」に名称変更して第1回目の開催、以降、2025年まで継続中。
	8	「野生キャンプ②」を開催→次年度から「こすげ冒険学校」に名称が変更となる
2006	4	小菅村の拠点を橋立地区に移転（東京学芸大学の連携推進室を兼ねる）
	4	菱井優介（ひっしー）が事務局員となる
	8	「こすげ冒険学校」の初開催。5泊6日、8/22-27、参加者は3名しかいなかった・・・。
	8	「やまめキャンプ」の初開催。1泊2日、対象は小3～高3（大人の募集は無かった）
	12	菱井優介が事務局として小菅村へ移住
2007	8	「やまめキャンプ②」、親子での参加募集をはじめた
	9	黒澤家が小菅村で結婚式を開催@小菅村中央公民館、はるちゃんが小菅村へ移住をする
2008	2	「ログスクール」の開始、現在のログハウスA棟を建てながらの事業。当初は壁無しの東屋の予定だった
	5	「むらまつりキャンプ④」、親子での参加を可能に変更した。以降、2025年まで継続中
	12	菱井優介が小菅を旅立ち、トムソーヤクラブへ移籍する
2009	7	佐々木正久（まーくん）が囲炉裏を作る。囲炉裏を作る前は土間だった。
	8	「やまめキャンプ」+「いわなキャンプ」として、1泊2日の連続参加を可能にした。
	9	橋立の古民家拠点を返却する（ログハウスA棟も完成するので泊まれるようになった）
	11	ログハウスA棟が完成
2013		この頃にログハウスB棟を建築中。1階は土間の（雨天時）作業場として設計していた、その後、床と壁を入れた
2019	7	「こすげ冒険学校」の開催前にトイレ棟完成。それ以前はポットン便所で、みんな苦労したね
2020	通年	コロナ禍の影響で冒険学校は非開催になるが、スタッフで研修を進めて次の開催に備えていた時期

<冒険学校の村長の歴史>

2003年～2009年までは全ての冒険学校で鈴木英雄さんが村長を務めています、その後もボチボチ。

2009～2011年の「こすげ冒険学校」では佐々木正久さんが村長を務めました

2013～2022年まで雫永法（しずく）さんが夏を中心に村長を務めました。

2021年の冬に賛田隼人（だにえる）さんが初村長を務め、夏は3回務める。ここで一気に若返り、熊木日向（ひなた）さん、鈴木風馬（ふうま）さんも冬に村長を経験しています。横山昌佳（まーしー）さんは村長の予定だったけど来られずに幻の村長となりました。

<小菅村での冒険学校の参加者・スタッフの推移>

全事業での参加者の合計人数は『1,042人』。内訳は「むらまつりキャンプ334人」、「こすげ冒険学校327人」、「やまめキャンプ193人」、「まふゆのキャンプ188人」です。

スタッフは全事業の合計で『1,679人+α』。（スタッフは全日程ではない場合も多い）。

その他にも、ログビルダー養成講座、のびと講座、スタッフ研修会もあったので、20年間で3,000人を超えるご参加・ご協力をいただいています。改めて感謝をいたします。

2003	大滝村で開催 (新緑キャンプ)	なし	なし	まふゆのキャンプ① 参加者 16・スタッフ 18
2004	新緑キャンプ① 参加者 10・スタッフ 15	野生キャンプ① 参加者 12・スタッフ 16	なし	まふゆのキャンプ② 参加者 9・スタッフ 21
2005	むらまつりキャンプ① 参加者 21・スタッフ 25	野生キャンプ② 参加者 20・スタッフ 21	なし	まふゆのキャンプ③ 参加者 6・スタッフ 20
2006	むらまつりキャンプ② 参加者 11・スタッフ 33	こすげ冒険学校① 参加者 3・スタッフ 15	やまめキャンプ① 参加者 9・スタッフ 24	まふゆのキャンプ④ 参加者 11・スタッフ 15
2007	むらまつりキャンプ③ 参加者 21・スタッフ 35	こすげ冒険学校② 参加者 10・スタッフ 10	やまめキャンプ② 参加者 12・スタッフ 12	まふゆのキャンプ⑤ 参加者 11・スタッフ 15
2008	むらまつりキャンプ④ 参加者 16・スタッフ 16	こすげ冒険学校③ 参加者 11・スタッフ 18	やまめキャンプ③ 参加者 18・スタッフ 12	まふゆのキャンプ⑥ 参加者 8・スタッフ 19
2009	むらまつりキャンプ⑤ 参加者 9・スタッフ 28	こすげ冒険学校④ 参加者 10・スタッフ 22	やまめ・いわなキャンプ④ 参加者 12・スタッフ 12	まふゆのキャンプ⑦ 参加者 9・スタッフ 21
2010	むらまつりキャンプ⑥ 参加者 13・スタッフ 28	こすげ冒険学校⑤ 参加者 5・スタッフ 16	やまめ・いわなキャンプ⑤ 参加者 14・スタッフ 9	まふゆのキャンプ⑧ 参加者 8・スタッフ 25
2011	むらまつりキャンプ⑦ 参加者 17・スタッフ 32	こすげ冒険学校⑥ 参加者 11・スタッフ 26	やまめ・いわなキャンプ⑥ 参加者 21・スタッフ 17	まふゆのキャンプ⑨ 参加者 12・スタッフ 24
2012	むらまつりキャンプ⑧ 参加者 12・スタッフ 31	こすげ冒険学校⑦ 参加者 8・スタッフ 20	やまめ・いわなキャンプ⑦ 参加者 24・スタッフ 16	まふゆのキャンプ⑩ 参加者 14・スタッフ 17
2013	むらまつりキャンプ⑨ 参加者 18・スタッフ 28	こすげ冒険学校⑧ 参加者 22・スタッフ 28	やまめ・いわなキャンプ⑤ 参加者 22・スタッフ 17	まふゆのキャンプ⑪ 参加者 8・スタッフ 27
2014	むらまつりキャンプ⑩ 参加者 27・スタッフ 39	こすげ冒険学校⑨ 参加者 12・スタッフ 23	*台風のため中止	まふゆのキャンプ⑫ 参加者 8・スタッフ 21
2015	むらまつりキャンプ⑪ 参加者 10・スタッフ 31	こすげ冒険学校⑩ 参加者 12・スタッフ 23	やまめ・いわなキャンプ⑥ 参加者 8・スタッフ 11	まふゆのキャンプ⑬ 参加者 4・スタッフ 18
2016	むらまつりキャンプ⑫ 参加者 15・スタッフ 28	こすげ冒険学校⑪ 参加者 17・スタッフ 28	やまめ・いわなキャンプ⑦ 参加者 18・スタッフ 不明	まふゆのキャンプ⑭ 参加者 11・スタッフ 不明
2017	むらまつりキャンプ⑬ 参加者 8・スタッフ 28	こすげ冒険学校⑫ 参加者 14・スタッフ 27	やまめ・いわなキャンプ⑧ 参加者 10・スタッフ 不明	まふゆのキャンプ⑮ 参加者 8・スタッフ 13
2018	むらまつりキャンプ⑭ 参加者 7・スタッフ 35	こすげ冒険学校⑬ 参加者 25・スタッフ 31	やまめ・いわなキャンプ⑨ 参加者 12・スタッフ 8	まふゆのキャンプ⑯ 参加者 8・スタッフ 13
2019	むらまつりキャンプ⑮ 参加者・10 スタッフ 25	こすげ冒険学校⑭ 参加者 23・スタッフ 19	やまめ・いわなキャンプ⑩ 参加者 24・スタッフ 9	まふゆのキャンプ⑰ 参加者 8・スタッフ 15
2020	*コロナのため中止	*コロナのため中止	*コロナのため中止	*スタッフ研修会 (佐伯・賛田・宮坂)
2021	*スタッフ研修会	こすげ冒険学校⑮ 参加者 15・スタッフ 17	*この時期スタッフが集まらないため以降実施せず	まふゆのキャンプ⑱ 参加者 7・スタッフ 17
2022	むらまつりキャンプ⑯ 参加者 11・スタッフ 32	こすげ冒険学校⑯ 参加者 15・スタッフ 31	なし	まふゆのキャンプ⑲ 参加者 6・スタッフ 20
2023	むらまつりキャンプ⑰ 参加者 19・スタッフ 39	こすげ冒険学校⑰ 参加者 14・スタッフ 46	なし	まふゆのキャンプ⑳ 参加者 7・スタッフ 27
2024	むらまつりキャンプ⑱ 参加者 34・スタッフ 34	こすげ冒険学校⑱ 参加者 26・スタッフ 42	なし	まふゆのキャンプ㉑ 参加者 12・スタッフ 33
2025	むらまつりキャンプ㉑ 参加者 45・スタッフ 52	こすげ冒険学校㉑ 参加者 32・スタッフ 45	なし	まふゆのキャンプ㉒ 12/26-28開催予定

初期の「こすげ冒険学校」

鈴木英雄（自然文化誌研究会理事）

秩父での冒険学校を終了して、わずかなインターバルを経て冒険学校の舞台が山梨県小菅村に移りました。そのインターバルの間に妻と死別し、それまで INCH のキャンプはいつも妻と一緒に参加してきましたが、急死でしたので、まるで身体の半分を失った感覚でした。それからは子供たちと3人でのキャンプ参加となりました。

キャンプ場が清水バンガローと名前がついたのはつい最近のことで、INCH がキャンプ場を利用するときは名前のないそのキャンプ場を、いつものキャンプ場、と呼んでいました。

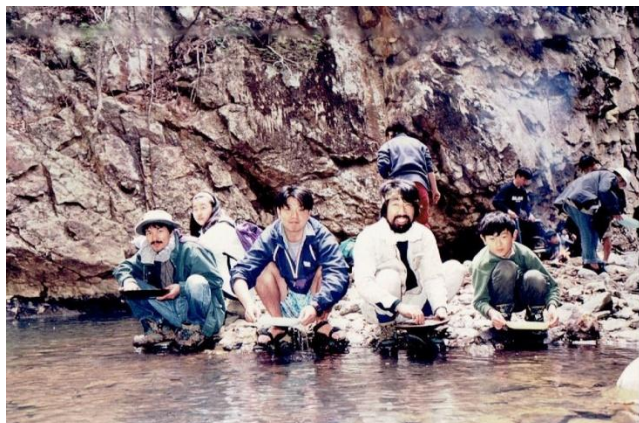
そのキャンプ場は、ほぼ原っぱでした。でも電気は引かれていたし、水道は崖からの湧き水でした。すぐそこに小菅川の源流が流れていて、しかもその上流部には集落がありません。沢の水はきれいです。キャンプ場にはそのほか、傾いたトイレと五右衛門風呂、あずまや2棟、バンガロー1棟。こう書けば、これだけで必要十分なキャンプ場です。

最初はほかにお客さんがいたんですよ。でも私たちが行くようになって、来なくなりました。でしょうね。せまいけど、好きなように使えていた気楽なキャンプ生活が快適ではなくなったのですから。申し訳ない。

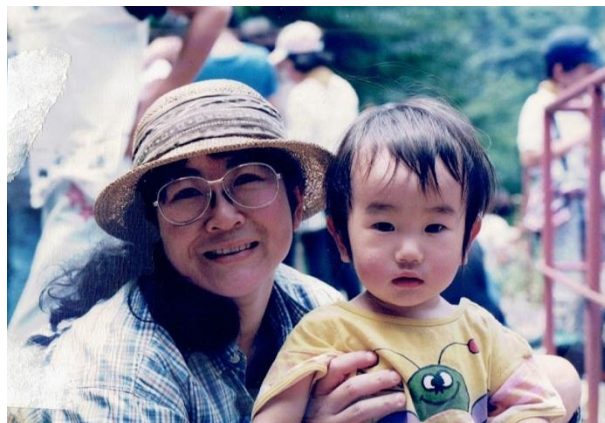
他のお客さんが来なくなったので、私たちが使うときは貸切になりました。気兼ねなく自由に使えるというのは快適です。不便なことはあります。まずはブユ。原っぱがあるとそこにたくさんが住み着いていました。まずはあちこちで焚き火をやって地面にある植物の種を燃やしていきます。何年かかかりましたが、ついに生活空間は土が剥き出しになり、ブユが生存できる原っぱではなくなりました。いまだにブユの被害はありますが、初期のこの頃に比べて、だいぶ減ったように感じます。

もうひとつ不便なこと、沢が小さいことでした。それまで冒険学校のフィールドであった秩父荒川の源流部に比べて、その水量は10分の1くらいでしょうか。思う存分川遊びができるという感じにはなりません。特に秩父にはあった堰堤からの飛び込み、ここ小菅にはありません。初期の頃はどうしても飛び込みたくて、村の下流の方までできそうなところを探しに行ったり、浅くてもいいから、飛び込んでみたり。最近はやっと、秩父でのノスタルジーを感じるスタッフが減ってきたので、誰も何も言わなくなりました。

キャンプ場としての設備は前述したように十分なものでしたが、それでも余地があると抑えられないハード面での改善欲求は、みなさんご存知の通り、2棟のログハウス、トイレ棟、キッチン脇のあずまやの床など。それもまた冒険学校の歴史でしょうか。このキャンプ場があってこそその冒険学校ですものね。そしてこれだけの長い間続けてきた INCH のキャンプはまさに文化になったといえる、そんなキャンプになりました。もちろん今でも思いますよ、妻が生きていればなあとね。



大滝村時代（鈴木英雄、佐々木正久、田之下雅之）



鈴木美穂さん、風馬の幼少期

INCH のキャンプは最高！

佐々木 正久（まー君・茨城県）

INCH 創設 50 周年おめでとうございます。

私が初めて自然文化誌研究会とかかわったのは約 30 年前（35 歳ぐらい）なので、創設 20 年目の頃です。まだ埼玉県の秩父で冒険学校をやっていたころです。大学同期の鈴木英雄に誘われたのがきっかけです。当時はヤスさんや美苗ちゃんが 20 代でキャンプを仕切っていて、大変活気がありました。1 回目ですごく気に入って、冒険学校・新緑キャンプ・クリスマスキャンプには可能な限り参加していました。

キャンプが大学の主催事業から外れ、数年 INCH から足が離れました。活動場所が小菅村に移動になり再び参加するようになりました。INCH の最初の拠点に宿泊させてもらい黒澤さんと一緒に青梅に P を打ちに行ったりしたものです。（開店から閉店まで同じ台を打ち続けたこともありましたが）黒澤さんの努力により、現在のキャンプ場を拠点とすることが出来、今ではキャンプ場の管理を任されています。活動拠点を手に入れたことはとても大きな成果です。

冒険学校やむらまつりキャンプで村長を務めたのは、私が 50 歳になった頃（2010 年頃）です。キャンプの参加者も少なく英雄の子供（風馬とチーちゃん）と村在住の大地とさくらを参加者扱いにして水増した時代です。学生スタッフも少なく、社会人スタッフは私と英雄ぐらいだったので、ほとんどは英雄が村長を務め、たまに私が村長になるといった厳しい時代でした。（2010 年は、冒険学校＝参加者 5 人スタッフ 16 人、やまめ・いわなキャンプ＝参加者 14 人スタッフ 9 人）まあ、人数が少ないので気楽でしたけど。むらまつりキャンプは 2 泊なので何とかなってましたが、冒険学校は 6 泊なのでスタッフが少ないのはなかなか大変でした。それでも毎回参加してくれたスタッフ、土居（将人）ちゃん世代の高校生スタッフと竹（大竹孝宏）やショー（加藤翔）君、和田（綾子）ちゃんや（富山）千愛ちゃんなどの皆さんのおかげで何とか乗り越えてきました。というよりは、大変でしたが充実していてとても楽しかったです。人数が少ないと、みんな一緒に行動することが多く一体感がありました。

今は人数制限をかけるほど参加者が集まるようになり、スタッフも参加者の 2 倍以上が揃うようになりました。ここ 10 年を支えてくれた黒澤さんや雫さん、学生スタッフの皆さんのおかげです。特にみややん（宮坂朋彦）を中心とした若い社会人スタッフと学生スタッフはこれからの INCH を支えてくれる予感がします。感謝してもしきれないですね。私は現在 66 歳になり、キャンプ中の私の役割は無いに等しくなっていますが、スタッフのはしくれとして参加させてもらってます。また、キャンプの前後に趣味の日曜大工を生かしてキャンプ場の整備を少しずつ進めていきたいと思っています。

INCH のキャンプの特徴は参加者（子供）にやりたい事をやらせるという点です。一応、スタッフがプログラムを用意しますが、自分のやりたいことがあればやっていいわけです。ルールは「必ずスタッフと一緒に行動すること」と「他人をケガをさせるようなことはしない」ぐらいですね。スタッフは見守りながら一緒に行動します（参加者一人一人が別行動になる事もあるので、参加者を上回るスタッフが必要になります）。自分で考え自分で決めて行動するという体験が出来るわけです。普段、言われたことを言われた通りにやる事が多い子供たち（大人もそうかも）にはとても貴重な体験だと思います。実は、こうした体験をあまりしたことがないスタッフも多いので、子供と一緒に行動することで一緒に成長しています。キャンプを通して世代を超えた付き合いが出来、子供も大人も一緒に成長して行けるのが INCH のキャンプのすばらしさだと思います。最高のキャンプです。水戸から小菅は遠いので、年齢を考えるとそんなにいつまでも参加できないと思いますが、まだ普通に体が動いているのでもう少し参加させてもらいたいと思います。



YouTube「まー君のナチュラルライフ」

冒険学校との出会いと今

雫 永法（自然文化誌研究会運営委員・1991 年入学）

飢えていた。1990 年代はじめのことだ。食い気の話ではない。

当時私は浪人生活を終えて学芸大に入り、渴望していたはずのバスケ部での活動をする中で自分のバスケボールでの能力の限界や体育会に所属しながら自分の世界をひろげていくことが出来ないことへの焦りや無力感を感じていた。

そして体育会の活動から離れた。離れてみて自分がバスケ部に所属しているという帰属意識に依存していたということを痛感した。そして自分探しをすることになった。聞こえは良いが、いわゆるモラトリアム期間をあてもなくプラプラしていた。

そんな時期に雄迫寮（相部屋制の男子寮）の同期の間瀬（貴久）に冒険学校や冒険探検部に誘われた。「シズク、これが本当にケツサクなんだって！騙されたと思って来いって！なにい～、シズクが良ければ今度連れていくからさ。」私は話半分で聞きながら、でもちょっと面白そうだなと思ったのを覚えている。

日をおいて間瀬がサークル新棟の冒探の部室に連れて行ってくれた。冒探部員の面々と出会った。訳も分からず交流したが、飛び入りの自分に対してとても誠実に向き合ってくれたのを覚えている。そして一人ひとりがそれぞれ自分の興味あることに向き合い、楽しそうに学生生活を送っている様子を感じ、その空気がとても心地よく自然と部室に出入りするようになるのに時間はかからなかった。

少し慣れたころ、間瀬が野外施設へ連れて行ってくれた。そしてヤスさん美苗さんと会うことになる。（この二人が冒険学校を牽引していくためになくてはならない存在だということを実感したのは大分後になってからである。）

「ところでシズクは運転できる？」ヤスさんから唐突にそうたずねられ、運転手をするようになった。聞けば、埼玉県奥秩父まで行くらしかった。運転免許を取りたての若造に運転を任せるとはとんでもないなと思ったが、それより知り合って日の浅い自分に運転を託してくれたことが嬉しくて引き受けてしまった。とにかくヤスさんの運転する車のテールランプを無我夢中で追いかけて、真っ暗な青梅の峠を越え、奥秩父の中津川集落へ辿り着いたのは夜遅くだった。冒険学校の活動ベースが五日市から中津川へと移行していく時期で中津川集落の人々との関係づくりが始まった頃だった。車から降り立つとキンと冷気が頬を刺し、真っ暗な尾根に挟まれた狭い夜空に無数の星が光っていた。静まりかえった集落の中にある大きな屋敷を訪ねた。黒ずんだ太い梁を見上げ、薄暗い囲炉裏端でキャンプ場のオーナーであるサシマさんから茶碗に秩父錦（日本酒）を注がれ、白菜の漬け物をいただいた。右も左も分からない一介の運転手には理解できなかったが、その活動のお手伝いをできたことが無性に嬉しかった。奥秩父での冒険学校との関わりはこのように始まった。

翌春、美苗さんから誘われ栃餅作りに参加した時、間瀬・丸ちゃん（丸岡英生）・相馬（崇志）氏が山登りをするということで急遽パーティーに加えてもらい初めての登山を経験した。中津川集落の山向こうの集落で栃餅作りをしたのだが、そこから白泰山を通過して林道に入り大ケ俣小屋（中津川集落から十キロ上流にある営林署管轄の小屋）脇を通過して集落に至るというルートだった。参加当初、登山のつもりはなく何も用意していなかったが、大した事はないだろうとの事だったので参加したが、山頂を抜けて北側斜面に入った途端に残雪が膝上まである山道が続き到着予定時刻を大幅にオーバーしての行程となった。足はぐしょ濡れで身体は冷え切り、無知とは恐ろしいものだと思い知らされた。道具の大切さを痛感する機会にもなった。こうして冒険探検部での拙い経験を徐々に積み重ねながら冒険学校に参加する心の準備をしていった。

秩父国定公園内で営林署から許可を貰い実施した冒険学校（私が参加したのは川コース）は、サバイバル的要素満載だった。ゴツゴツとした岩と天然林に囲まれた荒川の源流域での生活は、勿論電気ガストイレ無し、つるはしを使ってトイレ掘りから始まった。自然の滝壺へ飛び込み、全長五十メートル近い滑滝を利用しての天然のウォータースライダーを満喫し、寒さに震え、分厚い苔のむした中に巨木が立ち並ぶ源流部を

探検する等、子どもも大人も関係なく全身で遊び、驚き、楽しみ、恐怖を抱き、知恵を絞り、共に乗り越えていく日々だった。自然への畏敬の念を覚えざるをえない貴重な経験だったと感じる。

冒険学校を通して出逢った人々にもたくさん学んだ。日本画家として人間の生を見つめ幼児教育者育成に尽力されていた中村潤子先生、藍染めを教えてくださいました美穂さん、郷土料理を教えてくださいましたミッチー、民宿中津屋を気持ちよく開放して下さり面倒を見てくださった進さん。進さんは一度中津入りするとなかなか帰ることが出来ない貧乏学生である私に声をかけアシスタントで日銭を稼がせてくれたりもした。手作りのやすで天然イワナやヤマメを獲るヒゲさん、整体気功を教えてくださいましたモソロ先生…。本当に多くの人と交わり、様々な年代の生き様や価値観に出会うことができた。中津川で冒険学校を開催していた十年余の年月の中で、人とどのようにつながりを持ち、信頼関係を育み、共に歩いていくかということについて学ばせていただいたと思う。それもこれも美苗さんやヤスさんが中心となって人と人とを繋げていった地味で目立たない働きの上に成り立ち発展していったと強く感じている。(もちろん木俣先生や自然文化誌研究会冒険探検部OBの愛ある尽力があった事は言うまでもないが。)感謝は尽きない。

さらに、私が何よりも感動したのは七日間の冒険学校を経て西武秩父駅で親と再会した子どもたちの自信に満ちた目の輝きだった。子どもたちがたった一週間でこんなにも逞しく成長するとは何と素晴らしい取り組みだろうか！と心底思った。そして、その子どもたちと寝食を共にし、関わるということが本当にも面白くてたまらなかった。私にとってはこの経験がその後の人生の歩みを左右する原点の一つになった。

残念ながら冒険学校はその後奥秩父のフィールドからは撤退した。そして学芸大構内での貫井農学校という形態を経て、山梨県小菅村を新たなフィールドに据えて実施するようになった。

奥秩父の荒々しい自然というフィールドが原体験としてあるだけに、小菅村での冒険学校に正直物足りなさを感じたことは否めず、一時期活動から離れた。しかし、自分自身が様々な人々と出遭い、多くの示唆を受け、学ぶことができた冒険学校という取り組みを現在の学生たちにたとえ変容したとしても残していきたい、そう考えるようになった。これはこの十数年変わらずにある。これまで子どもたちや学生たちが楽しみ、様々な経験や思考する機会を提供してることができたのではと考える。時代の移り変わりに関わらず、子どもたちや学生たち(もちろん私自身も!)の目の輝きは健在である。好奇心と喜び溢れる活動を探していきたいと願っている。

これから先、冒険学校という活動がどのように推移していくかは分からないが、自然の中にある私たちが共にどのように生きていくのかを模索し続けたいと思う。

現事務局の黒澤さんと東江さんは勿論であるが、参加者やスタッフの人数が減り活動の存続が危ぶまれた時期も支え続けてくださった英雄さんや佐々木さん、熱い思いをもって岐阜から駆けつけてくださった佐伯さんに対し特に感謝の気持ちを記し、終えたい。



タイトル「僕と INCH との 10 年間」

賛田 隼人（だにえる・自然文化誌研究会運営委員）

略歴

2012 年 4 月、学芸大学 A 類理科へ入学

高校の先輩の誘いをきっかけに、「サークルちえのわ」へ参加。

2014 年（学部 3 年）、まふゆのキャンプに参加。自然文化誌研究会の活動への実質的初参加。以降はむらまつりキャンプ、冒険学校、まふゆのキャンプへ参加を続けている。

2021 年のまふゆのキャンプで初めての村長。そこからまふゆとむらまつりキャンプで村長を経験。

2023 年に初めてこすげ冒険学校で村長を任され、2025 年のこすげ冒険学校で 3 度目の村長。

<原体験から今に至るまで>

僕の生まれは埼玉県滑川町というところです。暑いことで有名な熊谷市の南に位置する、田んぼと畑がまだたくさん残っている地域で、実家では自分たちで食べる分の米や野菜を作っていました。幼い頃は母や祖母の野良仕事に連れられ、その周りをうろちょろして手伝った気になったり、ザリガニを釣ったりして過ごしていました。お米の収穫の時期、米袋を満載した軽トラックの荷台から見る景色が特別なものに思えたものです。

大学でサークルちえのわに入った時、実家でやってきたようなことが、自然体験活動として教育に繋がるのか、と少し奇妙な感覚となんだか嬉しい気持ちがありました。

サークルちえのわの活動は好きでしたが、そこに協力してくれていた自然文化誌研究会のことをうっすら苦手だと思っていた。僕は食わず嫌いなどところがあるので、ちえのわの活動へ道具を持ってくるのは、ふらふらしたり、先輩たちと話ばかりしたりしている黒澤さんたちを「結局、この人たちは何をしにきているんだろうか……。」と思って、馴染めずにいました。所属していたテニスサークルの合宿があり、キャンプにも参加しなかったのも、自然文化誌研究会が何をしているのかもよくわかっていないまま距離を置いていました。ここからは、手のひら返しで恥ずかしいのですが、学部 3 年でまふゆのキャンプに初参加した時、ただひたすらに薪を割り、暖を取り、時折コーヒーを飲んで過ごす。参加している子どもたちもそれぞれがたき火をして楽しんだり、マシュマロを焼いて食べたりとその場で出来ることに全力でいて、「こんな場所があったのか」と衝撃を受け、また行きたいと思いました。そこからしばらくは子どもよりも自分が全力で楽しみに行く、というスタンスで参加していました。

大学を卒業し、臨時的任用教員として働いていた 2016 年、正規採用で働き始めた 2017 年あたりが僕にとって、自然文化誌研究会への関わり方や認識に変化があった年だと思います。2016 年は中込メさんと中込ミさんにタイ環境学習キャンプに連れて行ってもらった年です。この会はこんなところにも繋がりがあり、まだまだ知らない引き出しがたくさんあるのかと驚かされ、更に好きになりました。（タイ旅行はとても楽しかったです。タワービールとかドリアンが美味しいこととか、自然公園で見た蝶の群れとか初めての経験だらけでした。）一方、2017 年は担任した学級の経営が全然うまく行かず、とても苦しい 1 年間でした。現実逃避のように参加したキャンプで、愚痴を聞いてもらい励ましてもらったり、子どもと関わることで自分が嫌いになったわけではないことを再確認したりして、なんとか乗り切ることができました。このあたりから、年に 3 回の冒険学校が自分の中の日常となりました。行くことを前提として考え、その時に何をしようかな、何か面白いことできないかなと思いながら過ごすようになりました。

そして、新型コロナウイルスによって様々な活動が出来なかった 2020 年、まふゆのキャンプに代えて、佐伯さんと宮坂君とで実施したスタッフ研修会で「この場所を無くしてはいけない。冒険学校を続けていきたい！」という思いを深めました。そして、その次の年のまふゆのキャンプで初めて村長を任され、今に至ります。

<自分の思う、村長とは>

「冒険学校を一番楽しんで、そこに子どもを巻き込む大人。」

これが今の自分の目指す村長です。冒険学校の基本的な考え方である、「子供たちの自主性を尊重し、行動を促すのではなく、行動を待つという姿勢」を大切にしながら、子どもたちやフィールドにある流れに入り込んで大きな流れと一緒に作っていく、そんなイメージです。でも、これが不思議と出来ないのです。初めてまふゆのキャンプで村長をしたときは「子どもたちに楽しむ大人を見せてやる！」って意気込んだ結果、氷を踏み抜いて足をびしょびしょにしましたし、「子どもにも大学生スタッフにも楽しんで欲しい。みんなを見守ろう！」という姿勢が強くて「あれ？全然遊べなかったし、いまいち楽しめなかったかも……。」という感覚で終わってしまったこともありました。年齢や立ち位置が変わるとまた違って来るのだと思いますが、今の自分の感覚では、子どもたちに負けないくらい全力で冒険学校での出来事を面白がって、楽しむことが村長として必要なことだと思っています。

それと、村長についての話からは少しずれてしまいましたが、村長を経験して、僕はこの会のことがもっと好きになりました。もともと、キャンプでできる面白いこと、面白いことができる場所として冒険学校が好きでした。村長として、俯瞰的な目線をもつようになってから、スタッフや子どもたちみんなが楽しもうとして、全力を尽くしていることを実感するようになりました。ホームシックで泣いていた子が、キャンプから帰って親御さんにまた行きたいと話してくれたことや、小学生の時から参加者が中学生になっても来てくれたり、高校生スタッフとして参加してくれたこと、自主的に星空観察の準備をしてキャンプに臨んだスタッフがいたり、アルバイトが終わってからまたキャンプに戻ってきたスタッフがいたりしたこと、そういうことがたくさんあって、僕の好きな場所を同じように好きだと思っている人がいて、その人たちのことを好きになったことで、この会のことをすごく大事に思えるようになりました。当たり前のことを、と思う人もいるのですが、あまり人へ興味のなかった僕が、ここ数年ですごく感じるようになったことなのです。

まとまらない話をしてしまいましたが、子どもはもちろんのこと、スタッフも思い切ってチャレンジして、成長していくことのできる場所として、この自然文化誌研究会が今後も存続していけるように、これからも関わっていきたいと思います。



私にとってのキャンプ・冒険学校【子供時代から、教育系ではないスタッフとして】

鈴木風馬（自然文化誌研究会運営委員）

自己紹介と INCH との関わり

1996 年 熊本県にて出生 埼玉県にて育つ、出生前より父母と共に冒険学校に参加（秩父・東京学芸大学・檜原村等）
2003 年 小学校 1 年生 この頃初めて小菅村へ 以後、部活等で不参加の回を除き、基本的に参加（小菅、水上）
2012 年 小山工業高等専門学校機械工学科へ入学 高校生スタッフとして、引き続き参加
2017 年 新潟大学工学部機械システム工学科へ 3 年次編入
東京学芸大学ではない学生スタッフとして、教育系専攻ではないスタッフとして、また参加者出身のスタッフとして引き続き参加
2021 年 新潟大学大学院自然科学研究科を修了し、鉄道車両メーカーへ就職
コロナ前から一部の運営には参加していたが、この頃から本格的にキャンプの運営側としての活動に参加
2024 年 まふゆのキャンプで初の村長を拝命する
現在に至る

1、子供・参加者時代

私の最も古い「INCH と関わった記憶」は、2001 年ごろ、秩父市中津川に父母に連れられて行き、おそろくキャンプか、フィールドの調査かなにかの時、帰途に着く前に現運営委員の雫永法氏と、現事務局長の黒澤友彦氏と話した記憶が始まりである。秩父時代の記憶はそこまでであるが、父は現理事の鈴木英雄氏で、地質学分野の講師として、母は染織の講師として INCH に参加しており、私が「はいはい」をしたのもキャンプ場の東屋であると聞いている。その後、2003 年からのぬくい少年少女農学校に 2 年（小 3 からは参加者になるので、その辺りから農学校には参加しなくなったと思う）ほど、初の小菅村はこれも 2003 年ごろで、船木民宿に泊まったのを覚えている。（このときはキャンプではなく、冒険学校でもない）その後は父が「村長」として冒険学校に参加していたので、この時点ですでに「冒険学校は毎年必ず行く、ある意味では日常」であったと思う。参加者になると、川遊びにハマリ、火遊びを覚え、星に興味を持ち、一人で気の済むまでずっとやっていた。思い返すと家ではできないことばかりたくさんやっている。そういう意味では非日常だったから楽しかったのかもしれない。たくさんのスタッフの皆さんに可愛がっていただいたし、ログハウス 1 棟目が完成してすぐのキャンプも参加した。今でも入り口の表札の裏に名前が残っている。中学生になると部活動の関係で長期のキャンプへの参加はできなくなってしまったが、それでも参加できる時は必ず参加していた。参加者時代最後の参加は、中 3 の 3 月末の水上の雪中キャンプで、黒澤事務局長に「君はもう心配していない」と言われて、高校生スタッフになっても大丈夫だと思えたのを覚えている。

2、スタッフになって

高校生スタッフ時代の記憶はあまり強くないが、部活にも入らなかったもので、学校の授業がなければ毎回参加できていたと思う。高専 4 年生になると、同世代の学生スタッフが参加し始め、その中である意味では「アウェー」なポジションであったが、なぜか運営から信頼のある謎の学生スタッフという、新規参加の学生スタッフから見れば、「この人同世代なのに何者だ？」などと思われていたような気もする。当時はコロナ前で、雰囲気ものんびりしており、子供の就寝時間もなかったもので、夜更かししたのに早起きをするような子供達が多く、ついて行くのにとても体力が必要であった。ただし、私の子供時代も同様だったので、スタッフになって、あの時可愛がってくれたスタッフの皆さんも体力的にはきつかったのかなとか思うところである。大学 3 年からは新潟に行ったが、それでも来ていたのは「同世代の別の大学の学生と話す機会」を求めている、子供たちとの関わりという意味でキャンプに参加するという意識は薄れていたように思う。だがこの頃でも、「キャンプは毎年の日常」という意識は崩れず、「当然参加して、少しは役に立ち、小集団

活動や源流祭りへの参加は積極的に、新規参加の学生スタッフに参加者出身者として知っていることを伝える」というような、現在も運営側として意識していることが少しずつ形成された時期だったのかもしれない。

3、コロナ明け、運営側のスタッフとして

コロナ禍が明け、キャンプが再開されたものの、たった1年の休止、その後1~2年の厳しい制限の中で、私が子供時代から参加してきた「とにかく自由」なキャンプは変容してしまったように感じた。学生スタッフも就職して入れ替わり、行っても知っている人はそれほどいないと感じた。そんな中で、2025年現在で学生スタッフの中心的なメンバーとなる人が参加し始めたのもこの頃で、彼らには社会人になっても参加してほしいと思っている。この頃だろうと思うが、コロナによる制限があって初めて、今まで当然であった冒険学校の理念である「子供達の自主性」を尊重するキャンプをしていていたことを意識したと思う。同時にその中で、「教育系ではなく、機械工学という理科系出身者」としての役割を意識し始めた。工作企画を持ち込んで学生スタッフの皆さんと子供達と一緒にものづくりをしたり、佐々木正久氏から星空観察の解説者を引き継ぎ、望遠鏡を持ち込むなど、新たに「プログラムとして自分の専門分野や持っている知識を紹介し、子供たちや学生スタッフの興味の扉を開く」活動に挑戦した。父母もプロフェッショナルとして参加したのが始まりで、私もプロフェッショナルと言えるようになってきたので、そういう教員や教育に全く関係ないポジションのスタッフとして何ができるのかというのを考え始めた。さまざまなバックグラウンドがあるスタッフの一員として、「子供たちや学生たちの人生の選択肢を広げる」ことができればと思っている。

4、初村長とこれからの関わりかた

村長としての参加については、いずれやると淡く思っていたが、長期での参加ができない以上、だいた先だろうと思っていた。2024年のまふゆのキャンプで、ついに初の村長を務めることになった。2025年現在、本会の小菅のキャンプは年3回の開催だが、それぞれ性格が少しずつ異なる。まふゆはその点夏や春のリピーター参加者が多く、川遊びがない分安全度も高い。いずれはやらなければならないという意識もあり、村長育成という意味を持たせるにはいい機会であったため、引き受けた。元来リーダーシップはないし、教員でもないから子供との関わりはあまり得意ではない私だが、賛田・宮坂・熊本運営委員が運営側として参加する強力な体制をつけていただき、なんとかやり遂げることができた。この時、最近あまり意識していなかった「子供たちと最前線で関わり、共に楽しむ」感覚が蘇り、キャンプの楽しさを再確認できたと思っている。そんな中で2024年から冒険学校担当運営委員として自然文化誌研究会にもより深く参加する形となり、総会や運営委員会にも参加して博物館事業や雑穀街道事業について転機を迎えていることも知った。自然文化誌研究会は他のキャンプを生業とする団体とどこが異なり、キャンプの目的ならびにキャンプ以外の活動も学術的な意味がしっかりあるということを考え、理解できるよう努力しつつ参加していきたいと思う。私は教育者でもなければ哲学者でもないし、学者でもないからいわゆる「環境教育」という思想についての解釈は難しいが、自分なりの解釈として「非日常の環境の中で、出店方式のプログラムにより子供たちの好奇心を刺激し、山村という環境や文化的な事柄のみならず参加する大人の持っている知識や技術に子供たちが自然と興味を持てるように活動することで子供たちの成長を促すこと」と考えている。今後も、「子供たちと共に楽しむこと」「教育系ではない人間として、子供たちや学生の興味の扉を開くため」ということは忘れずに、INCHのキャンプには一生関わって行くと思う。



「元参加者のスタッフ像」

熊木日向（自然文化誌研究会運営委員）

私の INCH との関わりは、2010 年 GW のキャンプまで遡る。きっかけは親の知り合い（町田家）に「キャンプ参加してみない？」と声をかけてもらったことだ。最初は GW のキャンプに 1 日だけ見学のような形で参加させてもらった。自由気ままにやりたいことにチャレンジする参加者の姿は、当時相当衝撃で、半分困惑、半分ワクワクという気持ちを抱いたことを覚えている。

他の参加者を例にやってみたいことを一日でたくさん体験した。特に鮮明に覚えているのは、大雨の中での丸太の皮剥きである。何かを分解したり、はがしたりすることが好きな子どもだったので、かなり熱中していたと思う。（その丸太は現在の B 棟の壁になっているはずだ。）

中学入学までは INCH 主催のキャンプにすべて参加した。一輪車を押しまくり、拳句の果てに仏舍利にまで持ち出したこと。夜通し星を見続けたこと。連続参戦で二週間近くキャンプ場に居座ったこと。真冬のキャンプでスケートリンクを作ったこと。雪中キャンプで天然のジェットコースターを作ったこと。——出せばキリがないが、小学生の頃の記憶のかかなりの容量を INCH が占めている。

中学に入ってから部活の合間などに顔を出す程度になったが、高校生スタッフとして参加するようになってから再び深く関わるようになった。そして大学に入学すると同時にコロナ禍に突入し、キャンプは 1 年間滞った。その後、参加者を募集する形で再開したのは 2021 年の夏の冒険学校である。

2021 年といえばまだコロナが猛威を振るっていた時期で、スタッフも参加者も厳重な感染対策のもとでの開催だった。スタッフも集まりにくい中で気を張ることが多く、冒険学校後には疲れがどっと押し寄せてくるような感覚を味わった。だが、そうした状況をみんなで工夫しながら乗り越えた経験は貴重であり、キャンプの価値を改めて実感する時間でもあった。

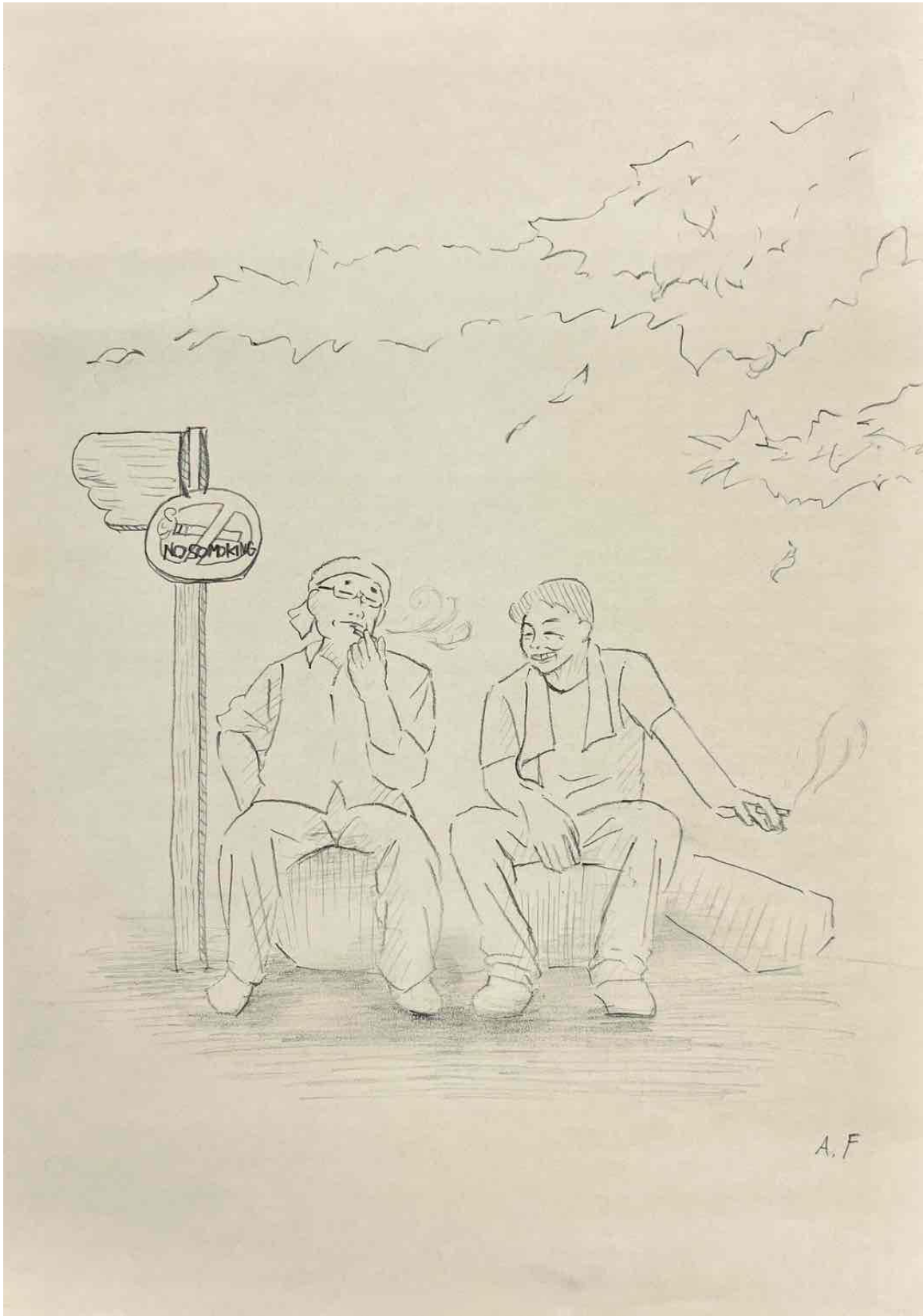
その後、開催形態も徐々に元に戻っていき、自分もスタッフとして板についてきたのか、ベテランと言われるような立場になっていった。キャンプ場外に出る際の取りまとめ、小集団の運営、さらには村長まで務めさせてもらうようになった。

参加者から村長まで経験してみて常々思うのは、「参加者あがりのスタッフにしかできないことがある」ということだ。もちろん、キャンプ場のルールを知っているとか、多少のアウトドア知識があるといった利点はある。だが、元参加者だからこそ任されることは、意外と多くはない。

冒険学校の唯一無二な点は、その自由さにある。参加者がやりたいこと、やってみたいことをできる限り形にしてみる。その中で得られる達成感や満足感は、一生モノの経験になると言ってい。その挑戦を見守り、サポートすることこそスタッフの重要な役割である。だが子どもの挑戦は時に無謀で、時には危険を伴うこともある。普通なら止めてしまう場面でも、参加者あがりのスタッフだからこそ「どうすればできるか」を一緒に考え、一緒に挑戦し、一緒に楽しむことができる。この「自由さ」を享受してきた身だからこそ、その思想を受け継ぎ、伝えていくことができるのだと思う。

私は冒険学校が大好きだ。その自由さが好きだ。これからもこの大好きな冒険学校を自由な形で続けていくために、元参加者として全力でスタッフを全うしていきたい。





私と INCH とこすげ

井村礼恵（自然文化誌研究会運営委員）

1) 冒険学校

私が自然文化誌研究会（INCH）に出会ったのは、まだ学生の頃だ。大滝村冒険学校のスタッフをしたことがきっかけだった。私は学部生時代には様々な団体に所属し、環境教育、国際理解教育、平和教育、青少年活動等に関わっていたが、とにかく、それらと INCH の冒険学校は別格だった。大滝村のキャンプ場を拠点としながら、川遊び、染め物、砂金とり、洞窟探検など、沢山のプログラムが用意されていて、ご飯も各々の活動に合わせて食べるなどの自由度が高い内容で、ひとりひとりが無理をしていない自由選択の心地よさがあった。自然豊かなキャンプ場で、特に活動もせずにゴロゴロしていてもよく、それはスタッフも同様だったことには、大きな衝撃を受けた。キャンプ場で出会った別団体キャンプに参加していた小学生に「キャンプでどんなことやってるの？」と尋ねたところ、「リーダーの指示に従う」という答えが戻ってきた。同じフィールドでも、方法論が異なると、このように両極の活動となるのだと理解したことを印象強く覚えている。

その頃、私は修士で木俣研究室（民族植物学、環境教育学）に入り、研究テーマに悩んでいた。木俣先生から、1970 年代に行った調査「雑穀のむら」について、時々、お話を伺っていた。小菅村周辺では、しゃくし菜（タイナ）を塩で漬物にして、春になって古漬けになったものを唐辛子と油で炒めて食べる郷土食がある。木俣先生は、そのしゃくし菜油炒めについて、「野菜を長く保存し、それを古漬けになってからも美味しく食べる方法でもあり、それは春になって、畑作業などで身体を動かすことが多くなる中で、身体が必要とする塩分と油分を採ることにもなっている」と説明をしてくださった。その時が、私の中で長い歴史の営みの中で創り出されてきた伝統的な知恵の偉大さに気付いた瞬間であり、その後、小菅村を中心として、在来品種野菜や郷土食、養蚕、狩猟等について、調査研究を行っていくこととなる。

まず小菅村に調査に入って、最初に驚いたのは、過疎地域に対する先入観的イメージと異なり、村役場の課長がみな若いことだった。加藤源久教育課長、青柳諭源流振興課長、佐藤英敏住民課長、亀井雄次商工会指導員等。この村は年功序列じゃないということ、そして、どう見ても優秀な人材が課長をしていること、このことでなんなんだ、この小菅村は！！と、とても魅かれた。そして、私の小菅のお父さんお母さんである守屋竹治さんと秋子さんの存在によって、私の小菅でのアイデンティティも創られていくことになる。小菅の方々はどの方も親切に温かく接してくれた。当時は日本全国で大学生が村をうろうろするなどということはあまりない時代だったし、地域おこし協力隊という制度が始まる何年も前のことだった。村民にとってはごく当たり前の暮らしについて、フィールドノートとカメラを持って質問をしに来る学生を面白いと感じてくれていたようだ。女人禁制の小永田神楽神事にも、「おまえは男だから」と言って参与調査をさせていただいたことは本当に有難く、私の調査のモチベーションを大きく上げてくれた。神楽ではまず清め（酒を飲む）、次に清め（酒を飲む）、ずっと清め（酒を飲む）、終わりに清めて（酒を飲む）解散となる。村では、「井村はワク（＝ざるの目すらないの意）」と呼ばれるようになっていった。そのように、小菅の方々に見守られながら、修士を終え、博士課程に進むことになっていた頃、ちょうど、小菅村立の多摩川源流研究所を新設するため、その研究員として勤めないかと話をいただいた。木俣先生には、

「井村さんは飲みの力で声をかけていただいたのですね」というお言葉をいただいたが、最高の誉め言葉だと受け止めている。村社会において、集落の集まりの場というものが重要な意味を持つことを参与観察させていただき、そこに同席する機会をいただいたことは本当に有難かった。

多摩川源流研究所に勤めた3年間、私は小菅村に住んだ。住んでみて、小菅の方々は新しい人にも事象にもウエルカムな広い懐を持っていると感じ、村の住民が村の自然文化の一番の専門家で、「小菅人を育む会」や「あそんべえ会」など地域のことを楽しもうとしていることに尊敬の念を一層大きくさせていた。そんな3年目のタイミングの時、INCH 運営委員会で「大滝村ではエコミュージアム構想に対してあまり肯定的ではない、冒険学校の今後の継続はどうか」などの議論が出ていた。私は冒険学校という独自性を持った体験活動を絶対に維持したいという気持ちで、大滝村を引き払うのであれば、小菅村で冒険学校を行っていくのはどうかと提案をした。小菅には冒険学校を行う上での材となる自然や生活文化もあり、それを伝えられる村人達もいた。懐の広い小菅村でうまくいかないのではあれば、どこでもうまくいかないだろうという考えもあった。INCH らしく、誰も否定はしないという反応だった。その後、私は多摩川源流研究所を退職することが決まったこともあり、当時、既に INCH 事務局だった黒ちゃんに対して、小菅村の魅力アピール大作戦をし、小菅に住んでくれないかと相談をし始めた。エコミュージアム構想の中に位置づいている冒険学校はその地域で行うことに大きな意義と価値があり、地域と INCH をつなぐ存在が必要だと考えていたためだ。黒ちゃんを小菅に連れていき、私が大好きだった小菅の「食処川の音」の牛のハチノス煮込みと鶏丸揚げなどを振る舞った。残念ながら、今は「食処川の音」はない。小菅に住めば、こんな美味しいものが食べられて、沢登りや登山も日常だよ、小菅の人達は親切！と私の大好きな小菅について大宣伝をし、結果的に黒ちゃんは 2004 年に小菅に移り住んでくれることになった。黒ちゃんの移住がなかったら、今のこすげ冒険学校はない。黒ちゃんには感謝の言葉しかない。さらに、こすげ冒険学校は少しずつ少しずつ、大滝村冒険学校でスタッフをしていた人たちが増え、沢山関わってくれている。私が大滝村ですごい！と感じた冒険学校の思想や方法論の軸が継承されていることを嬉しく感じている。黒澤ご夫婦という存在は大きい。

2) 植物と人々の博物館

自然文化誌研究会は、学術探検からはじまり、その後、民族植物学的伝統知の継承・保全活動、教育活動へと展開をしていった。この流れの中で、重要となるキー概念は「エコミュージアム」である。「エコミュージアム」とは 1960 年代にフランスのリヴェール氏が提唱した地域まるごと博物館などと呼ばれるものである。INCH では大滝村を主たる拠点としていた時から、エコミュージアム構想のもと、様々な活動を行ってきた。今ではエコミュージアム概念について知っている人も多いが、1991 年より大滝村で日本でエコミュージアム構想を進めようと考えた INCH の動きは時代よりかなり早いと言える。拠点を小菅村に移してから、「エコミュージアム日本村」、そしてコアミュージアムとしての「植物と人々の博物館」づくりを進めてきた。1970 年代に木俣氏・代表中込氏らが上野原西原地区、丹波山村、小菅村で農耕文化基本複合の観点で学術探検を行ったが、その後 1990 年代に井村が小菅村において、追跡調査を行った。それらの村民へのインタビュー調査や参与観察の結果は、「植物と人々の博物館」の調査データのひとつとなっている。参与観察を進める中で、村の方から教えていただいたのは「生業」の単なる知識や情報だけではなく、地域環境に

対する環境観や認識も含むものだった。村民と対話しながら、一緒に見つけてきた宝物がこすげ冒険学校のプログラムづくりの材研究にもつながっている。私自身は調査を行いながら、地域環境の保全と文化継承は深くかかわっていることを強く感じ、「生物文化多様性」の理解を深めることとなった。「植物と人々の博物館」は小菅村のみならず、国内、世界とフィールドの限定はなく、「農耕文化基本複合」や「生物文化多様性」の視座を持って研究を行う研究所なのである。

「植物と人々の博物館」づくりの歴史を語るには、東京学芸大学との連携についても欠かせない。東京学芸大では、2005年10月に文部科学省現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）「持続可能な社会づくりのための環境学習活動～多摩川バイオリージョンにおけるエコミュージアムの展開～」が採択され、2009年まで3年半に渡り事業を行った（井村はこの事業の環境学習推進専門研究員）。この中で、授業として「植物と人々の博物館」づくりに学芸大生が関わり、村民を囲んでの座談会や民具整理・展示などを行った。村の間伐材を使用した展示棚の造作は村の大工さんをお願いした。2007年には吉富研究室で「小菅の名人」巡回展示も製作された。同年には、美術選修と環境教育選修とのコラボで「雑穀展」を学芸大と小菅で開催した。

みんなで行ったという視点で私が特に記憶に残っているのは「山里を支えた養蚕」調査を実施し、小菅で養蚕展を開催できたことが大きく印象に残っている。村民の方は協力的で古いものを整理・展示することをよろこんでくださった。研究員の川上氏、和家氏にも協力いただいた。アドバイザーを東京農工大学科学博物館が引き受けてくださり、「繭からの糸づくり体験ワークショップ」を小菅村で開催できたことも、嬉しい出来事だった。養蚕関連の調査結果を展示や報告にするにあたっては、学芸大美術の池上氏・本間氏の力をお借りできたことも大きかった。例えば、井村が小菅で着物を預かり大学に持ち帰り、池上・本間両氏に渡すと、光の加減から配置、角度など、かなりのこだわりで撮影を何時間もしてくださった。その妥協のない姿勢には煽られるほどの勢いがあつた。本間氏には小菅にも何度も来ていただき、繭玉を飾るダンゴバラの展示製作などもしていただいた。井村が運転するスポーツカーはくねくね山道をビュンビュン走り、同乗者が酔っていく中で、まったく平気な本間氏を見て、やっぱり大物だなと感じたことも懐かしい。

このように沢山の多様な専門の教職員や学生、地域の方々が一緒になって、植物と人々の博物館は創られていった。みんなこだわりをもって、より良い研究、より良い調査、より良い展示、より良い実践をしたいという思いがあった。

個人研究で特に思い入れがあるものとしては、中国イ族の有用植物利用について調査し、トウモロコシの調理法のひとつが小菅のものと同様のものがあつたことを発見したことや、2011年に東日本大震災があり、環境教育学や民族植物学を研究している「私」にできることは何かと宮城県気仙沼市大島でホームガーデン調査を行ったことなどが挙げられる。さらに、今は既にデータをとることができなくなってしまったという意味で、狩猟に関する調査研究では仲間内だけに伝承されてきた技や隠語、世界観などを記録に残せてよかったという気持ちが強い。



※「エコミュージアム日本村」ロゴマーク、「植物と人々の博物館」ロゴマークは池上氏のデザイン。



エコミュージアム日本村

自然文化誌研究会(東京学芸大学冒険探検部)
創立50周年記念座談会 2025/06/21

「生物文化多様性」地域環境の保全と文化の継承は深くかかわっている






「伝統智」
参与観察調査を進める中で、
村の方から教えていただいたのは、
単なる知識や情報だけではなく、
地域環境に対する環境観や認識。



By Kimata



学術探検と環境学習の創造



植物と人々の博物館
Plants and People Museum

聞き書き

聞き書き

植物と人々の博物館研究員や研修生による気軽な調査報告や情報公開の場です。
世界、日本問わず、民族植物学的視点、
環境教育の視点、エコミュージアムの視点
などについて情報を寄せ合います。

自然文化誌研究会(東京学芸大学冒険探検部)
創立50周年記念座談会 2025/06/21



中国四川省民族調査



山里を支えた養蚕



身近なインドの生活文化



山梨県上野原市西原における
伝統智1



山梨県上野原市西原における
伝統智2



岩手県久慈市における
伝統智



山梨県小菅村における
伝統智1



静岡県葵区井川における
伝統智



長野県飯田市南信濃における
伝統智



山梨県小菅村における
伝統智2



タイの山村における
伝統智

「理想のキャンプ場目指して」～ログビルダー養成講座

黒澤友彦（自然文化誌研究会 事務局長）

◇最初の経緯

2004 年に本会が小菅村に来た際、小菅村の橋立地区の「とあるキャンプ場」を利用することになった。もともとこの場所を見つけてきたのは、あべちゃん（井村礼恵）である。キャンプ場のオーナーは、善さん（木下善晴）。趣味の延長だったと思う。この場所は確かに、キャンプ場「風」になっていた。

台所、東屋、五右衛門風呂、小屋（6 畳）がトタン屋根で作っており、トイレは工事現場用のもの。

それ以外の設備は無い……と言う穴場のようなキャンプ場であった。もちろん通常の営業はしていない。

キャンプ場自体はこれまでに冒険学校を開催していた大滝村でイメージすると、川コースのオオガマタ小屋と村コースの中津川キャンプ場の中間ぐらいの自然環境、設備だと思った。電源はあるし、携帯の電波も入る。（ほぼ）貸切で使えるので、それからの冒険学校はこの「とあるキャンプ場」を借りて開催するようになった。その頃は、ここを穴場と知ってお客さん達が既にいました。穴場でゆっくりと過ごしていたのだと思う。自然文化誌研究会が冒険学校という特殊なキャンプを持ち込んだことにより徐々に追い出してしまったというのは事実だと思う（イリーガルな事はしていないけれども）。



◇ログビルダー養成講座（＝ログスクール）

2008 年、本会の代表理事のごめさん（中込卓男）が職場で一緒にいた若狭さん（若狭浩二）と、小菅村の木材資源を活かすことも兼ねた「ログビルダー養成講座（ログスクール）」を企画した。

当時の企画書から抜粋すると以下のとおりである。

ログハウス作り企画案 2008/01/17 中込 卓男

1. 小菅村の材木を（間伐材を主に）利用し、自分たちで木を切り出すことから始め、できるだけ自分たちの手でプライベートキャンプ場にログハウスを作っていく。このログハウスづくりのノウハウと、INCHの理想的なキャンプ場づくりの2つを「商品」として、参加者を募る。キャンプ場オーナーとは話し合って東屋風のログハウスを作ることは内諾をとってあるが、後日文書できちんとやり取りをすることになっている。

2. 期間

2008年2月～8月（第1期）東屋の建設

第2期以降も予定しているが（トイレ棟、宿泊棟、ツリーハウス群等）、オーナーとはまだ話し合っていない。とりあえず、東屋を完成させることで、その後の展開を考えていく。

オーナーの善さんの了解を得て、ログビルダー養成講座（ログスクール）をしつつ、キャンプ場にログハウスの東屋を立てることになり、小菅村内にも回覧板を出した。小菅村内からも参加者があった。

主催事業としては、会計も含めてなかなか難しいところもありました。「理想のキャンプ場づくり」というテーマもあったので、冒険学校で使用することも考えながら、ログハウス自体の建築に時間を注ぐことになっていく。ログスクールそのものは2泊3日×3回で基礎的な講座、モチベーションの向上などを狙っていました（当時のチラシ参照）。

2009 年、現在の A 棟（INCH 木ハウス）が完成。この建築費については、本会の助成金や若狭さん個人の持ち出しがありました。立派なログハウスができたことでオーナーの善さんから信用を得て、引き続き現在の B 棟の建築に進みます、B 棟についてはオーナーの善さんが建築費をほぼ全額出していたと記憶しています。

A 棟・B 棟のどちらも、本会の所有ではありません。オーナーの所有ということで合意を取っています。ログハウスだけではなく、斜面の石積みなども途中で行ってきました。A 棟は当初、腰高までサドルノッチのログハウス（工法）の東屋の予定でしたが、完成形は 2 階建ての壁入りの密閉されたログハウスとなりました。これは作業進めながら相談していったのでこれも歴史という事で。

B 棟については、1 階が土間の雨天時作業スペースで 2 階が壁入りの宿泊可能なスペースとして設計しました。後にオーナーの善さんの希望もあり、1 階を板の間にしました。板の間に使用している材は、善さんの生まれ家の材ということで、100 年以上前の貴重な材料になります。

ログビルダー養成講座=ログスクール=ログハウス建築作業については、ほぼ毎月 2 回のペースで、何年も何年も継続してきました。関わったログビルダーたちは、冒険学校のスタッフよりも足繁く小菅村に通っていました。

B 棟が完成したところで、ログハウスの第 3 弾はキャンプ場を離れ、事務局の黒澤家を建てることになりました。ログハウスですが丸太の切り倒しと皮むきからのスタートではなく、フィンランドからオーダーメイドで輸入した材=これはプレカットされており、大きなプラモデルとでも言いましょうか、自力で組み立てていき、内装をしていきました。完成まで 2 年間かかりました。

基礎は善さんに仕事として（木下建設）、上下水道、屋根、板金等はそれぞれ専門業者が入っています。この場を借りて御礼申し上げます、ありがとうございました。



第 4 弾はトイレ棟になります。2018 年から手がけ、2019 年の「こすげ冒険学校」の事前準備期間に突貫作業をして前日に完成しました。もう最後の最後は冒険学校の準備をしながら必死に作業した記憶があります。

ログビルダー養成講座自体は最終的には軌道に乗らなかったものの、ログハウスを通して「理想のキャンプ場づくり」ということで、「とあるキャンプ場」の整備に関わり続けたことはこの 20 年間の大きな成果です。手弁当で通い続けてくれたログビルダーのみなさん、本当にありがとうございます。

また、本会の希望である「理想のキャンプ場づくり」という、ワガママを聞き入れて一緒に歩んでくれた善さんをはじめ、木下家のみなさまに心から感謝しております。

キャンプ場の名前についてですが、冒険学校のしおりでは「いつものキャンプ場」としていました。これまでに何回か、「キャンプ場に名前をつけよう！」ということで、「星空キャンプ場」や、ほかの名前も上がったことがあります。なかなか決まらず、なんとなく「いつものキャンプ場」という呼び方がしっくりときていました。

現在、「清水バンガロー」という名前があります。この命名をしたのはオーナーの善さんです。キャンプ場は清水が出るということで「清水」という地名が昔からあるようです。「バンガロー」というのはオーナーの善さんのイメージなんでしょう、特に問題ないです。なんで名前をつけることになったかという、立派なログハウスを立てたため、火災報知器などの消防設備を設置する必要があり、その際にオーナーと相談した結果名付けたという経緯になります。

冒険学校スタッフからは佐々木さん（佐々木正久）が大きく関わっています。もともと土間であった東屋に囲炉裏と板の間を造ったのは佐々木さんです。現在利用しているベンチも佐々木さんの手づくりです。自宅で作って解体した状態で軽トラで積んできて、キャンプ場で組み立て直しています。この夏は川に降りるハシゴでした。ログハウスの換気のために網戸を設置したり、五右衛門風呂のメンテナンス、上水関係のメンテナンスなど佐々木さんがしてくれています。最近の詳細は佐々木さんの YouTube、「まー君のナチュラルライフ」で観られますのでぜひ！！

2025 年現在、オーナーの善さんが 90 歳を超えたため、キャンプ場の管理と予約については自然文化誌研究会が任されています。今年の課題はトタン屋根のペンキ塗りと夕立でえぐれた坂道の補修といったところでしょうか。ログハウスもそろそろメンテナンスの必要があります。夏の冒険学校も終わったので涼しくなったら始めようと思っています。今後も、関係者のみなさまの協力を得ながら「理想のキャンプ場づくり」を維持しつつ、ご近所の方にもご迷惑おかけしないよう気をつけながら、自然文化誌研究会の事業を進めていきたいと思っています。



● ● ● 理想のキャンプ場をめざして ● ● ●

ログビルダー養成講座

秘密基地を作った人、憧れている人。集まれ！！

冒険学校を初めて 20 年目の今年、『常設の冒険学校を作りたい。』という僕らの夢「秘密基地づくり」は、形をなしてきました。理想のキャンプ場を作ろう。幸いにも、豊富な森林資源に恵まれた山の中、地元の材を有効利用して進めていきます。

今回は、自分で秘密基地を作りたい人向けの、ログビルダー養成講座を始めます。一人ひとりのペースに合わせて指導します。講習会終了後も、理想のキャンプ場を作るために、丸太を組んでいく予定です。 トイレ棟やツリーハウスも！？夢は広がるばかりです。

丸太と対峙する「静と動」を感じてください。

初回では、ログハウス作りの基礎からきっちり学びましょう。基本ができれば、あとは本番です。『習うより慣れろ』ということで、実際にログ東屋の建材を刻んでみましょう。時間をかけてじっくり木と向き合い、刻むことができれば、あなたはりっぱなログビルダーとして歩み始めたといえるでしょう。

やればやるほど上達し、自らの家を建てる技術も身につきます。

ビルダー若

■ 日 程

I 9月13日～15日 丸太の加工ベーシック技術編

II 11月1日～3日

III 11月22日～24日

■ 場 所

山梨県北都留郡小菅村 上流のキャンプ場

■ 対 象

ログハウス作りに興味がある方 10名 先着

■ 講 師

若狭 浩二 【ビルダー歴10年】

■ 内 容

- ・チェーンソーの扱い方・メンテナンスなど
- ・スクライビング
- ・チェーンソーワーク

など、丸太組み・ログハウスを建てるために必要な技術を学びます。基礎的な講義の他は、実技をメインに行います。

■ 参加費

3回一括 会員 ¥66,000

1回ごと 会員 ¥25,000 非会員 ¥35,000

(参加費には、講習費、道具、保険代が含まれます。)

※宿泊費、食費は別途かかります。申込みの際ご相談ください。

ログ工法で建てる東屋プロジェクト



完成イメージ図。自然文化誌研究会で今取り組んでいるのが、この東屋プロジェクト。2008 年内の完成を目標に、基礎からすべて手作りで進行中です。見学自由。詳細は事務局まで。

■これまでの作業の様子



皮むき



スクライビング



チェーンソーでの加工

(2008 年の案内です)

ELF 環境学習中堅指導者（のびと）養成事業

西村俊（自然文化誌研究会理事）

野人（のびと）：『ナチュラリスト、インタープリターなどと言われているが、そういった人たちを私たちは「野人（のびと）」と呼ぶことにした。自然のみならず人間・文化に興味を持ち、環境教育的視点に立って、自然とその上に築かれた文化を伝えていくのが野人（のびと）である。』（ナマステ 9 号、1992 年）

中級指導者養成：『1988 年第 2 回清里フォーラム（現在「清里ミーティング」）に参加し、第一期の冒険学校について佐藤雅彦が発表し、参加者から多くの反響を呼んだ。その後数回清里フォーラムに出席した。このころ環境学習の指導者養成の必要性がよく議論されていた。初級指導者のための議論であった。その時、私は中級指導者養成について必要性を主張したが、参加者は興味を示さず、議論にもならなかった。「中級は自分で努力して身につけるものだ。」「そんなものは・・・」といった具合であった。中級、さらに上級指導者の養成についてはずっと温め続けていた。』（冒険学校のあゆみ、2015 年）

自然文化誌研究会では、農山村を中心としたフィールドで、その場でしか出会えない人、自然、文化を活かした環境学習活動が続けている。大人向けの企画としては、源流（甲武信岳）での登山道整備、小菅村での味噌づくり、きのこキャンプ、星空観察会などの「のびと講座」を開催し、子どもの活動の場と指導者の育成の場としては「冒険学校」がある。その独自の活動実績とノウハウを基礎に、環境学習指導者「のびと」の認証（認定ではない）過程を体系的なテキストと講習プログラムにまとめ、環境学習の中級指導者養成を実現したいという思いを長年持ち続けてきた（冒頭に 2 つの記述を紹介）。実際に、その実践を万華鏡方式による環境学習活動の枠組 ELF（Environment Learning Framework：エルフ）として、体系的に整理し、まとめるための議論と実践研究も続けてきた（図 1 に枠組み具現化の変遷を例示するが、粘土での立体的な模型作りや DNA の 2 重らせん構造を模した図への拡張など、様々な表現技法の精錬が続いている）。

特に民族植物学の成果を基盤として中級レベル以上へと知識・技能の向上を図る継続研修とこれを支える体系的な学習プログラムの体系を ELF（BACK）：Environment Learning Framework（on Basic Agricultural Complex Kaleidoscope）と称し、2007 年に指導者養成講座を開講し、実際に受講生が参加した座学と実技の講習会の実践へと移った。基礎科目 18 単位と ELF プログラム 22 単位（ELF 基礎理論を含む）の全 40 単位（1 単位 90 分を基本として 60 時間）で構成され、講義ではそれぞれの作業モデルについて実技実習で学び、現地実践による OJT を組み合わせて行うカリキュラムで、本会の理事をはじめ、環境教育分野で活躍されている各専門家、主に秩父甲斐多摩国立公園内で伝統的な暮らしの智慧を今に継承されている方々を講師に招き、講義・実技の指導をしていただいた。ELF（BACK）研修会を経て野人（のびと）認証 第一号（認証番号 08001、平成 20 年 3 月 8 日認証）となったのは、田辺薫さん（現在、宮崎県諸塚村で活躍中）でした。

子どものための「冒険学校」での実践や「のびと講座」、「環境学習セミナー」と合わせて、その理論の裏付けとなる ELF 環境学習プログラム枠組みの動的な側面を再確認し鍛錬することで、科学的知識体系と伝統的知識体系を融合し、全体的に事象間の関係性を見つけ出し、境界領域制を超えて新たな統合的領域（全体像）を探索する力を身に着けることは、環境の広がりをもっと広域に統合的に捉える助けとなります。自然文化誌研究会は ELF の理論を基礎として、秩父甲斐多摩国立公園を中心に「探究分野を深めつつ環境保全・学習・創造ができる職業人「のびと」となって活躍できる人材育成」に今後も取り組んでいきます。

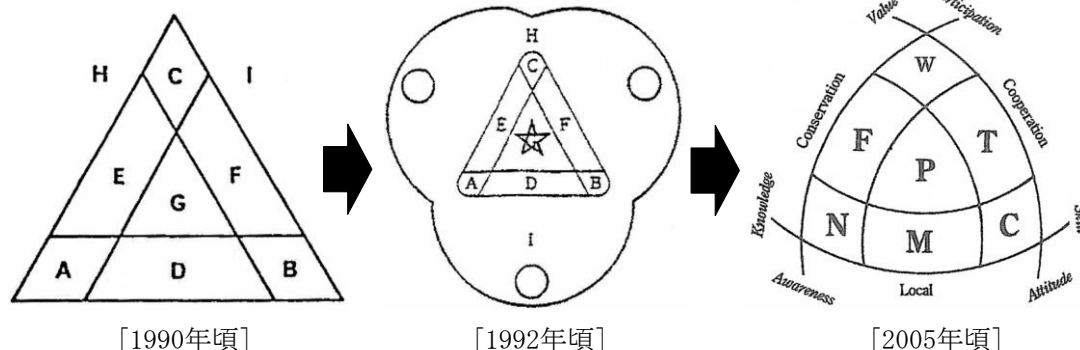


図1 カレイドスコープ方式：環境学習プログラムの枠組みの具現化の変遷

10 の環境学習プログラム：自然誌（N）や文化誌（C）を学び、世界観（W）を形成する「基本プログラム」、これらをつなぐ生産（M）、思索（T）および感得（F）の「関連学習プログラム」、すべてを統合する遊戯（P）の「統合学習プログラム」、さらに地域（L）、協働（C p）および保全（C n）の「行動学習プログラム」によって構成されている。

6 の環境教育の目標：関心（a w）、知識（k）、技能（s）、態度（a t）、参加（p）および価値観（v）を達成する。

概説：ELF 環境学習課程では、個別の学習プログラムのみを実施する場合もあります。複数の学生プログラムを関連付けて実施すること、多数のプログラムを統合することもあります。それぞれの学習プログラムとその関連性は、スタッフの実践や経験も交えてプログラムシート化が進められています。環境を学ぶ上で方法的に最も重要なことは、事象の関連性を見出し、また関連付けることです。ELF 環境学習枠組みは、学習プログラムの流れ（フロー）の方向、学習プログラム間の結び（リンク）、および複数の学習プログラムの編み込み（ウェップ）を構想する過程で、複合的・立体的に物事の関連性を捉え鳥瞰することに役立ちます。万華鏡を覗いた時のように「融通無碍」な模様を織りなすように、多彩な学習プログラムの設定ができます。固定的な運用をせずに、状況が変われば話題やプログラムをその状況の主役を優先して変更して良いという運用の柔軟性が担保されていることが肝心なことです。

（事務局補足）

「ELF（BACK）研修会を経て野人（のびと）認証を行う」について、本会のエッセンスを集約した内容に自負はあるものの、あくまでも本会独自の認証でしかないと、世間に周知されている外部の認証制度である CONE（自然体験活動推進協議会）との連携を進めました。CONE（現在は NEAL）リーダー、インストラクターの認証を同時に行うために、本会も CONE に所属し（年会費を払い）、内部で CONE の資格認証を行うために、木俣と黒澤が CONE トレーナーの認定を受けるために、研修会に行き認定を受けました。

その後、CONE 資格認証のメリットについて議論を行い、トレーナー資格の更新をやめて、CONE 資格認証との連携をやめることになりました。

現在では、CONE をはじめとする他団体との乗り入れは行っていません。

今回の 50 周年記念の機会に再度の見直しを行い、その活用と進め方を検討する予定です。

沙流川冒険学校

中込 卓男

沙流川冒険学校は、1998年から2004年、毎夏北海道の平取町二風谷を中心として開催してきた。「冒険と子どもたち」(2015)7-4に10ページにわたって7年間の活動をまとめてある。ここではそれ以外のことを書こうと思う。

2004年第7期で終わってしまったが、第8期はタイのウタイタニー県バンライのパンダキャンプで(「冒険と子どもたち」(2015)7-5タイ環境学習キャンプ参照)地元の少数民族ラオ、カレン、ヴィエング等の子どもたちとアイヌの子どもたちとの交流を考えていた。(財)アイヌ文化振興・研究推進機構協会の助成金申請をしたが通らず、現在も実現していない。残念である。

1981年から1984年、自然文化誌研究会と東京学芸大学附属環境教育実践施設との北海道調査が行われた。(木俣美樹男・木村幸子・河口徳明・柴田一 1986、北海道沙流川流域における雑穀の栽培と調理、季刊人類学 17(1):22-53。)

(財)森とむらの会「多様なニーズに対応する森林の管理手法に関する調査研究」が 1995 年～1997 年に行われ、私は 1996 年と 1997 年の調査に同行した。調査結果は木俣さんがまとめた。(木俣美樹男 1995、沙流川流域の現状と課題、pp.20-34、平成 7 年度多様なニーズに対応する森林の管理手法に関する調査研究報告書、財団法人森とむらの会。木俣美樹男 1996、沙流川流域の森林の多面的利用に関連する団体・個人の連携 pp.6-20、平成 8 年度多様なニーズに対応する森林の管理手法に関する調査研究報告書、財団法人森とむらの会。木俣美樹男 1997、沙流川流域森林への多様な関係性の形成——管理手法としての沙流川エ コミュニアムの提案、pp.28-34、平成 9 年度多様なニーズに対応する森林の管理手法に関する調査研究報告書、財団法人森とむらの会。)



▲調査メンバー:左から中込卓男、木俣美樹男、石橋隆明 ▲DNA2(ディーナ 2)共和国

この調査は、沙流川流域の日高町、平取町、門別町を中心に、さらに苫小牧市や日勝峠を超えて鹿追町の然別湖まで行われた。レンタカーを私が運転し、木俣さん(木俣美樹男)、財団法人森とむらの会の事務局長、石橋さん(石橋隆明)の3人で調査を行った。平取町二風谷貝澤薫さんの民宿チセに宿泊した。お酒好きの石橋さんと、夜にお酒を買いに車で店を探したが平取町は早くにしまっていて門別町まで約1時間かけてやっと手に入れたことを思い出す。

この調査で、日高ケンタッキーファーム、平取町森林組合、平取ヨシモト株式会社、国立日高少年自然の家、然別湖ネイチャーセンター、日高高校、日高営林署、DNA2(ディーナ 2)共和国、日高町役場、

平取町役場、門別町役場、各教育委員会、二風谷ファミリーランド、平取町立二風谷アイヌ文化博物館、萱野茂アイヌ記念館、マンロー博士記念館等々で、いろいろな方々に出会い、お話を伺うことができた。そのことが、「沙流川冒険学校」に非常に役立った。

「のびと講座」アイヌ文化にふれる（1993/2/11～14）をはじめとして数回にわたり二風谷で行い、貝澤薫さん、かつえさんを講師としていろいろ教えていただいた。



▲小屋づくり:河原で取ってきた柳の枝で骨組みを作り、オオイタダリの葉で屋根を葺いた。火を起し、石板の上で釣ってきた魚を焼く。オオイタダリの茎を利用して日本酒をお燗。うまい！



▲マタンブシづくり:アイヌ文様(それぞれの家で違う形)を布にうつし、針と糸を使って刺繍をしていく。貝澤かつえさんが講師。私は、途中でチェーンステッチを失敗して、かつえさんに「またはじめからやり直しだね。」とすべてほどかれた。夜が更けるまでがんばった。



▲植樹

貝澤薫さんと山歩きをしながら植物の利用法を教わり、 中が空洞なノリウツギの木をつかってキセルを作ったり、貴重な縫い針をしまうものを作り常に首から提げて持っていたこと、鹿の骨の髄を使った汁物、それに入れる野草の種類、寒さを利用してジャガイモからデンプンを取る方法やイタヤカエデの樹液を凍らせてアイスクャンデーを作り子どものおやつとしたり、独特な発声法のいろいろな唄や踊り、熊送りと生け贄の違いなどを教えていただいているうちにやっと気づいた。はじめアイヌの人々は私たちと同じだと思っていたが、それはかつての日本人が行ってきた同化政策と同じであり、そうではなく、まず違いから入って行く。どう違うのか何が違うのか、そのことが異文化を敬うことだと思った。

以上のような準備期間を経て「沙流川冒険学校」を行うことができたのである。



▲釣りをして(餌は近所でいただいたミミズ) 釣った魚を石の上で焼き食べた。おいしい。



▲川遊び:皆ずぶ濡れ:貝澤薫さんのしかけ

▲山遊び:植物の利用法を教わっている



カムイノミ:貝澤さんは、山や川など自然の中に入るとき、そこにいらっしゃるカムイにお酒を振る舞い、安全を祈願してくれた。びんに残ったお酒は皆で回しのみをしていただいた。



宿泊地「ファミリーランド」の入り口 経営している佐々木さんのご厚意でゴーカートに乗った

平取町教育委員会から無料でテント(今では見ない布製の家形テント)とシュラフを借りることができ、ファミリーランド内のキャンプ場で寝泊まりしたが、雨天時の不便さからファミリーランドふれあい館を利用することになった。2 階建てで炊事場も広く 2 階は数室あり、使い勝手が良かった。ただ、1 階はゲーム機が何台もおかれてあり、ここに食事を取るスペースがあつて、「冒険学校」という感じがあまりしなかった。隣接するゴーカート場とゲームセンターは佐々木さん(佐々木栄一)が管理経営者で、缶ビールを数本持って佐々木さんに沙流川冒険学校の主旨を話した。佐々木さんはとても気さくな良い方で、一般のお客さんより優先して施設を使わせてもらうこととなった。午後のプログラムも終わった夕方に缶ビールを持って佐々木さんと話をする。飲みながらいろいろな話を伺った。ご厚意で無料でゴーカートに乗せていただいた。この「缶ビール外交」は、いろいろなところでいろいろな人と私とをつないでくれた。もちろん時と場所は選ぶが、結構おすすめである。



冒険学校期間中に必ず 1 度は訪れる「ふじい食堂」があった。ここで店主の藤井和男、シズエさんのつくろおいしいラーメンをいただいた。行く度に私たちにジュースなどをサービスしてくれた。ありがたかったがどれだけもうけがあったかわからない。

DNA2(ディーナ 2)共和国のアーティスト千代明さんとの出会いも楽しかった。廃校になった小学校を利用して、いろいろな活動をしていたが、私たちのために流木をたくさん集めておいてくれ、それらをふんだんに使って自分なりの作品を元校庭に作った。翌年また行って作品群と再会できた喜びはなんとも言いがたかった。



木彫を教えていただいた貝澤勉さん。ジュースなどをごちそうになりながら、コースターなどを彫刻刀でアイヌ文様を彫る楽しい体験をさせていただいた。



貝澤かつえさんを講師に「アイヌ料理」作りを行った。ここでしか味わえないアイヌ文化の貴重な体験だった。



アイヌシト、イモシトルル、チタタップ等を実際に作った。かつえさんの料理はとてもおいしくシカじるが私の好物であることを、覚えていてくれて、行く度にごちそうしてくれたことを思い出す。



ホロシリ乗馬クラブでの乗馬体験。林間を馬に乗って歩くのはたまらなく素敵であった。馬をつかっていろいろなところをキャンプしたいと、密かに計画していた。



大変お世話になった貝澤薫さんは数年前に亡くなった。民宿チセも営業をやめた。私にとって一つの大きな時代が終わってしまったが、教えていただいたことは文字ではなく、私の体に染みついている。この場を借りて「どうもありがとうございました。」と言わせていただきたい。



タイ環境学習キャンプ

中込貴芳（自然文化誌研究会副代表理事）

タイと自然文化誌研究会のつながりは、1995年に遡る。タイ環境学習キャンプは、はじめは本会会員の東京学芸大学の環境学習施設の木俣が、タイで環境教育の草分け的な存在であるラジャバト・プラナコン大学のラダワン女史と知り合いになったのを契機として東京学芸大学とラジャバト・プラナコン大学との環境教育交流キャンプとして実施された。第3回環境教育キャンプが行われた際にラジャバト・プラナコン大学の環境教育センターの先生たちと本会でラダワン女史を会長に Thailand and Japan Nature Club（以降 TJ クラブ）を結成し、それ以降 TJ クラブのキャンプとして行われるようになった。

第1回目から、第8回目までは、カオヤイ国立公園を初めとした各地の国立公園やマングローブ地帯、環境教育モデル校などをめぐり、タイの自然環境やその保護、学校教育現場で行われている環境教育について学習した。この間の特徴的な活動は、カオヤイ国立公園のサイチョウの観察から発展して、サイチョウの生態や特徴を楽しく学べるように、サイチョウの双六やパズル、ポスターといった環境教育教材を開発が挙げられる。特にこの期間はまた、エビの養殖や炭の生産によるマングローブ林の破壊が、日本でも大きく取り上げられることもあり、タイのバングロブ地域を多く訪れ、マングローブの植樹などを行い、マングローブ保護のためにマングローブ地帯の生態系が学べるトランプ教材を開発した。キャンプが実施された範囲は、北はチェンマイ、南はチュンポン、西はカンチャナブリ、東はクン・クラベーン湾に及ぶ。

そうした中で、第7回目の環境教育キャンプが実施された時に、ファイ・カ・ケン野生動物保護区近くのバンライという街で活動するシリポン氏と知己を得た。シリポン氏は、WWF の職員としてその地区の自然保護のために活動していたが、WWF がその地区から撤退するにあたり、そこに留まりその地区の野生動物保護や環境保全のため継続して活動することを決意し、パンダキャンプという環境学習の場を作りそこで活動していた。

本会の方も、TJ クラブとしてタイ各地を視察する中で、継続して地元に着実に交流できるカウンターパートナーを必要としていた。シリポン氏と本会はファイ・カ・ケン野生動物保護区とパンダキャンプを拠点として相互の環境学習のために交流を深めていくことに合意し、9回以降は、バンライのパンダキャンプを拠点として環境学習キャンプとして実施されるようになった。また一方で、TJ クラブとしての活動も、ベップリーにあるプラナコン大学の施設等でワークショップを開催するなどして並行して行うことになった。

9回以降のパンダキャンプとの活動の柱は、地元の子供たちを対象にした環境学習や理科実験、日本文化に関するワークショップと地域住民や先生を対象にした毎回テーマを決めたワークショップの開催、ファイ・カ・ケン野生生物保護区やその周辺での野生動物観察やバードウォッチングや自然観察コースのトレッキング、レンジャーの活動の学習、バンライ周辺地区住民やカレン族、ラオ族からの伝統的な文化や知恵の調査研究であった。子供向けの授業では、ビーズ玉とペットボトルを使ったレーベンフック顕微鏡の製作、水生昆虫と水質調査、バナナからDNAを抽出する実験、自然の秩序の中に隠れているフィボナッチ数列を利用した絵画の製作、煮干の解剖、科学手品、ネイチャーゲーム、グループゲーム、パネルシアター、発酵の実験などが行われた。地域住民とのワークショップでは、本会の拠点である小菅村の紹介、日本の河川管理のあり方、

日本の伝統食の紹介、本会の活動紹介、アイヌ文化の紹介、ホームガーデン、原発や東日本大震災の問題、きのこ、陸稻、養蜂、バーブ等、タイにおいても参考になるであろう様々な課題をテーマとして発表し意見交換した。

ファイ・カ・ケン野生生物保護区では、バンテン、吠えジカ、サンバー、シーベット、テナガザル、オオカワウソ、イノシシなどを観察したり、トラやヒョウやゾウの足跡や糞を見つけたり、様々な昆虫を観察する。バードウォッチングでは、サイチョウ、マクジャク、カワセミ、ドロongo、インディアンローラー、キツツキなど色とりどりの鳥類を観察した。また、実際に保護区を守るレンジャーから野生動物保護の実態についても直に話を伺ったりした。また、野生動物保護区の本 部にある野生動物の保護に尽力し道半ばにして倒れた、自然保護の父として尊敬を集めているスーパ・ナカサティアンの活動についても学習した。野生動物保護区は、長い期間に渡って観察を続けてきているので、かつては近くで見ることが出来なかったマクジャクやキツツキ、ゾウやバンテンやカワウソなどの野生動物や鳥も比較的容易に見ることができるようになり、徐々に自然回復が進んでいる様子が伺える。少数民族との交流では、伝統的な踊りや歌、楽器、織物や衣服、作物、薬草、食文化、信仰などを様々な特徴的な文化を学んできた。特に竹の文化については、竹という日本と共通の材料であることもあって、小屋作りや竹工芸については実際に作り詳しく学んだ。

シリポン氏は、現在持続可能な社会を目指して自分の敷地に樹を植える育てることによって環境保全を図るファミリーフォレストという活動を行ったり、ハリナシバチの養蜂、少数民族の伝統的な知恵である薬草の知識を地域発展の為に生かそうとエッセンシャルオイルやハーブの研究普及活動も行っている。

本会の小菅村での活動も農山村文化を学び、それをいかに伝えていき地域の発展につなげていくかという所に一つの大きな目的がある。タイ環境学習キャンプはタイの大学の先生方やシリポン氏との相互の信頼関係の上に長く続けられてきた活動である。しかし、これまでこの環境学習キャンプで学んだ成果を広く発表したり、今までの活動を振り返りまとめる時ことが十分に出来て来なかった。ファミリーフォレストなどの活動は、日本の環境保護にとっても参考になるところも多くある。今後この活動を続けていく上で、私たちの活動が小菅村とバンライの地区同士の交流やタイの少数民族とアイヌ民族との交流等に発展していくようにしていきたい。



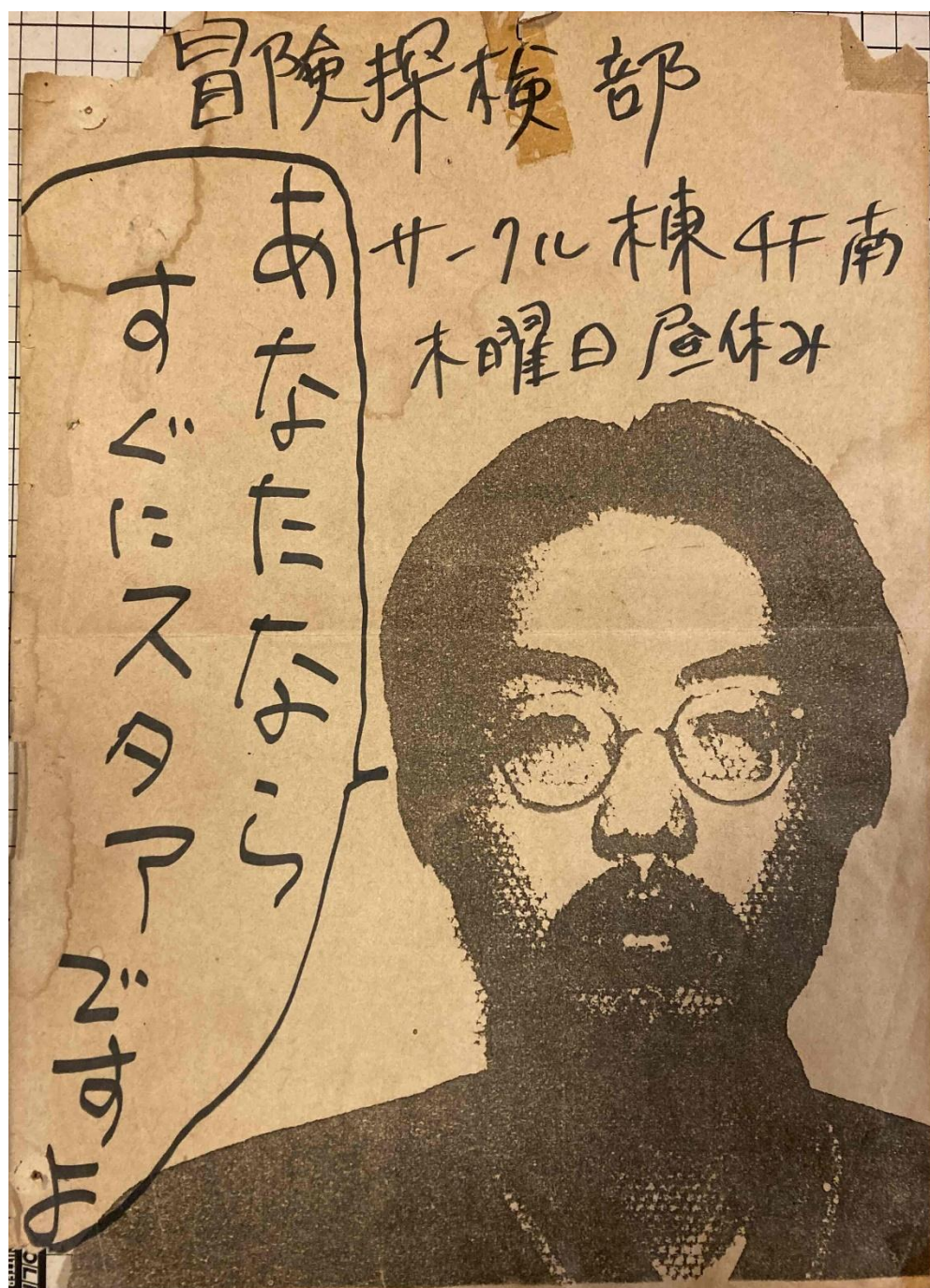
タイキャンプ開催年表

(2007 年以前は『冒険学校のあゆみ』参照, <http://www.npo-inch.ppmusee.org/src/18657/Ayumi-2025.pdf>)

西暦	キャンプ	主な実施場所	主な活動	環境施設との関係
2008	第11回環境学習キャンプ (8/16～24)	ファイ・カ・ケン野生動物保護区 バンライ	・サイ・ブル滝レンジャーステーションでの野生動物観察 ・カレン族の文化と生活の学習（織物体験） ・環境教育交流ワークショップ	
2009	第12回環境学習キャンプ (8/15～24)	ファイ・カ・ケン野生動物保護区 バンライ	・サカエクルング川クルーズ ・タ・スング寺 ・カレン族の文化と生活の学習 ・環境教育交流ワークショップ ・HKK HQでの野生動物観察 ・竹工芸体験	
2010	第13回環境学習キャンプ (8/14～23)	ファイ・カ・ケン野生動物保護区 バンライ	・HKK HQでの野生動物観察 ・カレン族の文化と生活の学習 ・環境教育交流ワークショップ	
2011	第14回環境学習キャンプ (8/13～21)	ファイ・カ・ケン野生動物保護区 バンライ	・ブアイ蝙蝠洞窟、巨木見学 ・カレン族の文化と生活の学習 ・環境教育交流ワークショップ ・HMDステーション地域の野生動物観察	・ラジャバト・ブ ラナコン大学との大学 院共同研修
2012	第15回環境学習キャンプ (8/18～27)	ファイ・カ・ケン野生動物保護区 バンライ	・カレン族の文化と生活の学習 ・ラオウェン織物見学 ・環境教育交流ワークショップ ・HKK HQでの野生動物観察	
2013	第16回環境学習キャンプ (8/17～26)	ファイ・カ・ケン野生動物保護区 バンライ	・カレン族の文化と生活の学習（食文化交流） ・環境教育交流ワークショップ ・HMDステーション地域の野生動物観察 ・ナイトコンサート	
2014	第17回環境学習キャンプ (8/9～18)	ファイ・カ・ケン野生動物保護区 バンライ	・カレン族の文化と生活の学習（食文化交流） ・環境教育交流ワークショップ（ホームガーデン） ・HKK HQステーション地域の野生動物観察 ・ナイトコンサート	
2015	第18回環境学習キャンプ (8/8～17)	ファイ・カ・ケン野生動物保護区 バンライ	・カレン族の文化と生活の学習（食文化交流） ・環境教育交流ワークショップ（科学工作、日本の農山村） ・HKK HQステーション地域の野生動物観察 ・ナイトコンサート	
2016	第19回環境学習キャンプ (8/13～23)	ファイ・カ・ケン野生動物保護区 バンライ	・カレン族やラオ族の文化と生活の学習（食文化交流） ・環境教育交流ワークショップ（科学工作、きのこ） ・HKK HQステーション地域の野生動物観察 ・ナイトコンサート	
2017	第20回環境学習キャンプ (8/11～19)	ベップリー プラナコン大学の実習 施設 ファイ・カ・ケン野生動物保護区 バンライ	・カレン族やラオ族の文化と生活の学習（食文化交流） ・環境教育交流ワークショップ（科学工作、コンニャク） ・HKK HQステーション地域の野生動物観察 ・ナイトコンサート	
2018	第21回環境学習キャンプ (8/11～19)	ファイ・カ・ケン野生動物保護区 バンライ	・カレン族やラオ族の文化と生活の学習（食文化交流） ・環境教育交流ワークショップ（科学工作、養蜂） ・HKK HQステーション地域の野生動物観察 ・ナイトコンサート	
2019	第22回環境学習キャンプ (8/10～18)	ファイ・カ・ケン野生動物保護区 バンライ	・カレン族の生活の学習 ・環境教育交流ワークショップ（日本の陸稲） ・HKK HQステーション地域の野生動物観察 ・ナイトコンサート	
2023	第23回環境学習キャンプ (8/14～24)	バンコク Tham Than Pod National Park バンライ ベトナム ハノイ	・環境教育交流ワークショップ（発酵の実験、日本のエッセンシャルオイル） ・国立公園 鍾乳洞見学 ・ベトナム 日本語学校訪問、ハロン湾、	
2024	第24回環境学習キャンプ (8/17～25)	ファイ・カ・ケン野生動物保護区 バンライ	・カレン族やラオ族の文化と生活の学習（食文化交流） ・環境教育交流ワークショップ（目の仕組み、日本のハーブ） ・HKK HQステーション地域の野生動物観察 ・ナイトコンサート	
2025	第25回環境学習キャンプ (8/17～25)	ファイ・カ・ケン野生動物保護区 バンライ	・カレン族やラオ族の文化と生活の学習（食文化交流） ・環境教育交流ワークショップ（染色、紙のバッグ作り、きのこ） ・HKK HQステーション地域の野生動物観察 ・ナイトコンサート	

第2章

冒険探検部



自然文化誌研究会創設の頃

木俣美樹男（初代顧問）

ヨボ爺は過去の成功を自慢し、失敗を愚痴りたくはない。世間の流行に抗って、不易を求めて生きてきたが、未来の明るい希望を創りたい。誰かの記憶ではなく、公共に正直な記録を残して置きたい。マスメディアや世俗的な地位や評価を忌避してきた。有名人ではないので、世間の人々にはもう話は聞いてもらえないが、自由を引き換えにした人生ではないので、幸福なヨボ爺である。

中込メさんらが応じてくださり、自然文化誌研究会（学大探検部）が発足した。僕は学大では非公式に、民族植物学研究室を名乗っていて、学部生、研究生、修士院生、博士院生など、40 年間に 150 人ほどを受け持った。自然文化誌研究会 INCH にも重ねて加わっていたのは、その学生のほんの一部にすぎない。講座制大学ではない課程制大学では個人名研究室しかない。他大学は学問名の研究室・講座名である。研究室は個人のものではなく、複数の教員と学生たちとで構成しているのだから、個人名研究室で呼ぶのは嫌いであった。

学問研究は研究室として行っていたもので、INCH として行った調査はその一部である。たとえば、西村さんも同行した内蒙古調査は院生の卓さんの調査を手伝ったものである。学大では学術調査隊は構成困難で、僕は、大方は他大学の学術調査隊に参加してきた。INCH として進めたのは関東山地調査、北海道調査、中央アジア調査くらいだ。その中央アジア調査隊も、ドタキャンした小西さんが学生隊員を大方決めたので、正直に言って、まあともだったのは日比野さんくらいだった。中込メさんが加わってくださったのは助かった。森とむらの会の高木会長は INCH の会長でもあったので、ロシアに詳しい石橋事務局長を同行させてくださり、賞金に加えて調査助成もしてくださった。日本ウズベキスタン交流協会からは多大の便宜を受けた。僕個人はキビの学術研究においてとても大きな成果を得た。

部室は元陸軍研究所の研究室で、敗戦後、学大の敷地になり、農学教室の講義室として数年間は豊田先生と僕はここで講義をしていた。農場管理棟ができ教室を新棟に移したので、そこで、僕の一存でこの部屋を INCH に貸したのだ。

その後、野外教育実践施設（現環境教育研究センター）が省令化してからは、INCH 事務局は民族植物学研究室に置いた。環境教育学会創立作業も岩谷さん、小川さん、小松さんに、膨大な事務作業と一緒にいただいた。INCH の皆さんの援助で、たくさんのプロジェクトが進行できた。

環境教育の公開講座は同僚にお願いして、冒険学校を始めた。冒険学校は僕が子供を知りたかったことで始めた。同時に、探検部学生の野外訓練、チーム運営の練習でもあった。五日市小屋づくりで、小川さんは留年した。ここは中込メさんの教育実践の場、宮本さんの本家がある場所であった。ありがたいことに文科省出向の主幹女性の厚意で、大学公開講座にできたので、助成も多くもらい、野外装備が十分に揃えられた。卒業生も教育実践を蓄積しており、多くの現職教員、探検部学生も参加協力くださり、この公開講座は有能な多くの教員、探検部の若者たちにささえられて、五日市、大滝村と 10 余年ほど続けた。これで、環境学習理論、エコミュージアムの基礎理論ができた。北海道の調査は第 1 次 80 年代、第 2 次 90 年代（森とむらの会委託）に行い、五日市冒険学校は二風谷冒険学校にも展開した。

農場の管理運営を、農業技術の実習から環境学習に変えたのは、野外教育実践施設として省令化され、年間運営費がもらえて、農産物の販売をして農園経営する必要がなくなったからである。これで、中込メさんから学んだビオトープ化を進め、彩色園（旧農場）を市民へ開放する方向に進めたのである。

タイとの関係の始まりは、先方の教育研究所から視察団が UNESCO 関連で訪問され、翌年、僕が UNESCO の講師としてタイに招聘されたことに始まる。さらに、ラダワンさんに出会って、ラジャバト大学大学院で非常勤講師をすることになり、6 年ほどタイに通った。そして、タイ・日本 T J 自然クラブができ、中込メ・

中込ミさんらが継承・発展してくださっているのだ。この間、森林基金などの助成で国際シンポジウムを行い、その評価がUNESCO アジア・太平洋環境教育セミナーにつながった。ちなみに植物と人々の博物館の整備、清水バンガローのログの建設資金は当初は、国土緑化推進機構森林基金からの助成である。

学術研究と教育実践がつながり、成果が蓄積されてきて、生活科、総合的学習、(最近では探求学習)などは、この成果がとり入れられていると思う。当時の中野主任視学官からはそう言われた。



元陸軍の研究所跡を研究室・教室として用い、順次、サークル長屋として貸した。僕はここで農場実習の講義をした。その後、自然文化誌研究会に部室として貸した。

.....



自然文化誌研究会冒険探検部の部員時代（1980年～1986年）

宮本透(1986年3月B類職業科卒業)

・自然文化誌研究会入部

学芸大C類特殊教育科に入学したのは1979年だった。C類は養護学校・聾学校教員免許を修得する学科で、基礎免許として小学校あるいは中学校免許取得が必修だった。クラス仲間の多くは小学校免許を基礎免許にしていたが、高校生の頃に大人になったら心身に障害を持つ人々と農作業したいと夢を持っていた私は、B類職業科農学選修の講義を受講した。

1980年頃柴田君や河口君たちと一緒に中尾佐助「栽培植物と農耕の起源」が教科書だった木俣さんの講義を受けたのが自然文化誌研究会との出会いだった。木俣さんの講義は難解で内容はほとんど記憶にないが、「探検部に入りませんか」と受講生に語っていた事を鮮明に覚えている。当時の私は雄迫寮生だった友人と特殊教育研究部でサークル活動していたが、彼の後輩の成合君や河口君と親しくなり探検部に誘われたのが自然文化誌研究会入部のきっかけである。

1975年創部の自然文化誌研究会は中込メさんたち先輩部員が卒業した後、サークル長屋の部室を使わなかった。自治会が管理していたようだが、木俣さんの尽力で再び鍵を開けてもらう事ができた。広くて快適な部室は思い出が尽きない。職業科の講義は農場管理棟や産業技術棟の教室で行われていたので、授業がない職業科部員のたまり場だった。職業科には佐藤さんという先輩がいて、木俣さんの所に来ると必ず部室に寄ってくれた。一升瓶を抱えた佐藤さんが「これから飲むぞ!」と声を掛け、酒盛りが始まるのが忘れられない部室の思い出である。飲んだくれた部室での至福のほほえみ、気に入っている写真です。

今は無きサークル長屋の部室だが、どぶろくを仕込んでいた事を記しておきたい。職業科の授業で野川の水質調査をした事があった。1980年代の野川は水質汚濁が酷かったが、源流の国分寺「真姿の池」は日本の名水100選になる清らかな湧水だった。食品加工の授業で麴製造法を学んだ私はこの名水でどぶろくを仕込みたくなった。1982年か83年真冬の頃だったか木俣研のインキュベーターを借りて麴を作り、真姿の池で汲んだ名水で仕込んだどぶろくは甘酒のような口当たりが好評で、卒業まで続けた活動であった。美術科の赤沢先生が「いい香りがしますね!」と部室を訪ねてこられた時はびっくりした。赤沢先生が定年退官される時「あのどぶろくをまた飲みたい」と言われていると伝え聞き、久し振りに仕込んだ事は附属養護学校教官だった頃の懐かしい思い出になっている。



・自然文化誌研究会と冒険探検部の合併

1983 年特殊教育科を卒業できず留年、横須賀市の福祉施設に就職して学芸大は中退しようと考えていた。今もそうだが社会福祉現場の労働環境は劣悪で半年で挫折、鎌倉市の老舗豆腐店に転職し豆腐職人を目指し修業していた。秋になった頃、柴田君・河口君・成合君から電話があり木俣さんからは手紙をいただいた。皆さんモラトリアム人間の私を心配して、職業科 3 年編入試験を受ける事を勧めてくれた。

1984 年 4 月 B 類転科復学、探検部活動では農場の一角に畑を借りて雑穀を栽培し、柴田君たちが取り組んだ北海道調査と中込メさんたちが取り組んだ関東山地調査を継続した。北海道へは木俣さんと二人旅だったが、その時の教えは私の人生に大きく影響を与えている。農場の雑穀栽培は「種から胃袋まで」農耕文化基本複合を実体験を通して学ぶ機会となった。84 年は成合君との別れがあった。葬儀後の小金井祭、木俣さんから紹介された明峯哲夫さんの講演会を開催したが「探検部がんばれ！」と部室に書き残して旅立った彼の思いをみんなで受け止めた企画だった。

1985 年は学生生活最後の年だったが、小林君・瀬谷君・原君たち自然文化誌研究会部員と冒険探検部との合併に取り組んだ。冒険探検部は塚原君・中込ミ君・石川君・佐伯君たちが部員だった。二つのサークルが何回も合同部会を開いて一緒に活動できるようになった事、INCH50 周年で最も重要な瞬間に立ち会えたのは幸せである。この年の小金井祭、農場に造った炭窯で焼いた木炭を使って焼き鳥屋を出店した。小金井祭名物だった冒険探検部シシカバブーの始まりだったが、途絶えてしまった事は残念である。

1986 年学芸大を卒業して社会人になったが、先輩・後輩たちと五日市で山小屋作りをした事も楽しい思い出である。一生涯付き合える友人たちと出会えた自然文化誌研究会冒険探検部、人生の宝となっている。



1985 年小金井祭



五日市山小屋



自然文化誌研究会 50 周年に寄せて

中込貴芳（1981 年入学）

自然文化誌研究会と関わり始めて 50 年近くになる。最初の関わりは、大学では主に新聞会として活動していたが、同じ新聞会で冒険探険部をやっていた塚原という友人に誘われてまだ自由旅行が解禁になったばかりの中国に 1984 年に行ったことが始まりだったと思う。この時の中国旅行では、まだ、ホテルの部屋が外国人と中国人と一緒にしないように決められており、上海ではどこのホテルに行っても部屋はないと言われて、泊まる場所に苦労したことを覚えている。

この頃は、時間が許せば海外に積極的に行っていた時代で、中国以外にもインドネシアプロジェクトに参加したり、韓国、台湾、中国のカシュガルやウルムチ、敦煌などを訪れたり、1993 年には、中央アジア学術調査隊に参加している。中国の最西端にあるカシュガルまで行った時は、ホテルまでどう行ったらいいかわからず、国籍の違う数人の外国人旅行者の引くりヤカーと一緒に荷物を乗せてもらい炎天下の中を延々とホテルまで歩いたことや、全身に斑点ができ具合が悪くなった若い日本人旅行者をウルムチの病院まで連れて行き助けたこと、酒泉から北京までの列車で座席が取れずになんとか集団就職で上京するグループの中に混ぜてもらい、座席の下の空間に潜り込んで何泊か寝泊まりをして、ゲームをしながらへとへとになって北京まで辿り着いたということもあった。また、この時期は、白根三山縦走の時にテントが強風で潰れたことや、冬季テント泊で北八ヶ岳登山に参加したことなどが思い出深い。

最初の中国旅行の一年後、自然文化誌研究会と冒険探険部が合同するという話になり、1988 年に五日市で初めて公開講座「子どものための冒険学校」が行われた。そのスタッフとして参加して以来、ずっと冒険学校には五日市、中津川、小菅と関わり続けてきた。冒険学校では、特に中津川で行われたキャンプが思い出深い。自分は主に村コース、川コース、山コースのうちの山コースを担当し、三国峠から十文字峠を経て甲武信岳までを子供達と一緒に歩き、甲武信小屋で缶蹴りをしたり、避難小屋まで遠征して一泊したりしたことをよく覚えている。また、村コースでは、校長を務めた時に、鶏をキャンプ中に最後に締めて食べるつもりで放し飼いで飼っていたが、最後の集会で子供たちの猛烈な反対にあい、激論の末に締めて食べることができなかったこともあった（子供が帰った後に締めて食べたのだが）。

また、1995 年にはタイのラシャバト・プラナコン大学と東京学芸大学の環境学習の合同キャンプが始まり、その後を引き継いだ形で Thailand Japan Nature Club をタイの先生方と設立し、その後、バンコクの北西にあるバンライという地方都市で環境保護活動を実践しているシリポン氏が主宰しているパンダキャンプの協力のもとにタイ環境学習キャンプをほぼ毎年 25 回に渡って実施してきた（タイ環境学習キャンプについては別項を参照）。

どうして、これだけ長く関わり活動を続けることになったのかを考えてみると、やはり、本会のコンセプトに賛同できたことが一番大きいことのように思う。

例えばキャンプに関していえば、とにかく子供の主体性に依拠して、極力自由度のあるキャンプであること。現代の学校教育は完全にシステム化スケジュール化していてあまりにも自由度が少ない。それは、社会に出ても同じというか、まさにその社会に適合するためにそうになっている。しかも、周りの環境はほとんど全て人工化されて、バーチャルな領域が拡大するばかりである。本会キャンプは、そうした現代教育のあり方に対する疑問や疑義が根底にあると思う。それは、本来、遊ぶということはどういうことか？学ぶということはどういうことか？生活するとはどういうことか？自然とは何か？文化と何か？などを問い直そうとする試みであると言える。その意味で本会のキャンプは、単に

自然の中で楽しく過ごすだけのレジャーとしてのキャンプではなく、自然と関わりながら生きていった人たちの伝統智も視野に入れて開催していることでも言える。

次に挙げられるのは、活動の冒険性・国際性だと思う。タイの環境学習キャンプは、まさにその位置付けで行われてきたと思う。環境問題は、すでにもう一国だけの問題ではないことは周知の事実である。未知の文化・違う文化、未知の自然環境・違う自然環境で行われている活動に学ぶことは自らの活動を相対化し、かつまた、共通項を見出すことによってより良いものを生み出す契機になる。

しかし、一方よく言われることだが、会がここまで長く続けられていったのは、そこに関わる人たちの多様性と寛容さにあると思う。得てして一つの理念や理想を求めて活動する多くの団体は、その純粋さ故に活動の中で分裂したり分解してしまう危機に直面することがある。本会の場合、大まかな活動内容や理念には共感しながらも、様々な考えを持って様々なレベル活動に参加し、一度本会を遠ざかってもまた参加してくる人も沢山いる。「去る者は追わず、来る者は拒まず」というコンセプトはこれまでずっと持ち続けてきた会の姿勢だと思う。馴れ合いに陥らず、不十分は承知ながら少しずつ進んでいくことが大事なのではないかと思う。

最後に、残念なことだが、本会に関わっている学生や若い人たちに海外への関心が少し足りないようにも思う。金銭的な面で苦しいのかもしれないが、若い時には、積極的に海外に出て異文化に触れてみることはとても大切なことだと思う。観光旅行としてだけでなく、少しテーマ性を持った、或いは冒険性を持った海外体験を期待したい。



1980 年代後半の話と私のこと

瀬谷勝頼（1984 年入学）

80 年代後半に出会った人たち

なぜか小西さんが夢に出てきた。それも私の職場らしいところに訪ねてきた夢。何を書いたらいいか、この 1 カ月悩んでいたからかもしれない。

私の記憶にある小西さんなので、昔とほとんど変わらないまま。想像でシワを少し足したくらいのか。「小西さん、ホント変わりませんねえ」みたいなたわいのないことを言うだけで終わった。本当は、昔の部室でパンの耳を食べている小西さんみたいな夢だとよかったのだが。

私が大学に入ったのは 1984 年。冒険探検部・自然文化誌研究会に入ったのは 85 年だったと思う。同じクラスの原修司と一緒にだった。当時、他に部室でよく会ったのは、小林正雄さん、石川秀樹さん、宮本透さん。それに技術科の新井重正。1 年後、美術科の座光寺由美さんが加わった。その座光寺と友達という縁だったか（？）やがて岩谷美苗ちゃんも。小川泰彦はもっと前だったか？ 記憶があやふやで間違っていたらごめん。佐伯順弘は中国旅行が縁で冒探に加わった。関口寿也も中国旅行以来よく冒探の行事に参加してたけど、たぶん部員にはなっていなかった。

大学 4 年（1987 年）になると部長は新井になり、1 学年上の小林さんや石川さんは卒業。代わりに、美苗ちゃんの妹のかなえちゃん、亡くなった小松真木子、ピーこと坂田美奈子など家庭科の面々が加わった。家庭科では、美苗ちゃんと同学年の渡辺照美ちゃんも。さらに学教科で泰彦と同級生だった葛生や斉藤、久保、菅又なども入っていたいへんにぎやかになった。国語科の磯部佳奈子さんや入中由紀子さん、柏木貞光もこの頃か？

あと、忘れてはいけないのは桧山さん。いまどうしているんだろう？ 院生になってからは、さらにまた多くの若い人たちと部室で会うことになりましたが、それは他の人がふれるでしょうから割愛。

私の探検部時代はちょうど 80 年代後半。みんなと丹沢や南アルプスに登ったり、奥多摩の廃村探訪、大菩薩峠、学大の地下道探検、学祭の焼き鳥やシシカバ、五日市での冒険学校草創期……、どれもホント楽しかった。

私は何をしていたのか

では、自分はなぜ、冒探・自然文化誌研究会に入ったのか？ 田舎の高校を卒業して東京で大学生になった私は、何者かになりたいみたいな欲求があって、それがかないそうな気がしたんだと思う。何者かになれたわけではなかったが、アジアの国々に出かけて日本との関わりを考えたことは、世の中を見る目を磨くのに役立った。

学部生だったときは、2 年の終わりの春休みから、毎春 3 月に中国に 1 カ月くらいずつ 3 回出かけた。1 回目は当時のシルクロードブームにあやかって敦煌へ。2 回目はさらに西のウルムチへ。3 回目は、日本がかつて侵略した跡を見たくて、瀋陽、大連、哈爾濱へ。中国旅行が縁で『中国の旅』を読み、その後、本多勝一の文庫本を読みあさった。「探検」の対象は海外に限らないことに思い至り、ジャーナリズムに関心をもつきっかけになった。

院生になってからは、インドネシアにやはり 1 カ月くらいずつ 2 回。それが縁で、『小さな民からの発想』や『エビと日本人』など、村井吉敬さんの本を新刊が出るたびに読んだ。その頃はもう新聞記者になるつもりでいたものの、「夜討ち朝駆け」みたいな暮らしには耐える自信がない……。東南アジアの海辺を歩きながらできる仕事はないものか、と現地を歩きながら考えた。中国・本多勝一もインドネシア・村井吉敬も、つないでくれたのは塚原東吾さんでした。

インドネシア・スラウェシ島を一人で旅行したときの写真を探そうとしたのだが、なぜか見つからない。代わりに旅行記のつもりで書いた日記が出てきた。これがけっこうおもしろくて恥ずかしい。海沿いの町をバスやベモ（乗合軽自動車）を乗り継いで旅したのだが、町々の魚市場に行っては、魚の名前を聞いてイラストと一緒にメモしている。そんなこと、すっかり忘れていた。大学院卒業まで半年の時期。これから自分は何をしたいのか、もがいていたんだと思います（笑）。

学生時代、胸を張って冒険探検をしたと言えるほどのことはできなかった。でも、パイオニアワークを志したり、「殺される側」「開発される側」、卵と壁なら卵の側に立つみたいなマインドは、その後、いまの仕事をするようになってからも忘れてはいないつもりです。

30年余り農業・農村をベースにした雑誌をつくる仕事を続けてきて、おもしろくはあったが、思うようになっていないことも多い。海外にはすっかり縁遠くなった。でも、パイオニア精神は忘れずにいたい。



1985～1990 年頃の冒険探検部

佐伯順弘（1984 年入学）

冒険探検部との出会いと中国遠征

冒険探検部（以後、冒探）の 1985～1990 年頃を振り返り、その時やったこと考えていたことなどを思い出してみる。冒探との出会いは、大学 2 年になってからなのでちょうど 1985 年だ。冒険と探検の違いも知らずに向かったのは、サークル新棟が作られる前の建物。長屋のようでもあり、理科実験棟のようでもある薄暗い木造平屋のサークル棟だった。そんな怪しげな場所にある冒探部室の扉を叩いたのは、掲示板に貼られたポスターの「君も中国を自由に旅してみないか。」という言葉がきっかけだった。1984 年 8 月、大学 1 年の夏に中国を旅していた。当時漫画雑誌に連載されていた横山光輝の「三国志」に関連した特別企画のツアーに参加したのだ。その旅の中で、人種が違うとはいえ、同じ人類がこれほどまでに違う文化の中で生きていることが不思議でならなかった。そして、そのことを想像もしなかった自分の世界の狭さを思い知らされた。冒探部室の扉を開けたのは、幼少のころから憧れていた「一人で知らない街を気の向くまま旅したい」という気持ちが、少しだけ現実味を帯びた瞬間だった。とりあえず話を聞くだけのつもりだったが、いつの間にか入部していた。思っているだけではなく、本当に冒険の旅に出かけるチャンスをつかんでいた。冒探の中国遠征に参加したのは、第 3 次遠征（1986.3.4-3.28）だと思われる。その時の個人テーマは「三教街を探して」。第 4 次遠征（1987.3.3-4.7）は「タクラマカン砂漠の端でコーヒーを飲む」。第 5 次遠征（1988.2.16-3.11）と言っているのかわからないが単独行。テーマは「男は北へ一人旅」中国からモンゴル経由でソ連へ向かう旅へと続いていった。第 3 次、第 4 次遠征は冒探部員以外も含めて、15 人前後の参加者があり、神戸から上海まで鑑真号という船でいか、成田から香港経由で広州から入るかというルートだった。現地で 2～3 日ともに行動することで、少しばかりの旅の技術を習得し、その後それぞれの旅へ散開した。一人もしくは二、三人が少しずつそれぞれの旅に行くのは正に自分たちの道へ旅立っていくようで、高揚感にあふれていた。旅から帰った後、その遠征記録として「冒探王」を発行した。

3 度の遠征を振り返ると、まさに冒険探検の連続だったと思う。旅の中で少しずつ言葉を覚え、現地の人々と交流し、空腹や時間だから食べるのではなく、変わったものがあったら食べるという毎日。筆談とわずかな中国語会話（ソ連まで行ったときは、同じコンパートメントになったロシア語科の日本人からロシア語を習った。）により、情報を集め、街を歩き回る。まさに、リアルドラクエである。やっとの思いで、その街を脱出する列車のチケットを手にした時などは頭の中で「テレテッテター。」とドラクエの音楽が鳴ったものだ。そのような旅は、その地を自分の足で踏み、目で確認し、耳で聞き、肌で感じる体感という貴重な体験を与えてくれた。そして、自分はその旅をやり遂げたという自信、数々の死線を越えたことによる生への強い意志を鍛えてくれたと思っている。これは地理的な冒険探検だけではなく、内なる宇宙への冒険探検であったのだと気づかされた。さらには、その旅の中で、シシカバブという料理に魅了され、屋台に通い詰めて焼きの修業もした。そしてそれは冒険探検部のシシカバにつながっていく。ただ、そのシシカバも冒険探検部の消滅とともに消えてしまったのは、学芸大の学祭にとっても大きな損失であったと思う。（有志によって一度だけ復活したようだが、続いているという話は聞いていない。）

冒探の日常

部室は小中学校の教室より狭い実験室を改造したような部屋だった。天井は高いし、棚には様々な装備がお世辞にもきれいとは言えない状態で突っ込まれていた。靴を脱いで上がると、実験機の向こうに炬燵があった。初めて部室を訪ねた時、誰が対応してくれたのかも全く覚えていないが、その日から、授業のないときは、写真の部室か、冒探の部室にいるようになった。多くの先輩方から話を聞くことも楽しかったが、同輩、後輩からの話も勉強になった。学びを得るのに、年上年下は関係ないというのは高校時代から大切にしているが、大学生になってもそれは変わらなかった。当時の冒探では、誰もが何かしらの野望をもっていた気がする。中高時代を通して、みんなでやろうとか、誰かの企画に乗っかろうという人間を多くみてきたが、ここでは、自分がやりたいことを自分がやるという気概が大切にされていたと思う。「群れたいのではない、一匹狼が時折訪れる水飲み場のような存在。」というべき場所だった。もちろんやりたいことの方が一致していれば、共に行動するし分担もする。しかし、基本的に自分の足で立っている。だから、自分に対して正直だし、嫌なものは嫌といえる。でも、拒絶するものではない。「来るもの拒まず、去る者追わず。」という構えは入部してすぐに教えられた。なんと気分の良いことか。受け入れはするが、なれ合わない雰囲気が入った。集団で活動することも多かったが、「単独者」であることを常に大切にするようになったのはこの冒険探検部の影響が大きかったのかもしれない。卒業してから、冬山単独行、海外単独行を冒探の気持ちで行っていた。パーティ参加での登頂だがパキスタンのラシュファリ・ピーク（5,098m）にも行くことができた。これも冒探の気持ちがなければ実現しなかったと思う。

冒探での活動

前述した中国遠征の他にも大小さまざまな活動をした。自分で企画したのか、誰かの企画に賛同したのかはもはや自分の記憶にも記録にもない。今でこそ旅日記はかなり詳細に書いているが、それは書くだけの心理的・物理的余裕がある場合に限られる。行動するのが精一杯で状況を考察して記録する余裕などなかったのだと思う。様々な冒険の事実が忘却の彼方に遠ざかっている今、記録の大切さを痛感している。

（廃村峰）寒い時期だったと思うが、奥多摩山中にある廃村「峰」を探検。10人程度で向かったような気がする。少し開けた場所で焚火を中心にいくつかのテントを円形に設置した。その探検では、某先輩のカレー事件及びテント内キラキラ事件を始めとするなかなかの事件が起きているのだが、ここでは割愛する。翌朝、辺り一面雪景色で、一歩間違えたら遭難するところだったのは公然の秘密である。

（蘊蓄ノート）活動というほどのものではないが、冒探の部室においてあったノート。本来蘊蓄は「十分研究してたくわえた深い知識。」の事を言うが、なんでもいいから、面白いネタがあったら誰でもいいから書き込むようにしていた。どこまで続いたのか、どこへ行ったのか全く不明である。ちなみに、初期のネタはどうして「たぬきそば」はタヌキの肉が入っているわけでもないのに「たぬきそば」というかについて解説するという、あまりにもくだらないネタだったと記憶している。

（北岳登山）元ワングルの岩谷美苗氏がリーダーだったと記憶している。冒探らしい活動。どの順番で登ったのか全く覚えていないが、北岳、間ノ岳、農鳥岳に登った。10名前後での山行だったと思う。

（五一ワイン、ズブロッカ）部室では酒を飲み、様々な話をしたが、いつも「もっと勉強しなければならない。」と痛感させられていた。多くの人との話が私を育ててくれたと思う。その時よく飲んでいたので、「五一ワイン」という一升瓶に入ったワインと冷凍庫で冷やした「ズブロッカ」と

いうウオッカだった。瀬谷勝頼氏らとよく飲んでいた。冒探公式飲料だと勝手に思っていた。ズブロッカの蘊蓄もあるが、それは有名なのでここでは書かない。

冒険学校との関わり

記憶というのは本当にあいまいですぐに書き換えられてしまうものなのかもしれない。どうやら学生の時には、冒険学校に参加はしていなかったようだ。大学卒業後、1988年4月から小学校教諭として働き始めたが、冒探は明確に「辞める。」と言わなければ、いつまでも続けていい集団だったので、そのころから冒険学校に参加していたようだ。まだ、冒険探検への思いは消えていなかったため、将来的な集団での行動技術を学ぶために何回か参加した。五日市に建築された山小屋の中でNPO法人にするかどうかの話し合いをしたことを覚えている。その時の話し合いは、私の冒探及び冒険学校との関わりに暗い影を落とすことになった。その後、中学校に異動したのを機にバスケットボール指導者として、すべての休日は部活漬けになっていったため、冒険探検部、冒険学校とのつながりは一旦切れることになり、20年余り冒探とも冒険学校とも関わらない時期を過ごすことになった。

1985年頃の冒探

それぞれが面白そうなことを探して、とりあえずやってみようという雰囲気にあふれていたような気がする。農場から廃棄野菜を拾ってきて煮ていた先輩もいた。酵母による穀物の糖化作用の実験をしたこともあった。(消毒関係が甘すぎたため、恐ろしい腐海が形成されただけだった。)農場の芝生の場所でテントを5~6張一人で洗ったこともあった。自発的に、自分の興味に素直に活動していた。意見交換も活発ではあったが、自分の読書量の少なさや浅はかな考えなどを思い知らされることもあり、そういった意味ではよい修行の場であったと思う。その当時、発案した20以上の企画はほとんど実現しなかったが、その中に込められた心躍る気持ちは今も大切なものとして持ち続けている。





FILED OR 87



ボタンとの出会いと今

日比野真士（1989 年入学）

大学進学で上京

岐阜の片田舎で高校生をしていた私が進学先として選んだのは、国際的な教育課題について学べる学部で、かつ海外に行くのに便利なところでした。井の中の蛙ではなく、とにかく世界を見たいという若者のシンプルな希望でした。当時は、関西国際空港（1994 年開港）も中部国際空港（2005 年開港）もなく、必然的に成田国際空港（1978 年開港）のある首都圏に絞られました。入試に合格し、前年から 0 免課程として新設されていた K 類国際教育課程の 2 期生として 89 年に入学しました。

初の海外旅行インドで赤痢に

同課程では年に 1 回海外研修で学ぶということが入学パンフレットに謳われていました。これを書いたのは、同課程を創設された故海老原治善名誉教授です（教育政策史）。89 年秋、先生方や上級生、同級生総勢約 15 名でインドを回りました。カルカッタ in ボンベイ out でバスと国内線を乗り継いだ約 2 週間の研修旅行です。ベナレスではマザーテレサの家、ボンベイでは日本人学校に行きました。

89 年は激動の年でした。年明け 1 月 7 日に昭和天皇崩御、6 月に天安門事件、7 月に宮崎勤逮捕、11 月にベルリンの壁崩壊と続きました。研修旅行は当初中国で計画されていましたが、天安門事件の影響でインドへ変更されました。

18 歳の多感な青年は最終地ボンベイで 40 度の高熱にうなされました。バスの中でアラビア海を眺めながら両親に遺書めいたものを書いたことを覚えています。40 度は人生初でした。40 度を超えたら死ぬと勝手に思い込んでいました。おセンチな感傷です。帰路のインド航空の中で悶え苦しみ座席とトイレを数えきれないほど往復し成田空港で検査を受けました。3 日後に保健所から電話があり「赤痢」を宣告され、約 3 週間の入院生活が始まりました。

差別の視線とデビュー作

大学 1 年の時には八王子にあった岐阜県の学生のための県人寮に住んでいました。赤痢発覚後、寮には八王子保健所から消毒班が来て大騒ぎになったそうです。退院後「赤」という蔑称を付けられ、しばらく「風呂は最後に入れ」と言われました。先輩もおもしろおかしくいじってくれましたし、鈍感な私は悲しくはありませんでした。むしろネタにしていました。コロナで社会が一変した時、この時の免疫が役に立ちました。

帰国後に研修の文集を作ることになり「赤痢になって」という原稿を書きました。これが仲間内に好評でした。今となっては、これが私のデビュー作です。そして、ボタンへの入り口でした。

ボタンとの出会い

前置きが長くなりましたが、ボタン（冒険探検部）に入部したのは翌年の大学 2 年になってからです。陸軍技術研究所の実験室を活用した古い部室は、正規の廊下側からの扉と、外に面したガラス窓から入り込むことが可能でした。窓側が畳敷きか板敷の上がりはないなっていて、最初に部室を覗くと、確かその上がりはない先輩女性部員 3 名がだべっていました。家庭科の話をした記憶があるので、美苗ちゃん（岩谷さん）と小松ちゃんはいたと思います。インドの赤痢の話をする、面白がってくれ、それ以上に先輩部員たちの、突拍子もない武勇伝を聞くことができました。

同期は、その後カヌーに没頭した鍛冶、学生なのに何故か中古のフィアットパンダに乗っていた田中、ボータンより国際青年の船など国際交流イベントに行ってしまった井原がいました。上の世代に、オフロードバイクで通学していた静かな微笑みの柏木さん、尺八のうまい熊本さん、スザンヌ・ヴェガのギター弾き語りが絶品の阿部さん、それにヤスさん（小川）、美苗ちゃん・かなえちゃん（岩谷姉妹）、小松ちゃん、留ちゃん（福留さん）、それに何故かすでに卒業しているはずの小西さんや桧山さんの姿を時々見かけた記憶があります。とにかく、それぞれにおかしな体験の幅がありすぎて、自分が小さく思えました。その後、木俣先生をはじめ、学園祭などを通じてもっと上の世代とも出会うことになりますが、あっという間に、この異空間・魔空間に憑りつかれていきました。

「地下防空壕探検」と「アジアを考えるⅡ」

しかし、ぼくらの世代は先輩世代とつるんで組織的にどこかにまとまって行くことはありませんでした。その後、下の世代が何故かどっと入ってきて（間瀬、雫以下多数・・・省略）、賑やかになりました。部室も旧部室が取り壊され、新サークル棟ができ、ロッカーで仕切られた細長い部室が割り当てられました。野外活動だけでなく、カルチャー色が強かった時代かもしれません。でもそれがおもしろかった。人生における思考の幅を広げてくれたと思っています。

その中でも記憶に残っているのが、学芸大とICU（国際基督教大学）の地下防空壕への潜入です。学芸大は陸軍技術研究所、ICU は戦前中は島飛行機で両方が地下で繋がっているという都市伝説がありそれを確かめるのが目的でした。詳細は省きますが、結論は「繋がっていない」。高揚感のある探検でした。

「アジアを考えるⅡ」は、91年に3か月くらいに渡り5回連続で学大の芸術館を借りて行いました。「開発教育」「環境問題」「差別の問題」の専門の講師を招いた座談会、小平市の朝鮮大学校の学生を招いた交流会等です。今や死語的ですが、当時は「南北問題」が学生の議論すべきホットなテーマのひとつでした。先に近代化を成し遂げた北側先進国が、南側の発展途上国の貧困等の諸課題を解決すべく支援するという図式です。また「Think Globally, Act Locally」「多様性」という言葉もこの時代の記憶に残っています。まずは足元のアジアから問い直そうと。

まさかその後、IT が飛躍的に進化し日本が立ち遅れ、政治も停滞し、結果的に失われた30年が訪れ、逆にインドや中国の後塵を拝する時代がくるとは夢にも思っていませんでした。ともあれ「自分たちに何ができるか。何をすべきか」という視点や、それを仲間と議論して実行に移すという体験ができたことは貴重でした。

「アジアを考える」は89年の11月～12月にかけて、先輩の瀬谷さん達を中心となって連続座談会が開催されています。私は入学していましたが、90年入部なのでこれには参加していません。しかし、テーマは共通していて連続性があったと思います。80年後半から90年代前半の時代を反映していたといえるでしょう。野外だけでなく、このような社会的、国際的な問題をテーマにした座談会やシンポジウムの開催は、ボータンのひとつの表現形式だったと思います。

中央アジア学術調査探検

J T のクロスカルチャー大賞を受賞して1000万円の賞金を獲得し、93年6月～8月にかけて2か月間中央アジアに行きました。詳細は当時の報告書に譲ります。学芸大生涯教育課程の大学院に進学したばかりで、教官（長浜功名誉教授＝日本教育史）はあきれながらも許してくれました。自分の中では留年を覚悟し、その後実際に留年し、学術調査隊が原因ではないですが結果的に中退しました（母が泣きました）。

90年秋に、崩壊前（91年崩壊）のソ連に2週間行きました。これはボータンの活動としてではな

く、国際教育課程の同級生と後輩を引き連れてです。空路で新潟からハバロフスク、シベリア鉄道でイルクーツクまで車中 2 泊。空路で中央アジア、タシケント、サマルカンド、モスクワ、レニングラードです。ソ連は 90 年当時、自由に旅行ができませんでした。ホテルも自国人向けのホテルと外国人向けのホテルが分かれており、事前のビザ申請時にすべての宿泊先を予約していかなくは許可が下りませんでした。行動範囲も市の中心部から 30 キロまで。

93 年にはすでに、中央アジアはウズベキスタン、カザフスタンなどが国家として独立しており、3 年間で大きく様変わりしていました。学術調査探検隊はバスをチャーターし数百キロを移動しながら、雑穀の採取を行います。ソ連時代には決して許可されなかったことです。イスラム教や民族教育も以前より自由になっていましたし、女性のファッションも、西欧の雑誌が増えたことが影響していると思われ、民族衣装から黒をベースにしたモノトーンを基調に金銀のアクセサリーを身にまとったものへの変化が印象的でした。国家の変容の過程を目の当たりにしたことは貴重な経験でした。ソ連旅行の手配は全て自分で行いました。これがきっかけでその後約 5 年間ソ連関係の旅行会社でアルバイトをしていました。

社会人としての冒険探検、老齢介護の冒険探検

大学院を中退し、96 年に新聞社に入社しました。記者職ではなく、約 30 年間の会社人生を人事部やメディア部門で働いてきました。ポータン 20 年記念誌「らぞう」（95 年発行）に自分で「社会人になると物理的制約は多くなりますが、全生活がフィールドの私にはさして関係のないことです」と書いています。なかなかいいことを言っています。そのままの社会人生活を送ってきたと思っています。

人事部門では年末調整や社会保険や、育児、介護、ハラスメント、メンタルヘルス、ジェンダー、女性活躍、障害者雇用といった諸課題に対処してきました。振り返ると大変なことのほうが多かったですが、学生時代に培った冒険探検的マインドでこれらの諸課題に対処してきましたし、極地到達や環境教育などの実践と、日本の構造的な人事的諸問題の克服は、内容は違えど私の中では繋がっています。

3 年前に肺がんの父を実家での在宅介護で看取り、介護における探検（さすがにこちらは冒険はしてないか）も経験しました。試行錯誤しながら様々なノウハウを身に着けました。ちょっとしたひと工夫で楽になるコツがソフトとハードの両方あると思っています。これはスキルとして社会や仲間に戻元したいと思っています。

私自身も 55 歳を迎え、体力の衰えや体調の変化を感じています。身体に新たなフィールドが立ち現れてきました。ポータン的マインドでの対処実践中です。

さて人類とはヒトとは 若者たちよ息子たちよ

地球ができて 45 億年、人類が 700 万年前に出現し、分化し、言葉をしゃべり始め、社会を構成し、戦争を始め、平和を築き、また戦争を始める。パソコンができ、スマホができ、生成 AI ができ。日本人の人口は減り、温暖化は進み・・・さて、今後どうする。関心は尽きないですね。フィールドは無限です。ポータンに入っていなかったら、もっと了見の狭い人間になっていたでしょう。偶然とはいえ、出会いと与えられた環境がつくづく幸運だったと感謝しています。

愚息が今年から大学に入学し一人暮らしを始めました。現代の若者たちは、世界をどうみるのでしょうか。



腐った組織と言われる

相馬崇志（1992 年入学）

【腐った組織と言われる】

当時の冒険探検部員の皆々がどう感じたかはさておき、今考えると確かに腐っていたのかもしれないなあと思う。

私が読む冒険探検系作家。高野秀行 1966 年生、服部文祥 1969 年生、角幡雄介 1976 年生、石川直樹 1977 年生（野口健は 1973 年生だが、1 冊も読んだことがない）。私は 1974 年生。

経済的な側面。私が在籍した当時は 1 ドル 125 円から 100 円に向かって推移、1995 年には 80 円台だった。当然ガソリンも安かった。当時の東京の最低賃金とも比較。1995 年の最低賃金は 650 円。1 ドル 85 円として、7.65 ドル/時間。2024 年は 1163 円。1 ドル 152 円として 7.65 ドル/時間。あれ、変わっていないね（汗）。でも、1 ドルで買えるものについては、1995 年の方がたくさん買えたはず。

国際情勢。ソ連崩壊を受けパワーバランスが変わりユーゴ内戦や湾岸戦争など起きる。EU 発足。中東ではオスロ合意により、イスラエルと PLO が和平。2001 年の同時多発テロ事件まで、世界は比較的落ち着いていたのでは。日本は阪神淡路大震災と地下鉄サリン事件が 1995 年の出来事。

ゴアテックスやフリースは比較的安価になり、装備面は充実。ネット環境は整備されつつあったが、今のように瞬時に情報が入手できるわけではなく、世界はまだ未知のものにあふれていた。

大学生活。秋休み、長かったなあ。

結論。冒険探検には恵まれた時代だった。あの頃の自分に言っておきたい。出かけるよ！

【エネルギーが豊富じゃねえか】

伝説の先輩小西司さんから頂いたお言葉。新歓と称してマル（丸岡英生）と一緒にオオガマタ小屋に連れて行ってもらった。マッセ（間瀬貴久さん。当時唯一の 2 年生だった）に連れられて中津川集落から延々と歩く。たどり着いたオオガマタ小屋には一台のだるまストーブ。と言われるがまま枝集めをする。小西さんは暗くなってから到着したと思う。ストーブ脇の薪を見て、小西さんが一言。「エネルギーが豊富じゃねえか」うれしかったなあ。それ以来、豊富なエネルギーを確保すること、大切にしています。

【麻雀する】

麻雀の良いところは、やれば友達になれるところだ。ゲームとしては知っていたが、実際に牌を握って遊んでみると、相対しながらやる方が断然面白いことに気づく。しずくおじさん（雫永法さん）ありがとう。

そういえば部室にはギターがあって、ギターの練習もしたのだった。

うんちくノート

アタゴオル物語

日野日出志

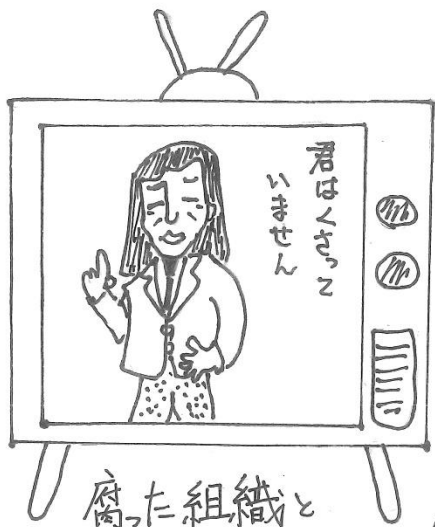
部室の思い出です。

【シシカバの一子相伝を信じる】

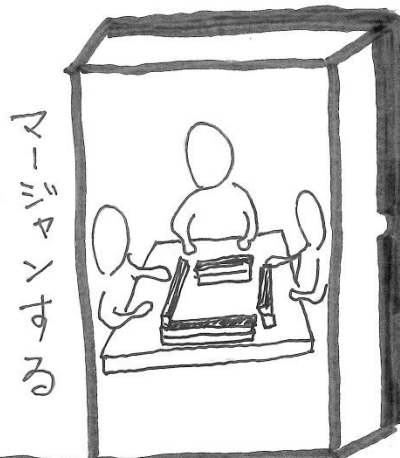
学祭といえばシシカバ。味付けの秘密は各代 1 人のみに伝えられる、そんな伝説があった。武田千秋さんに教えられた（たしか。マッセではなかったと思うが）私はその 1 人のはずだが、私がいなくてもシシカバは焼かれていたので、どこかで秘密が漏れていたのに違いない。歴代の焼き手がつくるシシカバを食べ比べてみたい。学祭といえば体重はかり屋をやったことがあった。女の子を抱き上げ、「42 kg！」とか言ううとすごく喜ばれた。というかモテた。ちゃんぽん（森光則君）がギター弾いていたのも良かったんだな。

<p>【滝沢ダムに反対する】</p> <p>中津川は大事な場所でした。何回通っただろう。バスに揺られながら「滝沢ダム大反対」の看板を見て、よし、我々も滝沢ダム大反対同盟小金井支部をつくろう！と盛り上がったのでした。活動は、上流からの放尿。今は娘たちが住む甲府への往復に、ループ橋から雁坂トンネルをくぐっていく罰当たりな私です。浜平集落とか、あったなあ。</p>	<p>【チーズとワインを楽しむ】</p> <p>同学年は入部人数が多かった。先輩の人数が少なかったので、我が物顔でやりたい放題。マッセに「お前らしい加減にしろよ」とあきれられた。翌春の新入生勧誘。筆書きの半紙を配ったり、捨て看を拝借して構内に勝手に立てたり。でもそんな努力が実り、その年からは大勢の後輩たちが入部してくれるようになった。中には洗練された後輩もいて、ズブロッカしか知らない私たちにチーズとワインの夕べを教えてくれた。栓を抜いてコルクの匂いを嗅いで「グーッ」と言う、そんなことでも楽しかった。</p>	<p>【上半身ハダカになりがち】</p> <p>1994年発刊の『冒探犬』誌内で、「1992年秋の黒金山頂にて皆で裸になり、以降クセになる」とマルが書いている。記憶はないがきつとそうなのだろう。下半身も見せるために、競泳用水着をアンダーにして登山したこともあった。佐伯さん（佐伯順弘さん）に北八ヶ岳冬山登山に連れて行ってもらったときも脱いでいた。その節はありがとうございました、佐伯さん。後輩たちの活動写真を見る限りでは、彼らも順調に脱いでいたようで、何よりです。</p>
<p>思い出の写真コーナー</p>		
		
<p>33年前、冒険学校川コースのメニュー指示書。こまっちゃん（小松真木子さん）の字か美苗さん（岩谷美苗さん）の字か？自宅生の自分にはハードルの高いメニューでした。でも、アバウトでいいよね。</p>	<p>農場の村野さん。もう一人の宮野さんにもお世話になりました。村野さんのしゃべりかた、辛口発言が大好きでした。体育の授業の後、高校時代の真っ赤な学年ジャージで農場を訪れた私に「なんだ、そんな赤いの着て、おめえ発情期か？」この写真の発掘には黒（黒澤友彦）にお世話になりました。ありがとう。</p>	

私が出会ったこんなボウタン



腐った組織と
言われる



1992～95 年頃のポータン組織（補足）

脇田晋也（1992 年入学）

【タイカレーが食べられるから】

92 年、私が入部した当初、ポータン同期は大勢居た。それは我々が所謂、第二次ベビーブーマーと呼ばれる、単に母数が多かったのが要因かも知れない。私の場合、同じ研究課程所属の新（長島新）から、「農場に行ったら、タイカレーを食べさせてもらえる」という情報を聞きつけて覗きに行っただけだった。…が、クミン香るシシカバブも供され、すぐに周りの同じく覗きに來ただけと思われる同級生と意気投合し、居ついてしまった。ちょっと変わった場所を求めている自分に、ポータンは十分変だった。

【ゼロ免課程】

部員の中に私も含め、ゼロ免課程の学生が多く混ざっていた。学芸大は国立の教員養成大学だが、途中から卒業要件に教員免許を課さないゼロ免課程を設けたことで、学生気質への影響が少なからずあったと思われる。偏見を承知で書けば、ゼロ免課程は受験科目が 3 教科と少なく、自然、山っ気があり、「堅い」とは正反対な印象の人間の割合が増え、結果、ポータン面子も彩り豊かになっていたと思う。

【「学術探検」という方向性】

ポータンの母体である INCH の影響は大きかった。具体的には冒険学校であったり、事務局の（岩谷）美苗さん・泰（小川泰彦）さん達…。特に泰さんの型に収まり切らない言動に魅了された部員も多かった。私も自分の手で小屋（家）を建てたいと憧れた口だし、車の免許は教習所でなく泰さんに教わって取得した。1 年時にスタッフとして参加させてもらった冒険学校では、中込（卓男）さんから参加者の子らを預かり、落ち葉から焚き火を起こして帰るだけ…それだけのことにえらい緊張していた。

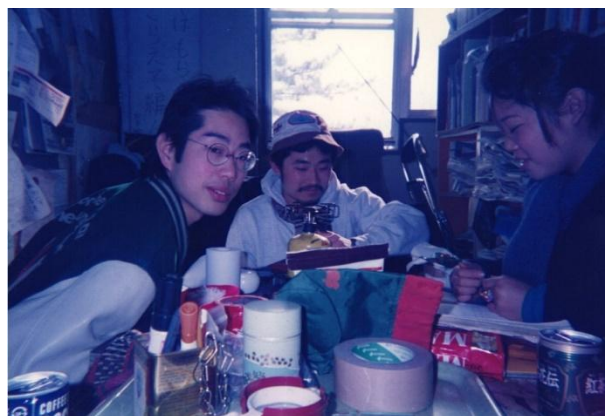
木俣先生が中央アジアに雑穀等の学術調査隊を出す（93 年）、という当時の「事件」は、特にポータンに入った方がいいが、ワングル・登山部とやってることの何が違う？と悶々としていた我々に、「学術探検」という方向性を示した意味で、非常に大きな刺激、というか示唆となったと思われる。

【部外の先輩に導かれ】

在籍していた時期の一番印象に残る活動…といえば、93 年、私が 2 年時の夏の韓国済州島への調査冒険隊だが、それを牽引してくれていたのは、檜山（勝彦）さん、そして留（福留友子）さんという先輩だった。でかい活動をしてみたいが、特にこれといった関心分野、特異技術を持っていなかった我々（部員の中には丸ちゃん[丸岡英生]のように持っている人もいただろうが大半は、の意）に、最低限の韓国語習得、現地大学生に通訳を依頼、各組の具体的テーマを見つけ深める…など諸々の相談・指導をしてもらった（息抜きにした深夜のプール遊び・テニス等もサイ&コー）。その檜山さんは不思議なことに部外の方で、民研や地理学・社会学・人類学など面白そうなゼミ・サークル界限と関わりがあったようで、当時の自分には啓発される部分が大変多くあった。しかし、済州島に隊を出すにあたり、少なくない同期部員が「何かこれまでのポータンと違う…」と部から距離を置く結果になったのも事実だ。

【「腐った組織」】

濟州島以後、本多勝一(今では正しい日本語の伝道者との世間認識)の定義通りパイオニア・ワークに拘りたいが、全く自分の興味・専門が定まらず、これといった伝承できる技術も持たないため、それらが分かり易い(兼部していた)合気武道部の参加比重を高めていってしまう。自分達が受けた手解き(上記)を後輩たちにろくにしようとしないう我々を指して言われたのが、例の「腐った組織」発言と記憶している。この歳になっても未熟だが、当時を振り返ると苦い思いが心に蘇えるのはそういう訳だ。



2000 年頃

田中浩樹（1996 年入学）

「探検とは何か？」1990 年代後半から 2000 年頃にかけて学生を謳歌していた我々も、集まれば酒を酌み交わし語り合っていた。というよりも、何かをしでかしたい！という血気盛んな気持ち、と言った方があっているのかもしれない。

時は、オウム真理教の事件や神戸連続児童殺傷事件、そしてノストラダムスの大予言がリアルに迫る 1990 年代の後半。いまとは少し違う混沌とする中で、それでいて次の時代に可能性を感じていた時代だったと思う。

いまやベテランとなったタレントの有吉さんが猿岩石としてテレビで世界中をヒッチハイクする中、個人でするよりチームでしか、できなさそうなこと。チームだからできることを日々考えていた。ちょうどそのころ聞きつけた、とある伝説話が 1999 年に行うことになる「幻の屋久島巨大杉探索プロジェクト」だった。世界遺産になり、縄文杉を見に行く登山ルートが確立したころ、そんな島にもっと巨大で、知られざる「超巨大」な杉が有名になった世界遺産の島にまだ人知れず佇んでいるらしい、それを発見しに行く。

求めていたのは謎を求めるロマンのほうが大きかったのだろう。振り返ると、若干恥ずかしい気持ちにはなるが、若輩どもが学業そっちのけで、夜な夜な集まり準備を重ね、企業を訪問しスポンサーを集め、測量技術を学び、登山技術を高め、本気で 1 つのことに向かっていたのは確かだったと思う。

山岳的、学術的、そしてドラマティックなまだ見ぬ未知への憧れ、そんな要素を複合的に含んでいたこのプロジェクトは、思いが異なる個人でもチームになれる。そんな最大公約数的な役割を果たしたのだ。その活動で発見した巨大杉は「岳人」にも掲載されたが、それ以上に我々が得られたことは、個々の音がチームとして集まることで、それまで聞いたことのない素敵な音が奏でられるということを身をもって知れたことだと思う。

それは、数々の先輩たちが部室に残していた活動の一旦を読みふけると、抱いていたワクワク感をきっかけに導き出した、精いっぱいの探検への答えだったのかもしれない。



2005 年頃の冒険探検部を振り返って

平田正吾（C 類 2003 年入学）

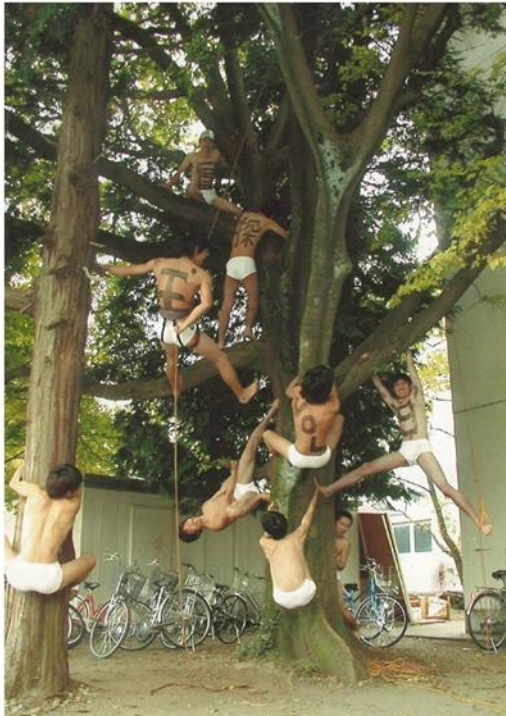
私が在籍（2003 年～2006 年）していた頃の冒険探検部の活動を振り返ると、企画屋と技術屋の大きく 2 つの系列に分けられる。技術が活動の目的であるのか手段であるのかという点については、時に部でも話題に上がり、議論されていたことを懐かしく思い出す。

今つらつらと思いつくままに当時の活動を振り返ると、企画屋的なものとしては国内外での筏づくり（天草、明石、ビルマ・インレー湖）や、奄美大島でのアマミノクロウサギ撮影などが思い起こされる。また、技術屋的なものとしては、こちらも国内外でのフリークライミングやボルダリング、山岳縦走、沢登りのルート開拓などを精力的に行っていた。

また、関東学生探検連盟の活動の一環として、特に東海大学や中央大学の探検部と様々な活動を共にしたが、関東近隣の探検部が合同で行った富士山清掃隊活動（各登山口からどのチームが最も多くのゴミを拾って頂上までたどり着くかを競う）は、個人的には忘れがたい。また、学内でも山岳サークル・アンナプルナと、定期的に交流を行ったことも忘れることはできない。

かつての世代と比べると華々しい実績はないかもしれないが、2025 年の今からすると企画屋的活動は youtuber の先駆けのようなものであったし、あの当時ここまでボルダリングがブームになるとは思っていなかった。スマートフォンや youtube が普及し始めたこの頃には想像もできなかったが、現在あの頃の冒険探検部の活動ができれば、その成果を広く発信することで、何らかのインパクトを社会に与えることができたのにも思う。

現在、私は東京学芸大学で教員を務めている。まさにコロナ渦の折に、冒険探検部はその活動を一旦は閉じた。あの頃のスピリットを再び蘇らせる新しい世代がいつか出てくることを、見守りたいと考えている。



私が冒険探検部で学んだこと

藤野俊（2007 年入学の筈、本人談）

この寄稿の依頼を受けて、大学時代を振り返ってみました。冒険探検部（以下、冒探）の記憶しかほぼないことに気が付きました。何をしに大学に通っていたんだらう。冒探の部室を初めて訪ねた時のこともよく覚えています。異様な雰囲気醸していたサークル棟の中でも、最上階の最奥の区画という意図されたような位置取り。まるで次元の扉を開けるような気持ちでその戸をノックしたのを未だに覚えています。サークル棟に入って「棟内禁煙！」と大きく書かれた貼紙を横目にしながら初めて訪れた部室では、ソファの背もたれに座った先輩が、堂々とタバコを吹かしながら「よく来た、まあ一旦座ろう」と優しく迎えてくれました。天井に貼られた独特な歴代のポスター。吸い殻でいっぱいになった灰皿。雑多で狭いあの空間から感じた何とも言えない緊張感は忘れられません。

棚を隔てて隣が「平和を守る会」というコントラストはもはや神のいたずら。あの部室でたくさんの夜を過ごし、語り、飲めない酒を飲み、様々な世界を救い（ゲームで）、いくつもの単位を見送り、暑い日も寒い日も入り浸っていたのが懐かしい…。「あなたならすぐにスタアですよ」あの人の顔を何度眺めたことでしょう。シシカバの匂いが取れない冷蔵庫。皆で雑魚寝したコタツ。夜中のプールを目指して裸で駆け下りた非常階段。数多の人が嘔吐した部室の窓。マメができるまでやりこんだストⅡ。挙げれば切りがない。あの空間に本当にたくさんの思い出があります。時には他人に多大な迷惑を掛けることもありましたが、間違いなく私にとっての青春でした。

私が在籍していた時代はちょうど部員数が減少に向かう境の時期だったかもしれません。その頃から男の入部希望が少ない代が続き、女性の方が元気で活発だった気がします。見学に来るのも女性の方が多かったように思います。時代の象徴なのでしょう。とはいえ、アグレッシブで個性豊かな面々に囲まれ、いつも話題に事欠かない楽しい時間でした。きっと皆が自分が一番まともだと思い、お互いを変ったやつだと思っていたことでしょう。

学芸だけでも十分に楽しく活動できていましたが、技術知識の拡充や、より大きな活動を求めて連盟にも参加するようになりました。他大の部員との触れ合いはまさに異文化交流。様々な大会や合同合宿、そして連盟の飲み会を何度も経験していれば、社会人になってからのお酒の席で怖いものはないですね。そんなこんなで、連盟会長職までやらせていただきましたが、そういえば妻と出会ったのも連盟での縁。冒探様様の人生でございます。

当時、連盟で他大学の部員や先輩たちと話をする中で、「学術的な探検活動」について考えたり議論することが多々ありました。アウトドアスポーツ的な活動やユニークな遊び的な活動もある中で、社会的意義を持った活動をするのが探検部本来の目的、ということに自分は少し違和感があった気がします。洞窟や沢の新規開拓、未発見の遺跡調査、新種生物の探索、文化人類学的な民俗調査など、私の在学中もそういった社会的な探検活動はいくつかありました。でも、自分が学生の頃にはスマホが現れ、情報は無限にあるし、Google マップで世界中の衛星写真を見ることができました。ネット上の誰かの記事を参考に企画を作ること多く、誰かのトレース的なものが大半。探検部全体をみても人類にとっての「未知」を探るより、個人にとっての「未知」を探求する活動が主でした。今となっては、私はそれで良かったと思っています。そもそも私がこの部に入った理由は、既成概念や社会常識に囚われないその自由さ、やりたいことを技術や知識で実現させる行動力に憧れたからです。先輩たちやOBOGの逞しさ、存在感が本当にかっこ良かった！仲間からもたくさんの刺激をもらい、自分が見たい景色を見に行き、やりたいことを思いつく限りやりました。

そこでの経験と冒探関係の皆さんとの出会いが人生の糧になっています。今の若い人にも、こういう仲間とのリアルな人間関係や、「生きる力」みたいなものをたくさん経験してもらえたら、なんて密かに願っています。

私はいま山梨県の山奥に住んでいます。家からは瑞牆山や金峰山が見えます。子どもの幼稚園まで片道 20 km、最寄りのコンビニまで車で 30 分弱、とても不便な場所です。2018 年に脱サラをして、無肥料・無農薬の自然栽培という農法を学び、農家になりました。春から秋は農作業、冬は薪やシイタケ原木を切り出す林業、こんなサイクルです。半端ない超過疎地なので地域活性も急務。家庭も仕事も地域もやることいっぱい！山も川もあるのに貧乏暇なしでせっかくの田舎暮らしも正直なかな楽しめていません。理想の暮らしにはまだまだですが、とても充実しています。冒探に出会う前の私は、己の好奇心や未知を見つけて、素直に選択することが怖かった。この選択ができたのも、冒探で得られた価値観や経験があったから。そして先輩たちや仲間の存在なくしてあの時間はあり得ませんでした。感謝です！！今思えば、私の部活動は、社会に向けての初めての自己表現だったのかもしれませんが。そして今も私は自然栽培という農業や生き方を通じて自己表現しています。誰もがそうなのでしょう。私のやっていることが社会的な意義を持てているかは未だにわかりませんが、いずれ、自分が思う価値とは別に、社会が自然と見出してくれるのではと思っています。

最後に、自然文化誌研究会の 50 周年、誠におめでとうございます。事務局の先輩方、編集作業お疲れ様です。このような機会をいただきましてありがとうございます。そして木俣先生、在学中は大変お世話になりました。こうして皆様へ生存報告ができたことも嬉しく思います。瑞牆山の麓で土にまみれて元気に暮らしておりますので、暑い都会を離れたくなったり、山へ遊びにいらした際は、是非お立ち寄りください。子育てや畑仕事でなかなか人に会えない日々なので、遊びに来てもらえるのが一番の楽しみです。それから農業や移住に興味がある方も大歓迎です。お手伝いも大歓迎。野菜もたくさんあげちゃいます。あと、地域を活かす取り組みや、都市部から人を集める方法、是非アドバイスを頂けませんか？冒探の繋がりを再び感じる事ができて本当に嬉しいです。皆様にお会いできる日を楽しみにしております。



世界を広げよう ～やってみなくちゃ分からない～

小林拓未（2011 年入学、現在 34 歳）

活動:

沢登、登山、歩き旅、ケイビング、スキューバーダイビング、地下探検、、、

好きなこと:

見たことないこと、やったことのないことをすること。

苦手だったこと:

単位を取ること。家に帰ること。計画を立てること。

今したいこと:

海外の日本人学校で働くこと。歩いて旅行。

冒険探検部に入ったきっかけ:

ほかのサークルの先輩に誘われて部室に行きました。部室に入った瞬間、灰色の視界と床に敷かれた銀マットの輝きに魅せられました。

自転車で帰ろう:

1 年生の夏休みに自転車で実家のある島根県まで帰ることにしました。

「本当にできるだろうか」という少しの不安と、「どうなるか分からない」というワクワクを胸に出発しました。東海道から京都、兵庫、鳥取と 13 日かけて帰り着くことができました。

自分の力だけで帰ることができたという驚きと嬉しさを感じる活動でした。

次の年は、ロードバイクを手に入れ、同じく実家のある島根県まで帰りました。同じルートを 8 日で駆け抜けました。

毎年ロードバイクで帰ればいいやと考えていたその年の秋、ロードバイクを盗まれてしまいました。

そうだ、歩いて帰ろう:

自転車を失った私は、3 年生は遊び倒し 4 年生の夏にふとこんなことを考えました。「そうだ、歩いて帰ろう。」

練習として八王子から山梨まで甲州街道を歩き、装備を整え、先輩からアドバイスをもらい、一緒に活動してくれるメンバーを探し、結局一人で実家まで歩いて帰りました。

歩きの旅では、7 kg 程度の荷物を背負い、1 日 30 km 移動し合計で 35 日間かけて実家まで帰りました。

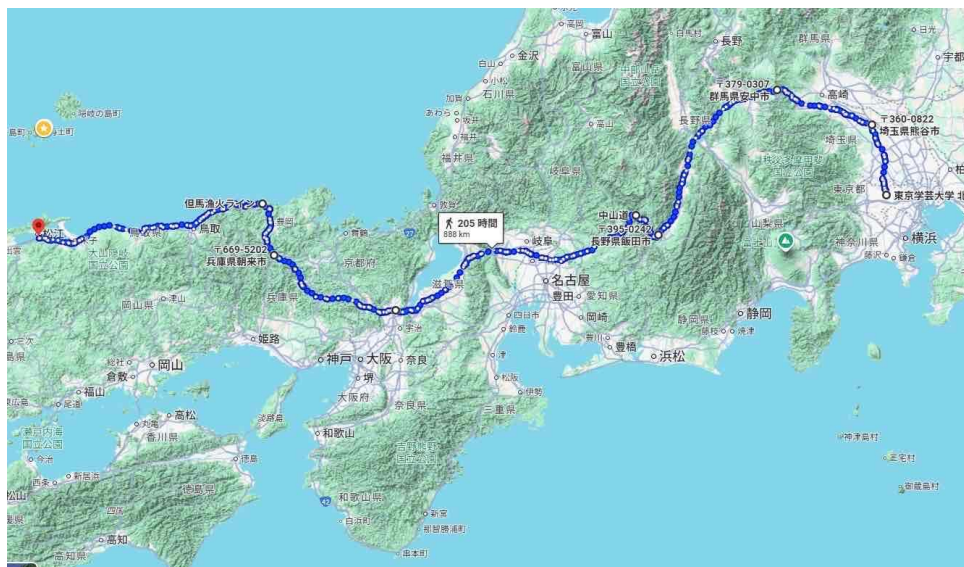
ルートは中山道で京都まで向かい京都から日本海側に出て帰りました。一番苦しかったのは 2 日目と 3 日目でした。足の指、股関節、膝と一歩歩くごとに鈍い痛みが続きました。4 日目からは体が痛み慣れます。

道中、誰とも話さない孤独や、歩いても歩いてもたどり着かない虚無感、警察からの職務質問、

様々な人との出会い。その場で肌で感じたことで、自分が大きくなった感覚がありました。

やってみなくちゃわからない：

私は今、島根県の海士町というところで小学校の教員をしています。冒険探検部での経験から、自分の世界を広げるには、やってみなくちゃ分からないと考えています。次は、日本人学校の教員となって自分の知らない世界に行ってみたいと思います。



リベレーション

竹田朱花（2011 年入学）

私が冒険探検部で活動していたのは 2011 年～2014 年。もう十数年も前のことだという事実には驚愕する…時間が経つのは早い。

大学一年生の時、他大学に行った友人から探検部の存在を聞いて、部室のドアを叩いたのが私が入部したきっかけだ。当時からあまり部員は多くなく少数精鋭という感じだったが、大人数でワイワイするサークルよりも、私にとっては居心地が良かった。

活動内容は様々で、山登り、沢登り、筏で川下り、ケービング、廃道散策等々。面白い企画を次々に思いつく先輩のおかげで、色々な体験をさせてもらった。アウトドアの魅力を存分に味わえる活動はもちろん、常識はずれな活動もあった。自分で言うのも何だが、それまで優等生的に生きてきた私にとって、冒探の活動は常識の枠から一步外へ踏み出すきっかけとなった。某所で作業員に見つかって怒られると思いきや逆に心配されたり、真冬に豪雪地帯に行って車が何回転もしたりと、あわや退学やこの世から退場しかねない体験もしたが、今となってはどれも良い思い出だ。一方で、私自身が積極的に企画していた活動は山登りや沢登りだった。どちらかというと山岳部やワングルの活動で、探検部らしい企画とは言えないが、よく他大学の探検部員も交えて山や沢に行っていた。

活動そのものも面白かったが、やはり部室で仲間と過ごす日々が楽しかった。部会の日には、お世辞にも綺麗とは言えない部室で鍋を囲んで酒を飲み、ゲームしたりカラオケに行ったりして、そのまま夜を明かすのが恒例だった。マジメな学生からしたらなんとも墮落した生活だろうが、それはそれで大学生らしい経験ができたと思う。

私にとって冒探は人生の方向性を大きく変えた存在である。冒探に入っていなければ、今もおそらく普通の OL として過ごしていたことだろう。私は元々、近所の川で良く遊んでいるような子供だったが、ある時から完全にインドアシティガールとして生きてきた。冒探に入って、自然の中で遊ぶ楽しさを思い出さなければ、ずっとそのままだただだろう。大学卒業後、某登山用品メーカーに就職したのも、冒探でのアウトドア経験が活きた結果と言える。また、先にも書いた通り、冒探は私の価値観を大きく変えた。良くも悪くも常識に囚われなくても良いのだと学んでしまったのだ。

そんな私は今、沢登り系 Youtuber である。会社勤めという安定した道を外れ、不安定な収入の代わりに時間や場所に囚われない生活をしている。残念ながら Youtube だけで食べていける程ではないので、不定期にバイトや業務委託の仕事で食いつないでいる。カッコよく言えばフリーランスというわけだ。思い返せば沢登りに出会ったのも冒探なので、改めて今の私が私である為のきっかけは、ほぼ冒探にあると言っても良いかもしれない。ちなみに、沢屋として活動していると、元探検部だったという人に割と良く会う。現役時代には全く関わりが無くても、なんだかシンパシーを感じて嬉しいものだ。

という訳で、冒探で過ごした日々は私にとってかけがえのないものである。そして、これを読んでいる冒探関係者の皆様、元部員を助けると思って、ぜひチャンネル登録をお願いします！

「シュカの自然逍遥」

「シュカの自然逍遥」



私と冒険探検部

川村亮太郎（2015 年入学）

北海道から上京し学芸大学に入学した私であったがその滑り出しは不安な事ばかりであった。知り合いも 0 からのスタート、人付き合いも上手では無かったため、気心知れたコミュニティを作るのに苦労した記憶がある。そんな中で、「サークルを通して自分の居場所を作ろう！」と思いサークル一覧が書かれた冊子をペラペラめくっていると目を引かれたページがあった。「we are family!!!」と大きく書かれ活動内容は「何でも！」と書かれている。とんでもなく胡散臭い…普通の感性では近づきがたいと感じる異質なページであったが、中々居場所を作れていない寂しさと心細さが私を後押しして、翌日にはサークル棟最上階、最奥（この位置も怪しさを助長させている…）にある冒険探検部の扉をノックしていた。これが私にとって様々な出会いと経験をもたらしてくれた冒険探検部との一ページ目である。

出会う先輩方は皆マンガの中から出てきたような人ばかりであった。「俺はサークル棟の生きた化石」と自己紹介してきた 6 年生！の先輩、出会った一言目が「君、童貞??!!」とぶっ放してきたとても綺麗な先輩、金髪、革ジャンに煙草を吹かせて絵にかいたようなヤンキーみたいな風貌の先輩、その後も廃墟が大好きで色々な所に振り回してくれた先輩、人生経験の豊富な OBOG 等の関係者、ここでは書ききれない先輩後輩の皆さんと本当に素敵な出会いと貴重な経験をさせてもらった。

初めての部会の日にはいきなり懸垂下降をさせられている。仕組みもよくわからないままサークル棟の最上階からロープ一本で降りて行った。説明は軽く受けたものの、まださっぱりとわかっていない。その中で最低限の動作だけ叩き込まれ、吊るされていたが、ただただ怖かった…その後は部室の床に落ちている鍋や包丁を使って皆で鍋を食べた。そこらに転がっているヘルメットで水を汲もうとした先輩を見たときには実は戦慄していた。衛生的に大丈夫なのか??…イヤ、煮沸しているから衛生的に大丈夫!!……大丈夫??と実は思いながら食べていましたよー。ここまでだと、私が散々な目にあったかのように見えるかもしれない…けれども！それ以上に！！先日まで高校生だった自分ではまるで経験してなかった事に触れたこと、会ったことの無いタイプの人たちと関わったことは本当に楽しかった！！ハラハラもしたけれども、世界が広がったように見えてワクワクしていた！！

すぐにどっぷりと冒険探検部に浸かってしまった。気づいたら、山や地下、氷穴に連れていかれたり、なんだったら自分からみんなを北海道の離島へ連れて行ったりなどしていた。大学祭では三日間一度も家に帰ることなく昼はシシカバブを売って、夜は OBOG の方とお酒を飲んだりしていた。いつの間にか部長にもなっていた。先人たちのように人の入らない大自然へ探検するという活動は少なかったかもしれないが、各々の興味に基づき何かに挑戦してみよう！という活動をたくさん行えたことはとても楽しかった。肉体的、精神的、時折羞恥心的な困難を乗り越えながらその挑戦を行えたことこそ、私にとっての冒険、探検であった。本当に楽しかった！！一緒に活動を行ってくれた部員や OBOG、関係者の方々、ありがとうございます！

また、活動以外にも遊びや飲み連れて行ってくれたこと嬉しかった。部室でゲームをしたこと、一晩中くぐらと過ごしたこと、色々な悩み相談をしてくれたこと、たくさん思い出として残っている。人間的な魅力ある先輩たちと関わったことは大切な財産だ。色々な冒険、探検、それらの経験を行ってきたからこそ醸し出せる人としての魅力なのだろうと今でも思っている。一緒にいたら楽しい気持ちにさせてくれる、何か困ったら何とかしてくれる、そんな風に感じさせてくれる冒険

探検部に関わる皆さんと出会える時間はとても楽しい時間だった！！私も、少しは皆さんと同じような魅力を持った人間に近づけたでしょうか？

世間一般から見たら、普遍的な意義が見えづらく、「個人のやりたい！」からのみに基づくハチャメチャな活動を行う人間や、冒険探検部に集まるような「我が道」を行く個性的な人間は、「普通」とは外れた人間なのかもしれない。特にZ世代と呼ばれる私の周囲、今後のα世代と呼ばれる人たちにとっては冒険探検部にいるような我々は少し近寄りがたい集団かもしれないとボンヤリと感じている……。けれども私は、冒険探検部に関わるような人たちの空気感は大好きで、とても魅力的だとも思っている。少しくらい私たちのような人間がいた方がきっと世の中も面白くなるでしょう！！冒険探検部での体験、出会いを大切に、自分もそんな魅力ある人間でありたいなと思っている。

最後に、決して上手にサークルを回せたわけではなく、多くの関係者に迷惑をかけた部分もあったことを申し訳なく思うとともに、そんな私と様々な形で関わって楽しい時間を作ってくれた皆様に感謝申し上げたい。人によっては大学卒業後も定期的に会ってくれている先輩もいる。感謝以外の言葉がありません。また、私事ではありますが縁あって今春から関東に戻ってきており、冒探で行ったような自然体験活動等を提供する団体で働いています。関東周りのお知り合いの方へ、声をかけて頂ければ飛んで会いに行きます。是非、連絡をお待ちしています。



海外渡航・遠征の系譜

1981・2	<冒険探険部>創立
・9-10	ネパール・アンナプルナ登頂隊に部員派遣
1982・4	バングラディッシュでの農村開発活動に部員派遣
・10	ヨーロッパ・ドイツ巡見に部員派遣
1983・9-10	部員が自転車でオーストラリア大陸横断
・10	トルコ東部アララト山塊調査に部員派遣
1984・2-3	第1次中国遠征（部員・一般参加者計18名）
・8	中国引き揚げ者子弟日本語学校（江戸川区）夏の野営会に部員4名参加
・10	韓国遠征隊第1次予備調査
・10	中国国慶節記念行事に部員参加
1985・2-4	部員バキスタン・イランを自転車で縦断・調査
・3-4	第2次中国遠征（部員・一般参加者計6名）
1985・6	<自然文化誌研究会冒険探険部>創立
・6	「インドネシア・プロジェクト」発足
	「国際留学生のつどい」主催
・9-10	インドネシア学術探険（インドネシア・プロジェクト）第1回予備踏査隊派遣
・10-1986-3	フィリピン第1次調査会員派遣
1986・2-3	韓国調査 会員派遣
・3	インドネシア・プロジェクト第一次隊派遣
・3-4	第3次中国遠征（会員・一般参加者計11名）
・5	マラソン報告会「アジアは今」第1～7回開催（インドネシア・韓国・中国・フィリピン）
1987・3-4	第4次中国遠征（会員・一般参加者計19名）
・8	青年海外協力隊員として会員がガーナへ渡航
・8	イギリスの野外活動学校（OBS）に会員参加
1988・3-4	第5回中国遠征（会員・一般参加者計12名）
1988・5	第6回野外教育セミナー開催
・11-12	連続講演会「アジアを考える」開催
1990・9-10	部員バりに渡航
・9-10	部員ボルネオに渡航・調査・登山
・12-1991・1	部員インドネシア・アルー諸島に渡航・調査
1991・11-1992・2	連続講演会「アジアを考えるII」開催
1993・6-8	中央アジア学術調査隊 JTクロスカルチャア賞を獲得し 中央アジアへ
・9	済州島調査冒険隊 済州島へ
	（以上、20周年記念誌「らぞう」から）
1994-95頃	部員ヨーロッパに渡航
同上	部員中国に渡航
同上	部員イスラエルに渡航
同上	部員中央アジアに渡航
1996・8-10	部員ベルー、ボリビアに渡航
1996・8-10	部員インドに渡航
1997・4-98・3	部員ブラジルで日本語教師に（1年間）
1999.3	部員タイ、ベトナムに渡航
1999.4	部員スリランカに渡航
1999.6	部員フィンランドに渡航
1999・12-2000・1	部員オーストラリア・ニュージーランドに渡航
2003.9	インドネシアイカダ計画偵察
	（以上、「冒探王」vol.6-11から）

歴代部長リスト

<自然文化誌研究会>

1975	中込卓男
1976	中込卓男
1977	中込卓男
1978	(空白期間)
1979	(空白期間)
1980	(空白期間)
1981	薩佐久仁子
1982	柴田一
1983	黒田俊之
1984	宮本透（副部長）
1985	新井重正

<冒険探検部>

1981	塚原東吾
1982	塚原東吾
1983	塚原東吾
1984	小林正男
1985	石川秀樹

<自然文化誌研究会冒険探検部>

1985	新井重正
1986	新井重正
1987	瀬谷勝頼
1988	小川泰彦
1989	岩谷かなえ
1990	柏木貞光
1991	鍛冶岳雄
1992	間瀬貴久
1993	池谷光・雫永法
1994	永松剛
1995	森光則
1996	石橋勝也
1997	黒澤友彦
1998	浦野直樹
1999	田中浩樹
2000	前田真実
2001	神谷英俊
2002	中尾麻伊香
2003	川上健太
2004	東野新
2005	平田正吾
2006	深沢康之
2007	舟久保智宏
2008	岩崎航太
2009	鹿間友
2010	藤野俊
2011	藤野俊
2012	三村絢子
2013	小林拓未
2014	竹田朱花
2015	石原美南
2016	斎藤俊樹
2017	斎藤俊樹
2018	川村亮太郎
2019	亀田真希

第3章

ちえのわ農学校

サークルちえのわ

＜基本理念＞

＊自然のわ：自然の様々な表情と向き合いながら、「種から胃袋まで」の道のりを五感で感じるきっかけづくりをする。

＊人のわ：農学校だからこそ出来る体験を通じて、子どもたちが仲間やスタッフとのつながりを感じられるきっかけづくりをする。

＊知恵のわ：昔から受け継がれてきた知恵や文化にふれ、身近なものを見つめなおし発見するきっかけづくりをする。



第3章 農学校

菱井優介 菊池香歩 櫻井優介 大友憲幸 森住芽衣 森岡小晴 住友香葉

自然文化誌研究会でいう「農学校」とは、東京学芸大学の環境教育研究センターと農園を利用したの小学生向けの食農体験活動の総称です。具体的な活動については「黒澤友彦・菱井優介・西村俊（2023）．”ちえのわ農学校小史”．民族植物学ノオト第 16 号:32-46」にまとめてあるので、そちらをご覧ください。http://www.ppmusee.org/userdata/oto_No16.pdf

50 周年記念誌に際しては、「農学校」と「ちえのわ」設立までの経緯と、この「農学校」に関わってきた人たちの思いに耳を傾けた座談会の内容を紹介します。

3-1 農学校の創設期をふりかえって

私が「農学校」という言葉をはじめて聞いたのは、2002 年 4 月のことでした。木俣先生に A3 の企画書を渡され「東京学芸大学公開講座『ぬくい少年少女農学校』を開催したいからスタッフを募ってくれないか」と声をかけていただいたのです。その後、自主ゼミや有志の大学生、地域の方が集まり説明を受けました。その趣旨はそれまで行ってきた、公開講座「子どものための冒険学校」（全 13 期：1988～2001）の形を変え、農園を活かした冒険学校の常設化を試みであり、農耕文化基本複合「種から胃袋まで」（中尾佐助）を体現できる活動を年間通じた活動を行う構想にワクワクしました。

1 期目は、開催前に有志の勉強会を何度か開催し、議論も白熱し、話をまとめるのに苦労した覚えがあります。一回一回の活動を手探りで作り上げて、駆け抜けた印象です。

2 期目からは、自然文化誌研究会の面々が全面的にかかわるようになり、有志の集りから農学校スタッフとして組織的に動けるようになりました。

3 期のスタートとともに、次年度の大学公開講座としての「農学校」開催は危ぶまれていたので、並行して、どのように活動を継続していくかの検討をしていました。自然文化誌研究会

の事業としての継続案もありましたが最終的には、大学での実践には、学生主体であること、教育実践の場として機能させる必要性を鑑みて、学生サークルを立ち上げる方向でまとめ、サークル「ちえのわ」を創設するに至りました。私自身、自然文化誌研究会にとって「農学校」は「冒険学校」を常設化する試みであったし、サークル「ちえのわ」にとって「農学校」は、農的な環境を活かした教育実践の手段であると捉えています。あえて「ちえのわ農学校」というサークル名にしなかったのは、「農学校」を手段の一つと捉え、従来のやり方にこだわることなく、参加者と関わる学生にとってよりよい活動を突き詰められるようにというこだわった点でした。

2001 年の「子どものための冒険学校」から「ぬくい少年少女農学校」へ、そして「ちえのわ農学校」と名前は変わっても、あのコロナ禍も乗り越えて、学生中心で「農園での冒険教育、野外環境教育の実践」を続けてくれていることを誇りに思います。50 周年記念誌に寄せて、今につながる農学校スタッフたちの思いを残せたらと思い座談会を開催しました。次項はその様子をお伝えします。（菱井優介）

3-2 農学校座談会

2025年6月10日と6月18日にオンラインで開催した座談会から抜粋しまとめました。
まずは、メンバー紹介と一言です。

名前(ネーム) 菱井優介(ひっしー)
所属と役職 F類環境教育 めくい1期~3期 ちえのわ1期 代表
一番の思い出 1期をやり終えた後に寝転んで見上げた多目的室の天井
好きな活動 田植え、脱穀
後輩へ一言 これまで農学校を続けてくれてありがとう

名前(ネーム) 菊池香歩(かほやん)
所属と役職 A類国語 大学3年生の時に、ちえのわ13期で代表を務めました。
一番の思い出 8月農学校で環境センターの多目的室に子どもたちと1泊。稲を守るために捕まえたイナゴを、2日目の朝に佃煮にしたこと。子どもと一緒にドキドキしながら命をいただいた経験、貴重だったな~と覚えてます。
好きな活動 もちつき、竹工作、わら工作、自然ビンゴなどなど、いろいろあります。
良いところ 子どもとかおとなとがなく、みんながごちゃまぜになって過ごせること。
後輩へ一言 子どもに教えるのではなくて、一緒に遊ぶのが大事！(大人としてリスク&ハザードは考えた上で)授業の合間やお昼休みに農園に行っていたから、よりちえのわを好きになったなと思います。

名前(ネーム) 櫻井優介(ゆうすけ)
所属と役職 B類理科 15期?代表
一番の思い出 採れた夏野菜を使ってカレー作り！
良いところ 子どもも大人も日常の中では得られない知識と経験を得られること
後輩へ一言！ 大変だけど、自分なりの価値を見つけて頑張って！

名前(ネーム) 大友憲幸(のり)
所属と役職 A類環境教育 18期
一番の思い出 コロナ明けの、子どもを呼んでの初めての農学校。めちゃ緊張した
好きな活動 農園散策一択
良いところ やりたいことをやりたいようにできる場所
後輩へ一言！ 農園で遊べるだけ遊べ

名前(ネーム) 森住芽衣(めい)
所属と役職 A 類環境教育 18 期
一番の思い出 クリスマスのイルミネーション、キャンドルでの飾り付け
好きな活動 土絵の具、田植え
良いところ 日常とは違う仲間たちと一緒に五感で自然を楽しむことができること。
後輩へ一言! 失敗を恐れずやりたいことは全力でトライしてみてください!

名前(ネーム) 森岡小晴(こはるん)
所属と役職 A 類環境教育 18 期 会計
一番思い出 お泊まり農学校
好きな活動 竹を組み立てて作るそうめん流し
良いところ 子どもと大人が一緒になって、自然体験を楽しめるところ
後輩へ一言! 楽しんでいけば経験値は増えていく!

名前(ネーム) 住友香葉(かよ)
所属と役職 A 類環境教育 新歓係、事務局で 20 期は代表を務めています
一番の思い出 お泊り農学校
好きな活動 ヤマメをさばくこと
良いところ 子どもたちの好奇心や興味に触発されて、私自身もさまざまな発見や経験ができること。
後輩へ一言! 一緒に農学校を楽しみましょう!

以上 7 名でお届けします。

● 印象に残っている活動や農学校の思い出・魅力は？

▶ ひっしー

まずは、それぞれの農学校の思い出、印象深かったことを教えてくださいと、いってもすぐに話せるわけじゃないと思うのでまずは私から話させてもらいますね。

餅つき今でもやってるよね。1 期目の農学校、最後の 12 月活動で餅つきをやった後に鏡餅を作っていたら、突然、

「これは鏡餅なんかじゃないっ」

「いや、これが本物で、お前のは偽物だ」

「僕が知っている鏡餅はプラでできてて、底をパカッと開けると中から切り餅が出てくるんだ」

言い合いがヒートアップして殴り合いのケンカにまで発展。あれはいろんな意味でびっくりした。手が出たこと自体も驚きだったけどそ

れ以上に、子どもに魚を描かせたら切り身が泳いでたって話に似てて、これまで本物に触れる機会がなかったことで、プラの鏡餅が当たり前になっている現実。

本来の鏡餅はこういう物だよって示すことはできたけど、その子の常識は覆らなかった。プラスチックの鏡餅をホンモノと認識している子がいる現実をまざまざと見せつけられた経験は、私の体験活動の指導者としての原点になってるね。

▶ ゆうすけ

記憶に残っていることは、ちえのわの仲間は、今でも付き合いが続いていて、いい出会いだったな、と。もともと教員志望ではなかったし、子どもと遊ぶってこうやるんだ、とか、じゃれあいの中にこんな意味があるんだ、とか参加者との接し方をゼロから教わった。子どもの教育、子どもに対する思いを知る機会だったなあ。

▶ めい

コロナでリアルで活動できなかった時に、けん玉づくりをやったのが印象的です。

ちえのわでは、子どもとのかかわり方を学ぶことができたと思ってます。大学は教え方が中心で、実際に子どもと向き合う時間はなかったし。子どもたちと直接ふれあえて、関わり方を考える機会はとてもよかったです。

あと、余白の時間が大事だなあって。活動の合間で農体験が深まっている気がします。やることを詰め込みすぎて、そういう時間がないのはもったいないな。

農園ならでは、っていうのもあるのかな。畑があって田んぼもあって林もあって、本当に色んなものが住んでる場所。それに触れやすい環境だったんだなあ。あと、たけのこ掘り！楽しかった！今思い出しました。

▶ のり

子どもたちの純粋な興味に立ち会うことができたのが一番良かったこと。いっしょに同じことをやって、農園にいろんなものがあって、気づくことができた。自分がやりたいことをできる。そこに触れることができた。

特に印象深かったことと言えば、農園での宿泊、明け方に見回っていたら、参加者2人が救急車みたいな音がして眠れないと言うので、一緒に音の正体を突き止めに行きました。鶏小屋でした。コケコッコーと鶏の鳴き声を一致させることができて、そのあと10分以上3人で鶏の様子をじっくり観察したんですよ。「あ、なんか食べた」とかすごくいい時間だったなあ。

▶ こはるん

毎年8月あたりにやっている「流しそうめん」はすごく好きなんです。何が好きかというと子どもたちの笑顔を真正面から見ることで、思い出深いですね。そうめんを流す側に立つと子どもたちがすごい笑顔で待ち構えてるんです。

でもまずその竹を組み立てて土台をつくることから子どもたちと一緒にやって、さらに自分たちの育てた今取れた夏野菜も一緒に食べて、ほんと夢みたいに感じましたね。都会だとなかなかできないし、子どもたちがいくらやりたいって言ってもなかなか実現は難しいものでも、こうやって大人がいて、ものがあって、それを組み立てる技術を持ってる人がいて、一緒にできるっていう体験ってすごくいいものだなあと思ってます。すごく企画するのが楽しかったですし、やっぱりその証明にそうめんを待ち構えてる子どもたちの笑顔が最高でした。

▶ かほやん

いろいろあるけど食べ物のお話でいえばイナ

ゴかな。私にとっては、結構印象深くて。

8月に農園に1泊した時、1日目に稲の外敵退治だってイナゴを捕まえてペットボトルに入れておき、朝に調理するのを、やってみたい子を集めてやってみました。売られてる昆虫食って抵抗感あって結構ハードル高いですけど、自分の手でさばくというか調理して食べたのは、本当に命を感じるし、なんかすごく大事な経験だったな。

▶ かよ

田んぼでの活動がすごく印象的です。

子どもたちがバーって飛びついて、田んぼの中にいる生き物、カエルとか捕まえて見せてくれたりっていうのがすごく驚きでした。私は、大学生になって初めて田んぼの中にはいったし、そこにこんなにたくさん生き物がいるって事も知らないし、子どもが嫌がりもしないで、

生き物とふれあう姿を見て、逆に自然との関わり方を学んだ気がします。子どもだけでなく大人も一緒に子どもと自然との付き合い方を学ぶところが農学校のいいところだなと思ってます。

▶ かほやん

そう、聞いてて思い出した！私、今アマガエルが大好きなんです。それはちえのわで子どもたちに「ちょっと持ってて！」と、突然手のひらにカエルを乗せられたことがきっかけでした。

子どもの頃もカエル好きだったけど、だんだん触れなくなって中学生、高校生と大人になるにつれて縁がなくなって、でも田んぼのきっかけでカエル愛が再燃しました。今では自作のカエル帽子つくるくらいですから。ちょっとしたきっかけ、触れるってすごい大事ですよ。

● 理想の農学校とは？

▶ ひっしー

ここからはテーマを変えて、今改めて思う理想の農学校とは、について考えてみましょう。こんなことやりたいな、やってみたかったな、ということを話してください。卒業生が多いので、妄想に近いかもしれませんが、どんなことやったら面白いかについてご紹介ください。

▶ ゆうすけ

理想とかやりたい活動はすぐに思いつかないけど、当時思っていたのは、子どもたちの「たのしい」を優先していたから、楽しくないからやりたくないという場面があった。農業って、楽しい作業だけじゃないし、ちょっとしんどい農学校というか、やらなきゃ、の活動があってもよかったな。結局、活動中に作業が終わら

なくて、学生がやってしまうみたいなこともあったし。ちょっとしんどいこと、重労働、ちょっと一人では無理、手分けしてやろうみたいな味のちがう農学校があってもよかった。楽しいことを優先しないパターンもあってもいいんじゃないかな。

あと平田さんから、「ヤギを使ってなにかできるかもよ」と言われていたのに、そんなに活用できなかったな。もったいなかったなあ。生き物を飼うことから命について、農業とか文化についても考えてみたかった。もったいなかったな。

▶ のり

今は農園に鶏が2羽いるんですよ。なかなか活動に活かすことが出来ていないですよ。

農業と家畜は広がりそう。

▶ めい

もっと子どもたちが農業を身近に感じてほしかった。1 か月単位だから、間がない。もっと日々の変化を感じられるように、芽が出たとか、情報発信もできたんじゃないかな。

参加者と学生のバランスが I N C H のキャンプみたいに 1 対 1 じゃなくて、参加者を取り囲むみたいになっているのもどうにかしたいです。

▶ かほやん

理想というと少しずれるけど、実際にやった中では「竹」をつかった企画がよかった。

今でも仕事でやろうと思ったけど、なかなか工具の準備や安全面での課題があって難しいから、農学校ではもっと取り入れてほしいな。

▶ こはるん

ちえのわに入るまで自然体験というか畑とかに関わってこなかった大学生でも、自然体験の楽しさを感じられるのが理想の農学校だと思います。地域の農家と連携し、大学生が農業体験をする機会を設けることや OB・OG と一緒に大人の農学校みたいなのも面白いかもしれません。

▶ かよ

大学生と子どもと一緒に楽しみながら学べるのが理想ですね。私も地域の農家や専門家とつながって、より良いものができたらいいなと思います。大学の農園を最大限に生かし、大学生が知識を生かした企画を作れるようになります。

▶ ひっしー

いいね！全部やってみたらいいよ。みんなの話きいたらアイデアが出てきちゃって、私がしゃべると長くなると思うからって聞きたい？

農家見学、1 期とか 2 期の頃にやってた。学生だけでも行ったこともあるよ。

あと、参加者とスタッフのバランスを改善するためには、リピーターいるでしょ、開催日増やして、農学校 2 年生コースとかやってみたらどうだろう。参加者のレベルは上がっていくし、そこに学生も企画もレベルアップさせていくイメージ。参加者と一緒につくっていく農学校は、参加者の枠を広げつつ、質も上がるような気がするなあ。

本当に初めて子どもたちには 1 年通して種から胃袋までをしっかりとって、2 年目以降は、それぞれ研究チームとか。やることは 2 倍になってるように見えるけど やったらおもしろいじゃん。

大学の中で完結しなくてよくて触れたいものがあるなら、農家に連れていってとか農業試験場にいったこともあったよ。自分たちが学ぶことで深みがでるはず。

農学校で江戸野菜の復活とか品種改良にチャレンジするとか、やってみたいなあ。

●最後にメッセージをお願いします

▶ ひっしー

結局、私がしゃべりすぎたところもあるけど、名残惜しいですが時間も迫ってきましたので、最後に今日の感想か、今の農学校を支える学生たちにメッセージをお願いいたします。

▶ かほやん

創設期の思いというか「ちえのわスピリット」を聞いてよかった。こういう機会ではなかなか深いところまでは伝わらないとおもうけど。私自身、4年間やって良かったと思ってるもの、楽しく全力でやったからだと思ってます。社会人になってから、自然を見る時の目の輝きをほかの方に褒められることがあって、農学校で五感を刺激しまくったからかな。

▶ のり

話をしていて、遊ぶって言葉が頭から離れません。もっとやりたかったことがたくさんあるなあ。今の農学校は「農」から離れていってる気がする。自分と農業のつながりを考えてもらいたいし、もっとやりたいことを見つけるためにも、農園で遊んでほしい。

▶ ゆうすけ

自分が楽しいと思うことが多かった。まずは自分が楽しめる活動を探してみる。大学生の農学校を作り上げる話し合いは大変だろうけど、子どものために何ができるか、それぞれの時間とかコストを見極めてやってもらいたいなと。活動しか来ない人とかもいると思うけど、準備に取り組んだ人が一番得るものが多いと思う。

▶ こはるん

みなさんの話を聞いて、農学校はやはりいいものだとか改めて感じました。もう大学生じゃないから、ちえのわに戻ることはできないけど、

農学校で得た体験を活かして、小菅のキャンプや自主的な活動を続けたいと思います。

▶ めい

いろんな話が聞けて楽しかったし面白かった。大学生のみんなが楽しんでほしい。子どもと一緒にいることが全てではないし、農業のことを突き詰めてもいいし、頑張ればなにかのプロになれるはず。

▶ かよ

最近は日中の気温がすごく高くて 35 度とかで農園に出るのがすごく危険な状態にあって、夏場は 16 時から 19 時とかちょっと時間を遅らせて夜の農園を楽しむみたいな企画もいろいろ考えながらやっています。

今回の話の中で農学校の形は変わってもいいっておっしゃっていただいたのはすごいがありがたいし、嬉しかったです。その環境に合わせて、農園を最大限有効活用できる農学校の形に変わり続けていくのがいいんじゃないかなってすごく思いました。

▶ ひっしー

ありがとうございました。いまでも参加者を「ちえっこ」、スタッフを「ちえんちゅ」って呼んでることがうれしかったです。短い時間でしたが、濃いお話をできたと思います。またお話できる機会を楽しみにしています

おわりに

2年前に農学校について振り返る機会をいただいて自分なりの思いを小史に書き記したので、今回は農学校に関わってきた人たちに話を聞きました。農学校がどんなきっかけで始まり、そこに関わった人の思いを紹介することで、これから農学校をつくり支える人たちの一助になれば幸いです。

サークル「ちえのわ」にとって、「農学校」はひとつの手段であり、目的ではないと私は思っています。

参加する子どもたちにとって安全で安心して楽しく活動できる農学校であることが絶対条件。それを運営する学生やサークル「ちえのわ」として、どんな意味があるのか、「農学校の今」を支える人たちにとって有意義な場となりえているか、時々ふりかえって考えてみてはいかがでしょうか。自然文化誌研究会は、「農学校」の共催者として、よりよい活動のために、学生の成長のためにどんなサポートができるのだろうか。まだまだできることがありそうです。農学校を通じた縁がまた新しい風となり、農園でのよりよい教育実践になることを切に願っています。

活動のきっかけと舞台を整えていただいた大学と先生方に感謝この活動に関わってくださった皆様に心から感謝申し上げます。皆様のご協力とご支援がなければ、この活動を成功させることはできませんでした。それぞれの役割を果たし、時間と労力を惜しまずに尽力してくださったことに深く感謝しています。

菱井優介



第4章

創立50周年記念座談会

2025年6月

自然文化誌研究会
(東京学芸大学冒険探検部)
創立50周年記念座談会

2025年6月21日(土)10:30～16:20
ZOOMにて開催・どなたでも参加歓迎！

【お問い合わせ】
事務局: npo_inch@yahoo.co.jp

【本会HP】
<http://www.npo-inch.ppmusee.org/index.html>

主催: NPO法人自然文化誌研究会
協賛: 京都大学探検部
関東大学探検部連盟 ほか
後援: 東京学芸大学環境教育研究センター

写真: 内蒙古のオアシス

学術探検と環境学習の創造

ZOOM参加はこちら
<https://xgd/1M6Wm>



創立 50 周年記念座談会

＜開催の経緯＞

2025 年の創設 50 周年を迎えるにあたり、自然文化誌研究会運営委員会で検討を重ねたところ、以下の 2 つを決定した。

① 50 周年記念の集まり 10 月 4 日、② 50 周年記念誌の発行

10 月 4 日の記念後行事をシンポジウム形式、パネルディスカッション形式などを検討していた。しかしながら、全国から人が集まる予想の中、2～3 時間の限られたタイムスケジュールの中で、自然文化誌研究会の 50 年を語ることができるのであろうか…！？

既に日程を発表している 10 月 4 日とは別に、自然文化誌研究会の 50 年のあゆみを、座談会形式 (zoom) で開催する方がベターであろうと言う判断をした。全国から参加も可能である。

2025 年 6 月 21 日に 50 周年記念座談会をズームで開催する旨となった。

木俣美樹男氏の探検誌の話を皮切りに現在進行形の「こすげ冒険学校」まで、幅広く合計 6 時間かけての座談会である。発表資料については、自然文化誌研究会のホームページから閲覧できるようになっているため、ここでは省略し、当日の資料の一部を抜粋して紹介するに留める。

また当日の Zoom を視聴が可能である。URL が長いので掲載を省略するが、自然文化誌研究会のホームページにリンクがある。

当日の参加者は、30 数名。50 年前から活躍しているメンバーや、現在小菅村でも活躍する大学生も。

この座談会のコンセプトとして、自然文化誌研究会の実績だけでなく、当時苦労した話も聞いておくことが、将来的な財産になると、若い人たちから先に意見をもらっていた。

自然文化誌研究会の 50 年の歩みやつながりを伝えることができたのではないだろうか。

(事務局黒澤)

【開催概要】

第一部：学術探検と学習・教育をつなぐ

挨拶・司会 中込卓男（代表理事）

①木俣美樹男（専任研究員、博物館担当運営委員、東京学芸大学名誉教授）

・学術探検の系譜～植物の栽培化過程と伝播〈フィールド・ワークの成果から〉

・環境学習における心の構造と機能の文化的進化〈冒険学校の成果から〉

②日比野真士（元冒険探検部部長・毎日新聞社）
東京学芸大学探検部員の海外探検と探検セミナー

第二部：エコミュージアム日本村/植物と人々の博物館 雑穀街道普及会などの民族植物学的伝統の継承・保全活動

・宮本透（博物館担当運営委員、宮本茶園）
雑穀栽培講習会と雑穀街道の普及
・黒澤友彦（事務局長、木下養魚場）

エコミュージアム日本村の実践活動

・井村礼恵（博物館担当運営委員、文教大学准教授）
東京学芸大学との社会連携協定による地域振興活動

第三部：冒険学校、環境学習セミナーなどの実践活動による心の形成

司会 西村俊（博物館担当理事、北陸先端科学技術大学院大学准教授）

・中込卓男（代表理事）
西原の民俗調査から冒険学校へ

・中込貴芳（副代表理事）
タイ・日本自然クラブの合同キャンプ

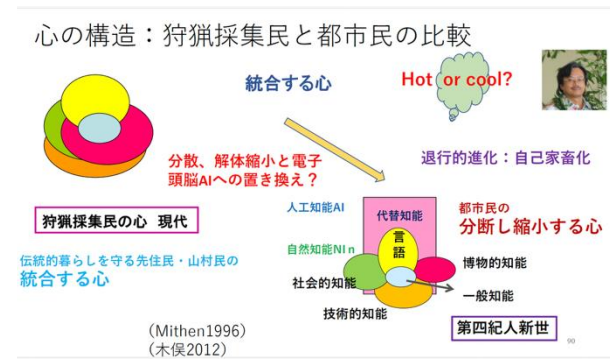
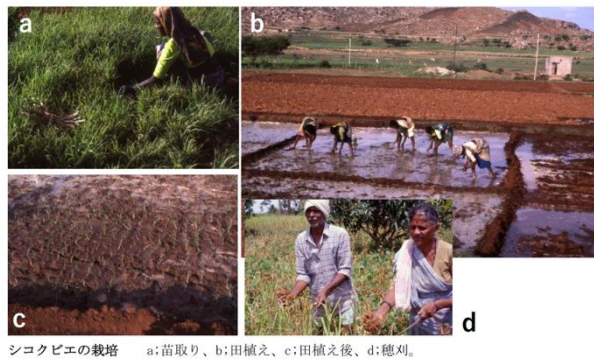
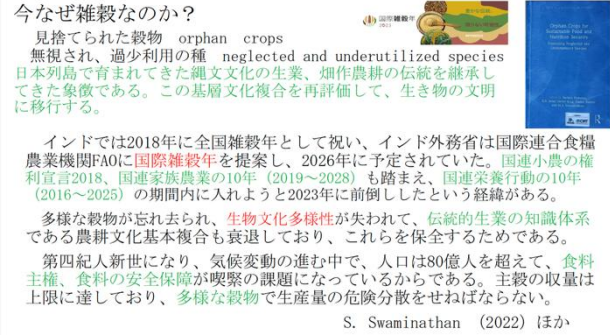
・宮坂朋彦（冒険学校担当運営委員、東京学芸大学連合大学院生）

冒険学校と現代教育の思潮～教育哲学の視点から

挨拶・謝辞 小川泰彦（理事）

各発表者の資料（一部抜粋）

第一部：学術探検と学習・教育をつなぐ（木俣美樹男・日比野真士）



自然文化誌研究会冒険探検部創立50周年(2025.6.21) 1

東京学芸大学探検部員の 海外探検とセミナー開催

～80年代後半から90年代前半を中心に～

元冒険探検部員(現在・毎日新聞社勤務)
日比野真士

自然文化誌研究会冒険探検部創立50周年(2025.6.21) 18

韓国済州島調査冒険隊(1993年9月3日～14日)

- ◆92、93年の新入生大入り部
- ◆部全体での久々の海外遠征企画(総勢15人)
- ◆現地では漢拏山登山(1947メートル)以外は調査対象に分かれ別行動
- ◆東京から下関までの徒歩組も

行動日程

※2007年「済州火山島と溶岩洞窟群」が韓国形の世界自然遺産に登録

自然文化誌研究会冒険探検部創立50周年(2025.6.21) 43

現代における「冒険・探検とは」／社会人としての「冒険・探検とは」

◆北極冒険家・萩田泰永さんの試み「冒険研究所書店(神奈川県大和市)」(2021年～)

自然文化誌研究会冒険探検部創立50周年(2025.6.21) 26

連続講演会「アジアを考えるⅡ(1991年11月～92年2月)」

講演会「開発教育とは」

講演会「多民族国家・日本在日外国人問題の現状と課題」

第三部：冒険学校、環境学習セミナーなどの実践活動による心の形成（中込卓男・中込貴芳・宮坂朋彦）

自然文化誌研究会（東京学芸大学冒険探検部） 創立50周年記念座談会 ～学術探検と環境学習の創造～

第3部 冒険学校、環境学習セミナーなどの実践活動による心の形成 西原の民俗調査から冒険学校へ

中込卓男（代表理事）



自然文化誌研究会創設の頃（1975年～1978年） 西原の民俗調査

1975年 自然文化誌研究会設立
・1975/06/22 第1回西原予備調査
高尾山：47号 一上野原 10：15富士急バス～飯尾11：39～
(徒歩) 次郎→17：01バス～上野原17：43

・07/01 部会
・07/12 部会
・07/20～22 第1回西原調査
・08/20 部会



大変お世話になった 西原の
降谷静夫さん



4. 私（小学校教員）と冒険学校

- ・子どもたちと「通川自然探検隊」「秋川自然探検隊」を作って、野外で遊ぶ（就任後）
- ・「愛鳥教育」「自然観察づくり」を授業や卒業制作としておこなう。
- ・通達や移動教室のプログラムを案定していく（小管移動教室の実施）
- ・ピクトーづくり
- ・「環境科」があったらな



国際的視野で人間をとりまく自然とその上に築かれる文化を探究する野外環境教育のパイオニア

タイ環境学習キャンプ

その歴史と成果と意義

自然文化誌研究会
中込 貴芳

タイ環境学習キャンプのフィールド



*実施内容

- ・バンダキャンピングでの小学生対象のワークショップの実施（動物観察などの化学実験、ネイチャーゲーム、パネルシアター等）
- ・カレン、ライ等の少数民族地区住民とのテーマを決めたワークショップの実施（アイヌ、鯨鯊、きのこ、熊、熊、ネームゲーム、ハーブ等）
- ・少数民族の集落や地区の農家への訪問
- ・ファイカケン野生生物保護区やその周辺での環境保護の取り組み（レンジャーによる説明、保護施設訪問等）
- ・野生動物保護区での自然観察（バードウォッチング、観察等での野生動物観察、高地探検、トレイルハイキングなど）
- ・ファミリーフォレストやハーブ、施設の運営などのバンダキャンピングの取り組みの学習



※ファミリーフォレスト・シリボン氏が提唱している環境保護の取り組み、自分の住居の周りに有用な多様な樹木や作物を植えて人間が利用するのみでなく、生物に優しい環境を創出することを目指している運動

タイ環境学習キャンプで得られるもの

タイの自然環境を学ぶ	タイの自然保護の取り組みを学ぶ	少数民族の文化や習恵について学ぶ	ワークショップの実施と地元住民との交流
・動植物の生態やその多様性を理解する。（ゾウなどの動物、サイチョウなどの鳥類、昆虫、植物、菌類等） ・動植物が生きている環境について知る（森林、農地、水辺など） ・動植物が生きている気候について学ぶ	・国立公園やその周辺での環境保護の取り組みに学ぶ。 ・バンダキャンピングの取り組みについて学ぶ（環境学習プログラム・ファミリーフォレストなど） ・大学などの教育機関での環境学習について学ぶ。	・少数民族の住居について学ぶ（竹を利用した高床式の住居等） ・少数民族の産業について学ぶ（焼畑、ぶら、キャッサバ、米栽培、等） ・生活、食文化について学ぶ（民族衣装、米、雑穀、など） ・宗教や信仰について学ぶ。	・ワークショップの実施に際する生徒と住民との交流 ・ナイトコンサートなどを通じた音楽交流 ・バンダキャンピングに訪れる人々との会話 ・市場での買い物による住民との交流 ・大学の先生や学生との交流

新自由主義による問題の加速

「効率化」としての「学習」が「経済」へ接続
「自己責任」と表裏一体の「自由」の一方で失われるもの
⇒「無駄なもの」「効果の見えにくいもの」の価値はますます低下
経済的に「生き残る」ため、最高効率で「学ぶ」のが正義？

その重みは「子どもの問題」として捉えられてきた
・おちこぼれ問題（70s～80s）
・校内暴力（80s）→教師への攻撃性
・いじめ（90s～）→仲間（子ども同士）への攻撃性
・凶悪少年犯罪（90s）→社会・他人への攻撃性
現代では、闇バイトや若者の自殺問題など…

「生存競争」教育への反抗

神代健彦
Kamachi Kenji

クラス全員を「小さな企業家」に育てる教育。

……正気ですか？

推薦 吉川浩満氏（文筆家）

集英社新書

「美しい」教育言説の功罪

例えば「主體的」「能動的」な学び
それは本当に「主體的」なのだろうか…？
「(主體的に)従属」しているのではないのか…？

・中世までの「権力」＝従わなければ殺す
⇒権力は、「目に見え」ることで機能する
(例：見せしめの処刑)
・近代の「権力」＝生かして従わせる「生権力」
⇒権力は、「目に見えない」ことで自動的に機能
⇒人は力で抑圧されるのではなく、
その力を引き出されることで自ら従う

パノプティコン（監視施設）
イギリスの思想家ベンサムが考案したもの。
フーコーは『監獄の誕生—監視と処罰』（1975）のなかで、近代の「規律訓練権力」（生権力）をこれに喩えた。
中央の監視塔からは囚人がすべて見える。
囚人からは、監視塔のなかにいる看守は見えない。
⇒「常に監視されている」という意識が生まれる
⇒実際に見られていなくても自分から服従するようになる



冒険学校と現代教育の思潮——教育哲学の視点から——

宮坂朋彦（東京学芸大学大学院博士課程）

1. はじめに：同世代へ向けて

まず、先の座談会における発表ならびに本稿は、主として INCH に関わる 10 代から 30 代前半、特に東京学芸大学の学生（サークルちえのわスタッフ含む）および卒業した同世代を、最も重要なターゲットとして想定していることを断っておきたい¹。そもそも、50 年を振り返るという意味で言えば、今回の座談会において私は発表すべき立場にない。私が INCH と関わったのは直近 10 年間（本格的には 5 年間）のこすげ冒険学校に過ぎない²。それにもかかわらず、本会を支えてきたレジェンドたちと並んで私のような新参加者が登壇したのは、50 周年を記念するこの企画が、過去を踏まえたうえで、未来へ向かって何らかの希望や展望を投げかけることを企図するものであったからだろうと理解している。

では、教育哲学を専門とする筆者が、本会の未来に向けて果たすべき役割とは何か。本発表では、INCH の活動、特に冒険学校がいかに現代教育の「当たり前」を掘り崩し、またその課題に向き合うことができるのかを問うことを目指した。この問いに先立って、教育哲学がどのような学問であるか³を端的に示しておきたい。それは「自明性を疑う」という一言で表すことができる。人間は、誰しもが何らかのかたちで「教育」を受け、それによって世代を紡いでいく存在である。それは、誰もが「教育」を語ることができると同時に、受けてきた「教育」が持っている「当たり前」つまり「自明」のものに縛られてしまうことでもある。多くの場合、「当たり前」というのは、当事者からは見えにくいものである。教育哲学は、そうした「当たり前」から一度距離をとって、それがどのような歴史的経緯のもとで構築されてきたのか、そして本当にそれは正しいのかなどを点検する学問、ということができる。以下は、この教育哲学という学問を通して、現在の冒険学校の位置を示す補助線の一つを描く試みである。

2. 現代教育の思潮

2-1. 教育の「学習化」の問題

INCH が出発した 1970～80 年代が、現代の教育言説にとって大きな転換点であったことは、教育を

¹ 当該の世代には、本会の活動の元参加者からスタッフになった方も多いが、あえて「東京学芸大学の学生」が主な対象であると強調しているのには理由がある。それは、本発表が、本会の活動だけでなく現代教育の思潮に関する広い問題提起を伴うことによる。無論、元参加者の面々にこうした問題提起が無関係であるとか、教育関係者でなければ理解できない話であるということではない。ただ、元参加者たちが主として自身の個人的体験を拠り所として、結果的に「教育」へと関わっているのに対し、学芸大関係者は（少なくとも多少の）「教育」への関心を先行して持っているからこそ、本会の活動に参加していることが一般的である。そしてその多くが、教員をはじめとして、自らの生を支える職業に「教育」という専門分野を選択し（ようと）しているということも事実である。本稿の内容は、そうした関心を持つ人にこそ読んでいただければと思っている。なお、諸先輩方においては、若造がそれよりさらに若い面々に向かって何を言うのか、ご笑覧いただければと思う。

² 筆者の経歴については、本記念誌に投稿した別稿を参照。

³ 教育哲学の諸特徴ならびに本稿と関連する冒険学校に関する考察としては、本会会報『ナマステ』第 156 号以降に連載中の筆者の論考を参照。

専門に勉強している大学生でさえ、あまりきちんと理解していないように思う。無論、私自身も生まれる前の話なので、アクチュアルな体験を語ることはできないが、歴史的な事実として示すなら、INCHが出発したのは、(1)高度経済成長が翳りを迎え、(2)学校問題（校内暴力、いじめ、少年凶悪犯罪 etc.）が顕在化し、(3)従来の「詰め込み」的な教育に対する改革が希求された時期であった。

こうした転換点に創設された INCH がいかなる社会的役割を果たしてきたのかに関しては、他の登壇者の論を参照していただければと思う。私が指摘したいのはむしろ、出発点において共有されていたであろう教育改革のパラダイム自体が、2025 年現在においてはすでに自明化しており、今一度、疑い直すべき「常識」になってきたのではないかと、いう点である。そのパラダイムとは、教師による「詰め込み」を批判し子ども自身の「学習」を称揚するという、新教育的な地平⁴である。

戦前の注入主義や、「新幹線授業」などと揶揄された高度経済成長期のような知識・暗記重視の教育への批判は、今日、もはや強調するまでもない言説として浸透している。問題は、こうした言説の浸透が、しばしば「教育」と「学習」を二項的に対立させ、前者を後者に従属させるような事態を招いていること——教育の「学習化」(learnification)⁵——である。そもそも教育学における「学習」(learning) 研究は、20 世紀初頭ごろから科学としての心理学が発達したことで展開されてきた。それは、「学習」の効率的で効果的な方法という成果を生み出してきた一方で、特定の条件下で成立する「学習」の理論に還元することのできない、日常生活の豊かな経験からの学びに対する視座を見落としているという問題を孕んできた⁶。誤解を恐れずに言えば、人間の心や学習を科学的に解明するということは、時としてそれらを数値によって測定できるもの、機械のように操作可能なもの、あるいは薬の投与のような治療的方法によってコントロールできるものとして捉える立場と紙一重なのである。

しかし、教育の現実と多少なりとも向き合ったことのある人であれば、他者を教育するということがいかに思い通りにならないものであるか、実感したことがあるはずだ。この「思い通りにならなさ」は、単に教育者個人の技術の向上とか、科学によって解明された新しい方法論の開発によって汲み尽くされるものではない。それは、いかに研究が進んでもいかに鍛錬を積もうとも、「自分ではない誰か」を教育しようとする限りにおいて抱えざるを得ない根本的な葛藤⁷であり、だからこそ他者に何かを伝えようとする者としての教育者が、永遠に向き合い続けなければならない課題と責任でもある。

⁴ 新教育とは、19 世紀末ごろの欧米に端を発し、日本でも大正新教育や戦後新教育といったかたちで広まってきた教育改革運動であり、「子ども中心主義」と呼ばれる経験重視型の教育実践を行う点に特徴がある。今井康雄は、新教育的な理念が教育言説において自明のものとなっていることを、〈新教育の地平〉と呼んでいる。詳しくは今井 (2004) を参照。

⁵ オランダ出身の教育学者で、2024 年に日本教育学会で講演を行なったことでも知られるガート・ビースタ (Gert Biesta) が指摘した現代教育の傾向。詳しくは Biesta 2006 を参照。

⁶ 1980 年代ごろから、「学習」を脳の機能や行動傾向のみで説明しようとする素朴な還元主義は批判され、個別の文脈や関係、状況を加味した「学び」論が国内外で展開され始めた。しかし、エビデンス主義の繁茂する現代では、こうした関係論的・状況論的「学び」論もまた、「社会性」を一つの変数として数値化するような還元主義的アプローチに帰結している場合も多い。

⁷ 教育哲学において、こうした「思い通りにならなさ」は、「他者論」として論じられている。例えば田中智志は、「教育学者が「教育的意図」「教育的配慮」「教育的指導」といった教育学用語によってかたる教育的な営み」はすべて、〈子どもはコントロールできる〉という「素朴な命題」を前提していると指摘し、「子どもの操作可能性の命題」は「だれかが確かめた命題ではない」として、〈子ども〉が本来操作不能な「他者性」を孕んでいることを論じている (田中 2002)。

子ども自身の「学習」を重視し、「教師」は補助役としての位置に徹するという理念は、1970～80年代当時、「教えること」の権威主義的な側面が生んださまざまな問題を解決してくれる糸口と目されたことは間違いない。しかし、権威主義への批判が浸透した現在、「学習化」は当時とは別の、新しい課題を生じさせている。それは例えば、子どもの「主体的な学習」を重視するという聞こえのよい言説に彩られて、「教えること」に伴う「教える側」の困難や責任が回避されてしまうという問題である。

2-2. 美しい教育言説と現実回避

「学習化」に伴う「教えること」の困難や責任の回避は、翻せば「学ぶ側」としての子どもにそれを転嫁してきたということでもある。日本では、1990年代以降、新自由主義が台頭し、学習の効率化・個人化が経済的成長と密接に結び付けられたことによって、ある種の「自己責任論」が蔓延するようになった。およそ30年にわたって掲げられ続けている「生きる力」は、もはや一人一人の人間性の尊重という意味での個性の重視というよりも、弱肉強食の競争社会において「生き（残）る力」としての個人技の重視に転化しており、それがなければ生きていけない、という脅迫的な論調さえ帯びつつある⁸。

タチが悪いのは、こうした言説のほとんどが、理想主義的で美しい文言に彩られており、容易には批判し得ないものとして価値化されている点である。それは、かつての戦後教育学のように、国家（社会）による教育権の独占が、国民（個人）の自由を奪っているといった、単純な対立軸では把握することができない⁹。グローバル化によって、個人は土着の共同体への帰属意識を失い、守るべき「個人の自由」は、人間性や個の多様性に根差したものというよりも、国家や企業が希求するものと矛盾しない経済成功のための競争の自由へと置き換えられていった。そのなかで人々は、まさにフーコー¹⁰がパノプティコンに喩えた「規律訓練権力」の構造のように、「主体的に」生きることを要請され、自ら主体的に従属化している¹¹。

これらの複雑な課題を一言でまとめるのは難しいが、ここではひとまず、「教育」において「現実」（リアリティ）と向き合うことが喪失されつつある、という今井康雄の指摘（今井 2004:71-94）を拝借したい。一見すると、実社会で役立つ・経済的に成功するための教育は、厳しい「現実」と子どもたちを向き合わせているようにも見える。しかし、そこで目指されているのは、特定の状況や文化に根ざした具体的な能力の獲得ではなく、抽象的で汎用的な「コンピテンシー」であり、知識の「中身」つまり「コ

⁸ 近年の競争主義的教育の問題については、神代健彦『「生存競争」教育への反抗』（2020）などを参照。

⁹ こうした傾向は、本会に関連の深い環境教育においても顕著であるように思う。本来、環境教育は、1950～60年に浮上した公害問題や自然破壊といった国家や大企業による中央集権的な経済至上思考に対し、ローカルな社会の文化と自然を保持することで批判的に応答するという側面を持っていたはずである。しかし、近年ではSDGsという抽象化・普遍化された美しい目標を掲げることに終始し、プラスチックワード化した「持続可能な」という文言を免罪符にして、時には当の自然破壊を正当化する企業のイメージ戦略へと加担している場合さえあるように思う。

¹⁰ フランスの哲学者・人類学者であるミシェル・フーコーは、『監獄の誕生』（1975）のなかで、近代の権力をパノプティコン（一望監視施設）に喩えた。フーコーによれば、中世までの権力が「目に見える」かたちで機能したのに対し、近代の権力は、個人の中に内面化される監視の目として不可視化されて機能する。人間は、抑圧されて権力に従うのではなく、規律訓練されることで自ら主体的に従属化するようになるという。奇しくも、本会と同じ50年前の指摘である。

¹¹ こうした傾向は、木俣美樹男が本座談会の報告において、ブライアン・ヘアとヴァネッサ・ウッズの研究を援用しながら指摘した「自己家畜化」とも通底すると考えられる。詳しくは木俣の報告を参照。

ンテンツ」は、情報化によって容易に入手できる（はず）のものとされている。この「コンテンツからコンピテンシーへ」という潮流が、効率主義的で還元主義的な「学習」と結びついたとき、個々の文化体験や自然体験に含まれている「生きること」の「現実」は、具体的状況から遊離した抽象的な能力を獲得するための「手段」へと解体されてしまう。

呼応するように、子どもたちは、社会における「生きづらさ」という「現実」に向き合わされている。またもタチが悪いことに、現代の教育論では、こうした「生きづらさ」に対し、発達障害の定義の拡大・細分化や、知能検査の導入など、人間の能力を実体化し数値化したうえで、ある種の医療行為の延長としてエンハンスメント的に応答しようとする傾向がある。無論、こうした対応によって状況が改善されること自体を否定するわけではない。しかし、こうした言説が前提とするのは、人間を科学的に理解可能であると捉える機械論的な自然観である。それはともすれば、目の前の子どもの苦しみを、「検査」「測定」によって実体化された数値へと還元してしまうことになりかねない。

ここには、教える側による「現実」回避が生じていると言えよう。それは、本来不安で不確実なものである教育の諸問題が、最新の学習理論やエビデンスに則った教授法によって、あたかも解決可能であるように思い込んでしまう事態を招いている。しかし、他者との「分かり合えなさ」を痛感しながらもなお手を伸ばす勇気、確実に正しい教育方法などわからないにも関わらず、誰かの人生を左右してしまう恐怖に立ち向かう勇気——教育現場で活躍する教師や保護者をはじめ、教育に真摯に向き合う大人たちが行なってきたのは、こうした勇気を持って、自ら「現実」としての子どもと向き合い判断することではなかっただろうか。「現実」との対面を教える側が放棄して、能力の数値化という「万能薬」に頼り切るようになったとき、教育は容易に「洗脳」や「教化」へと転化してしまうように思われる。

3. 冒険学校の射程

さて、こうした現代教育の課題に対して、冒険学校はいかに応答できる／できないのだろうか。自然文化誌研究会のホームページには、キャンプの特色として(1)プログラムの自由選択の拡大、(2)スタッフの充実、(3)講師は地元のひとたち、(4)ローインパクトの4点が挙げられている。このうち、環境への配慮事項である(4)を除く三つは、キャンプの教育理念を象徴している。一見、それは既述の現代教育の思潮・課題に、必ずしも相反するものではない。例えばプログラム選択の自由は、新自由主義的な個人主義と何が違うのだろうか。またスタッフの充実の項には、「子どもたち一人一人の自主性を最大限に尊重」とあるが、ここでの「自主性」はフーコー的な「主体化＝従属化」と異なるのだろうか。

筆者の見立てでは、これらの要素は、現代教育の思潮と表面上の共通性を持ちつつ、それを微妙にずらすような構造を持っている。そしてそれは、前節の最後に指摘した「現実」と向き合うという教育の課題に対し、本会のキャンプが応答する回路を持っていることを示唆していると考えられる。

3-1. 文化伝承の場としての冒険学校

冒険学校は、子ども自身によるプログラム選択の自由を尊重している。『冒険学校のあゆみ』（2015）において、こうした指針は、「自主性」という言葉で示されている。

冒険学校では13年間の歴史の中で、試行錯誤を繰り返し、内容に工夫を凝らしながら活動を継続してきました。その基本的な考え方は子どもたちの自主性を尊重し、行動を促すのではなく、行動を「待

つ」という姿勢にありました。これは十分なプログラムを用意しながらも、選択は子どもに任せることです。極端に言えば、子どもは何も選ばず、森の中で一週間昼寝をして暮らしてもよいということでもありました。この考えは、現在の自然文化誌研究会の環境学習活動にも生きています。

(冒険学校のあゆみ 2015:4)

「主体性」の重視が、ともすれば大人が伝えるべき伝統や知識を示す責任を果たさないままに、「学ぶこと」として子どもにその責任を押し付けることへと繋がりがねないことは、すでに指摘した通りである。注目すべきは、INCHにおける「自主性」は、近年の「主体性」言説において主に称揚される能動的（アクティブ）な活動だけでなく、「森の中で一週間昼寝」するような消極的活動の尊重を含んでいること、またそれに対し、スタッフは単に介入を控えるのではなく、「十分な」——むしろ「過剰」とさえ言える——プログラムを用意したうえで、「待つ」という、積極的だが強制的ではないかたちでの応答が目指されていることである。それは、冒険学校における「自主性」の尊重が、単なる放任主義ではなく、文化の伝承という教育的な責任を果たそうとする営為であることを意味している。

例えば、冒険学校では「やまめの腹かき」や「餅つき」といった、都市部では衰退しつつある伝統的な文化体験のプログラムや、「川遊び」、「星空観察」といった自然体験のプログラムが用意されている。学校教育はもちろん、一般的な野外教育活動では——ちえのわ農学校でさえ——、こうした自然・文化体験は「貴重な経験」として称揚され、全員が参加する時間が設けられている場合が多い。こうした半強制的なプログラムへの参加促進は、「やらず嫌い」の子どもに対して「やってみたら面白かった」と感じさせ、文化伝承へと誘導する利点がある。反面、どれだけ子どもが「主体的に」やりたくなるようプログラムを工夫するとしても、これらを体験させたいという「大人の側の都合」がそこに伏在していることは否定できない。「主体化＝従属化」の問題は、こうした「大人の側の都合」を不可視化したうえで、子どもの側に内面化された「主体性」を称揚する点にある。

INCHの場合も、プログラムに参加するかどうかは子どもの「自由」に任せられている点では共通の構造が指摘できる。ただし、冒険学校における「自由」の許容は、プログラム準備の人的・物的コストが「無駄」になるかもしれないということを折り込んだ上で、それでもなお選択肢としての提示にとどめるという、ある種の自己犠牲的な教育責任の遂行という側面を持っていることに注意が必要である。ここには、現代教育の思潮において称揚される「コンピテンシー」とは対照的に、自分たちが用意したプログラムの中身、すなわち「コンテンツ」としての伝統文化や自然体験の価値・魅力への信頼——自分たちの用意したものの「良さ」に一定の自信を持ち、そしてその「良さ」が誰かには「伝わるはず」だという感覚——があると考えられる¹²。

同時に、その「コンテンツ」への参加・行動を「促す」のではなく「待つ」という姿勢には、伝承された文化の受け取り手である子どもたちへの信頼を看取することができる。「コンテンツ」の「良さ」を信じてそれを手渡しつつも、それをいかに受け取る／取らないかという子どもたちの選択は、それ自

¹² こうしたプログラム内容への信頼に関して、本会の特徴の一つとして、事務局を都市部ではなく実際の活動の現場に起き、会員が村民として生業を営んでいることを指摘することができよう。特にそれは、外部としての都会人がコロニアリズム的に土着の文化を評価・保存するのではなく、実際に生活を営むなかで文化の取舍選択が行われるという「生きた」文化伝承の可能性を示唆していると考えられる。

体として尊重され、時にプログラムの側を修正する契機となる。この意味で、INCH の冒険学校における「自主性」は、体験の成否の責任を「主体性」というかたちで子どもの側の能力に丸投げして、「主体性」を発揮しなかった子どもを自己責任論によって裁く競争主義的な意味での「自由」とは異なる。「待つ」という態度に象徴される「自由」の本質はむしろ、堂々と「これはいいぞ」と指し示したうえで、それが受け入れられないことも事実として受け止めるという、大人の側の責任遂行にこそ看取されるのである。

こうした「自由」を支えているのは、出店形式というシステム面だけではない。むしろ、冒険学校のもう一つの特徴である、(2)スタッフの充実こそ、その核心があるように思われる。言うまでもなく、スタッフの多様さ——年齢、専門性、キャリアなど——によって、多様なプログラムを用意すること自体が可能となっている。だがそれ以上に、安全管理に関する基準を除いて、参加者への対応の仕方やプログラムへの参加の仕方自体をそれぞれのスタッフの多様なやり方・考え方に任せることによって、先述したプログラム参加に対する姿勢の「自由さ」そのものを体現するという点にこそ、数的・質的なスタッフの充実の意義がある。「参加しないスタッフもいる」という事実、あるいは「あっちのスタッフはダメって言ったけど、こっちのスタッフはやってみようと言った」というような、学校教育では通常忌避されるような意見の相違が許容されているという事実は、特定のプログラムへの同調圧力的な参加誘導や価値観の押し付けを回避することへとつながっている。それは、規格化・同質化された学校教育で形式的に導入されるような多様性とは異なる、さまざまな「やりかた」(生き方)が共存するという「生の現実」の提示と言い換えることもできよう。

3-2. 生成的な「遊び」の場としての冒険学校

もう一つ、こうした文化遺産を支えるものとして、冒険学校における「遊び」の役割を指摘しておきたい。先に挙げたいくつかのプログラムのうち、特に「川遊び」や「火おこし」といった体験において多く観察される傾向として、遊びの「繰り返し」を指摘することができる。大人の目線からすれば「同じこと」を、子どもたちは何度も繰り返して遊ぶ。一般的な教育論からすれば、こうした反復は、当該の活動の精度やそれに係る能力の向上に寄与するものではあるものの、一定の回数を超えて反復し続ければ、徐々にそうした教育的効果は減衰する。言うなれば、ずっと同じことをしていても、ある程度やったらそこから先は「無駄」である。しかし、こうした一見すると「無駄」でしかない反復には、教育学者の矢野智司が「生成」と呼ぶところの、教育の異なる一側面を看取することができる。

矢野によれば、近代以降の「従来の教育学」で追求されてきたのは、「動物性を否定して人間化を達成する」という「発達としての教育」である(矢野 2013:42)。「発達としての教育」は、主として労働をモデルとするような有用性の原理、すなわち目的のために何かを手段として用いるという理性主義を根本原理としている。それは、「未来の理想的な状態を設定し、そこから現在の状態を否定し、その目的に向けて現在の状態にはたらきかけ、状態を変化させる」というある種の「企て」(矢野 2013:41)と呼ぶことができる。これに対し、矢野は「有用な生の在り方を否定して、至高性を回復する体験」を「生成としての教育」と位置付けている(矢野 2013:40)。

私たちはこうして、深く体験することによって、自分をはるかに超えた生命と出会い、有用性の秩序を作る社会的な人間関係とは別のところで、自己自身を価値あるものと感じることができるようにな

る。未来のためではなく、この現在に生きていることがどのようなことであるかを、深く感じるようになる。このような体験による教育を、「生成としての教育」と呼ぶことにしよう。

(矢野 2008:125-6)

矢野が論じているのは、有用性すなわち「役に立つこと」によって組み尽くされない「生」の次元と、それに関わる教育の射程である。矢野はこうした「生成」の次元を、ジョルジュ・バタイユ (Georges A. M. V. Bataille, 1897-1962) や作田啓一 (1922-2016) などを援用しながら、「溶解体験」と呼ばれる自己と世界の境界線が曖昧になるような体験に見出している。通常、人間は自己と世界を分節化することによって、身の回りのものを客観的に捉え、有用性の原理に基づいて生きることができる。これに対し、まさに冒険学校においてしばしば見られるような子どもの「遊び」において看取されるのは、「自分が遊んでいるというより、遊び自体が生き物のように自己展開していく」ような事態 (矢野 2008:200) である。このようなたぐいの「遊び」は、「労働のように何か有用な目的に向けての行為ではなく、遊び自体を目的とする蕩尽のひとつ」であり、こうした「遊びに深く没頭するとき、遊んでいるという意識は抜け落ち、自己と世界の境界は溶け、溶解体験を生み出す」(矢野 2013:107)。当の子どもにとって、こうした「遊び」の繰り返しは単なる反復ではなく、一回一回が生の実感に満ちた体験であると考えられる。

冒険学校において、有用性の原理から解放され、「遊び」そのものが自律的に運動し始めるまでに没入できるような体験が可能となっているとすれば、その要因はどこにあるだろうか。ひとつは、子どもたちが出会う文化や自然そのものが持つ魅力や、野外活動という非日常性にあるだろう。しかし、本稿においてより強調したいのは、先述した冒険学校の運営方針が、こうした「生成」としての「遊び」を可能にする大きな要因であることである。子どもたちは冒険学校のなかで、さまざまな「遊び」を展開させていく。それは必ずしも事前に計画されたプログラムではなく、その場その場で偶発的に生じてくる。大人の用意したプログラムは、ともすればそうした「遊び」の自律的運動を断絶させ、目的 (文化伝承) と手段 (プログラム参加) という有用性の原理のもとに活動の意義を還元しかねない。なればこそ、参加を「待つ」という姿勢は、子どもたちの「遊び」自体の有機的な展開との自然な連続性を尊重するという意味で重要となる。子どもたちは「遊び」のなかで、普段の学校生活や家庭での生活を規定している有用性から解放され、自らの「生」を実感する。こうした実感が、大人によって用意されたプログラムと繋がる瞬間——この接続は「促す」ことによって狙って引き起こすことはできない——を、スタッフは「待つ」のである。こうした「遊び」と地続きであるからこそ、冒険学校における自然や文化は、SDGs のような「生」と乖離した「お題目」としてではなく、今まさに生きている「現実」として、子どもたちへと手渡されるのではないだろうか。

4. おわりに：次の10年に向けて

本稿では、現代教育の思潮における諸課題を、「生きる」ということの「現実」の喪失として指摘したうえで、冒険学校がそれに対し応答しうる射程を、自由選択を前提としたプログラムによる文化伝承と、有用性に還元されない「遊び」の構造に見出した。これらの射程はいずれも、現代教育において主流となっている「コンピテンシーベース」の学習論のように、目先の社会で「生き残る」ために役に立つ「資質・能力」の育成とは異なるところに、冒険学校の核心があることを示唆している。それは、個

人にとっては人間形成に、社会にとっては文化の多様性の保持と再創造に向けた、中・長期的な「教育」の一端を担うことである。

他方で、こうした活動に課題がないわけではない。とりわけ、冒険学校を含む自然文化誌研究会が発してから 50 年という歳月が経ったことは、こうした活動を支える現代的諸条件の変化も意味している。ここでは差し当たり三点ほど指摘しておきたい。

一つは、農山村そのものの持続可能性の問題である。「(3)講師は地元の人たち」という冒険学校の特色を支える「地元」そのものが、人工的な過疎化と文化の観光資源化という現実と直面している。本座談会の第二部の報告で示されたエコミュージアムの構想は、こうした問題への応答という射程を含んだものであったと理解しているが、実際の展開には課題が多く存在することも、座談会のなかでは浮き彫りとなっていたように思う。

二つ目は、本稿で論じたような教育的意義を冒険学校が持っているとしても、それを提供できる対象は限られているという問題である。本会の活動は実費として参加費を徴収することで成立している。このことは、教育格差の拡大する現代社会においては重たい現実であると言わざるを得ない。ただし、この点に関しては、本会に参画しているスタッフの一部——それは、本稿が読者として想定している層でもある——が、教員や教員志望者であることに、一定の希望を見出すことはできるだろう。座談会において本会代表理事の中込卓男がその実践を報告していたように、冒険学校の成果の一部は、関わってきたスタッフたちを通して、公教育の現場や家庭の教育現場へと還元・拡張されていると考えられる。

最後に、こうした冒険学校の成果の意味づけに関わる課題として、環境教育・教育哲学のディシプリンの問題を指摘しておきたい。本会の出発点が、木俣美樹男をはじめとする創設メンバーの思想や研究にあることは確かだが、その実際的成果は単一の理念から演繹的に説明できるものというよりも、多様な会員たちによる多様な実践の蓄積を見渡すことで、ようやくその輪郭が見えてくるようなものであったことは、本座談会における報告の多様から明らかである。ただし、それは翻せば、50 年という歴史のなかで活動が拡大と縮小を繰り返し、複線化していくことによって、共有すべき理念が見えにくくなっていくことも示唆している。それはともすれば、本稿で指摘したような暗き側面を孕んだ現代教育の思潮へと、本会の活動が容易に転倒・埋没しうることも意味している。事実、学問領域としての環境教育学の一部は、社会や教育の実情に対する批判力を喪失し、迎合しつつあるように思われる。教育哲学を専門とする筆者としては、こうした批判力を持ったものとして、他の活動とは異なる本会の独自性や意義を、学術的な観点からいかに示すことができるのかが、今後の課題である。

[引用・参考文献]

Biesta, J. J. Gert, 2006, *Beyond Learning: Democratic Education for a Human Future*, Routledge.

今井康雄, 2004, 『メディアの教育学—「教育」の再定義のために』 東京大学出版会.

神代健彦, 2020, 『「生存競争」教育への反抗』 集英社.

自然文化誌研究会, 2015, 『冒険学校のあゆみ』

<http://www.npo-inch.ppmusee.org/src/18657/Ayumi-2025.pdf>

田中智志, 2002, 『他者の喪失から感受へ：近代の教育装置を超えて』 勁草書房.

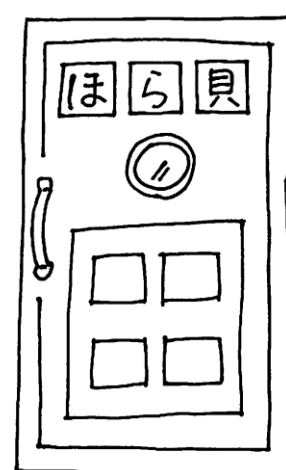
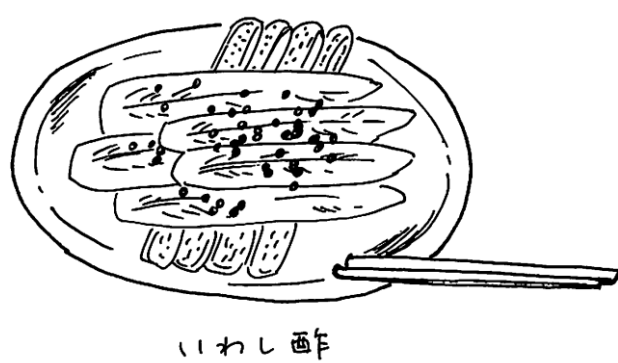
矢野智司, 2008, 『贈与と交換の教育学：漱石、賢治と純粋贈与のレッスン』 東京大学出版会.

——, 2013, 『自己変容という物語：生成・贈与・教育』 金子書房.



ほら貝の記憶

(2008年に閉店したらしい)



sumi

第5章 特別寄稿



感謝の気持ちに添えて

横山 緑（自然文化誌研究会理事）

自然文化誌研究会創立50周年おめでとうございます。

今回、記念誌に原稿を書くということで、自分の足跡を振り返ってみました。

今までの人生で、いくつか大きな出会いがありましたが、その一つが、自然文化誌研究会との出会いです。当時は、前身の冒険探検部でした。私は、学芸大学卒業といっても、在学中は、A類保健体育科で陸上競技部在籍、冒険探検部があったことも知りませんでした。ただ、自然が好きで、卒論のテーマは、「野外活動における環境教育」でした。そんな私が、教員になって2年目の春、一人でネパールに出かけました。その帰り、タイのバンコクの空港で成田行きの飛行機を待っているときに会ったのが、冒探部の塚原東吾君でした。同じエジプト航空の搭乗手続きをしていた時に、オーバーブッキングで乗れないかもしれないというアクシデントが起きて、最初に話をしたのが彼だったのです。幸い予定通りに飛行機には乗れましたが、待っている時間にたくさん話をしました。学芸大学の冒険探検部のことや、これから環境教育の学会を立ち上げる話や、木俣先生の研究室のことなどを聞くうちに、これは面白そうと思ったのが始まりです。もし、あのとき、塚原君に会わなかったら、自然文化誌研究会との出会いはなかったと思います。

このような形で、自然文化誌研究会にどっぷりつかっていく私でしたが、メンバーになったことで、また、いろいろな出会いがありました。



玉ねぎ染め

○冒険学校とのかかわり

冒険学校の立ち上げから、スタッフとして参加してきました。五日市青少年村での冒険学校は手探りの時期といってもよいかもしれません。近くの河原で、テントを張ってキャンプをしたところ、真夜中に大雨に降られて、荷物の入っているテントごと持ち上げて、避難したことが忘れられない思い出です。

秩父の大滝村での冒険学校はたくさんの思い出があります。当時の冒険学校は、エコミュージアム作りと併行して、たくさんのプログラムがありました。村コースでは、ニッチツ鉱山での鉄鉱石探し、砂金採り、鍾乳洞探検、郷土食作り、中津芋掘り、炭焼き、豆腐作り、草花遊び、藍染めなど。川コースは、テントを張ってのサバイバルプログラム。山コースでは、山小屋泊の甲武信岳登山がありました。

そして、現在のこすげ冒険学校です。私は最近スタッフに復帰。微力ですが、バームクーヘンや玉ねぎ染めなどのプログラムを担当しています。これからも、小菅村でできるプログラムに携わっていけたらと思っています。

○登山道整備とのかかわり

野人講座として、大滝村で、和太鼓の演奏会、縄文土器作りと野焼き体験講座。「気」の勉強会、登山道整備などに関わりました。単発の講座が多かった中で、登山道整備は15年ほど続けました。冒険学校でお世話になっていた甲武信小屋のお手伝いということで、毎年、7月に山小屋に泊まりながらの二泊三日の講座でした。私は、特に登山の趣味はなかったのですが、小屋の御主人の山中徳治さんと一緒に、カマやナタを持って草刈りや枝打ちをしました。あるときは登山道にかかる橋をかけ替えたこともありました。山登りが好きになったのは、この登山道整備のおかげです。



バームクーヘン作り

○素敵な仲間とのかかわり

人生も後半戦、まだまだやりたいことはたくさんあります。いつまでも、挑戦する気持ちは忘れないで進んでいきたいと思います。

最後になりましたが、冒探部から自然文化誌研究会まで、たくさんの仲間と出会うことができました。素敵な仲間に感謝です。ありがとう！！



INCH と私 今までとこれから

菱井優介（自然文化誌研究会理事）

50 年続く「変な人の集まり」がある。

自然文化誌研究会（INCH）を私なりに表現するならば、深い敬意と愛着を込めて「変な人の集まり」となります。INCH を通じて出会った人たちは、個性もスキルも多様な方々ばかり。多くの刺激を受け、野外教育、環境教育の実践の場を与えていただき、約 25 年が経ちました。私自身、その「変な人たち」の背中を追い、その域に達したいと、関わり続けているように思います。事務局を離れてからは国内各地を回る機会に恵まれ、数多くの団体や地域と関わってきましたが、INCH ほど不思議な団体は、他にありません。目まぐるしく変化する社会の中で、一般企業でも 10 年続く会社は全体の 1 割程度と言われています。団体として 50 年もの間、活動を継続していること自体が、本当に素晴らしいことです。

今まで INCH との出会い

環境教育という言葉に惹かれて学芸大学に入学し、自主ゼミで出会った Q ちゃん（佐川）に「夏休み、子どもたちとキャンプに行かないか」と誘われました。なんだか怪しそうで断りました（それが秩父での最後の冒険学校でした）。農園で働いていた小川ヤスさんと出会ったのもその頃です。「こんな適当な生き方の大人がいていいのか」と衝撃を受けましたが、その後、一緒に雪中キャンプをやったり、美苗さんの穴掘りバイト（樹木生態調査）に駆り出されたり、小川家の引っ越し手伝ったりと関係は続いていきました。最初は距離を置こうとした団体に、いつの間にか深く関わっていたのです。

今まで INCH での活動

2001 年、原子先生が「パン作り」企画をするので手伝いに来ないかと誘われ、14 期の冒険学校デイクャンプで INCH デビューしました。翌年の GW に奥多摩で実施されたキャンプに参加したのが本格的なスタートです。プログラムを強制せず、参加者の「やりたいこと」が出てくるまで「待ち」、それをとことんまでやらせる姿勢は、私にとって衝撃的でした。たっくん（埴拓真）に角材を斜めに切ってほしいとせがまれ夜中までノコギリをひいたこと、多摩川の河川敷で寝袋をしいて寝たこと、その翌朝、ハズムが川に投げた石が頭に当たって目覚めたこと、どれも忘れられない思い出です。

木俣先生に声をかけていただき農学校の開始とともに俊ちゃんと出会い、クロ、あべちゃんとも親交が深まり、INCH のあらゆる事業に顔を出すようになり、自然な流れで運営委員となり事務局を手伝うようになったように思います。

小菅での冒険学校の思い出

たくさんあるエピソードから一つだけ紹介します。火おこし初挑戦の F ちゃん。「キャンプ終わるまでに、火おこしをマスターして、ドラム缶風呂を沸かしてほしい」とだけ伝え見守ることにしました。F ちゃんは自ら試行錯誤して、年下の D ちゃんに教えを請い、枝木を拾いマッチを擦り続けました。2 日後「ひっしー、おふろわいたよー」の声と得意げな顔は今でも忘れられません。長期の冒険学校には「遊び」ととことん向き合える時間があり、「教える」では得ることのできない達成感を演出できた

のだと思っています。一人ひとりと向き合い的確な「一言」で背中を押せた経験は私にとって自信につながりました。

雪中キャンプ IN みなかみ

三菱 UFJ 環境財団の「水源の森」で雪中体験活動をサポートしてほしいということで、ヤスと主担当として 2 泊 3 日の雪中キャンプ企画運営にあたりました。積雪 2m、-20 度近いの森の中で過ごした日々は印象深く、得るものが多かったです。下見で遭難しかけたり、ドラム缶風呂から雪にダイブしたり、地元のクルミみそがとにかく美味しかったり。結論として、私は雪山に行くのは好きですが、雪国で暮らすのは無理だと痛感しました。

事務局員、小菅村での日々

事務局で 3 年、小菅村で 2 年。楽しさと後悔があります。事務局としての私の主なミッションは環境教育中堅指導者養成を進め、ELF を普及することでした。広瀬(泉)さんと出会い、小金井市の公民館で何度か講座を企画し、秩父で ELF 研修を実施しました。しかしなかなか大きな成果につなげられず、自分の未熟さ不甲斐なさを痛感しています。

村での生活は、数日間のキャンプでは味わえない四季の移り変わり、自然の美しさを感じさせてくれました。村の人々の交流で多くのことを学びました。源流祭りで山伏役を仰せつかり、村民として迎えてもらえた実感。当時の方々と今でも交流できていることは、本当に嬉しいことです。今思えば、もっとできることがあったはずだと、そんな後悔が残っています。

事務局を離れてから

INCH での活動は、タイ環境学習キャンプや沖縄、アイヌの治造さん、野人講座とまだまだ書き出し切れない日々があります。それらが今の私の基礎となっていることは間違いありません。私自身、今もなお野外活動、環境教育の実践に携わっていますが、その根幹には ELF 環境学習の考え方が流れていて、フィールドである農山村の活かし方、地域との交流の仕方も小菅村と INCH の経験が活かしています。



INCH と私のこれから

世代交代が進む INCH。若い力も加わり、これからも小菅村での活動は続いていくでしょう。

私自身、ライフワークとして、子供たちの成長を応援する体験の場を作り続けたいと考えていますが、そこに関わる人の育成の重要性を強く感じています。子どものみならず、そこに関わる全ての人の成長や学びに寄与できる「場」を広げていきたい。そのための ELF であり、冒険学校の質を上げるため尽力したいと考えています。

今回、50 周年記念誌創刊にあたり、INCH に関わった四半世紀を私なりにふりかえる機会をいただきました。INCH を通じて関わったすべての方への感謝と敬意をこめて。ありがとうございました。

2025 年 8 月末日 菱井優介

自然文化誌研究会、恐るべし。

西村 俊（自然文化誌研究会理事）

自然文化誌研究会との繋がりを振り返ってみると、東京学芸大学での日常をきっかけにゆっくりと着実に自分に浸透し、いつの間にか自分の成長過程に深く関与してきた存在だったのだなぁと驚嘆してしまう。自然文化誌研究会、恐るべし。創立 50 周年に合わせて、そんな「inch と私」の繋がりを振り返っておこうと思う。

中学～高校時代に具体的にになりたい職業について深くは考えてこなかった。理系か文系かと言われれば明らかに理系で、理科や数学は好きだった。高校の進路相談で大学選びと職業選択の関連性の強さに驚き切羽詰まりながら、中高の理科の先生になるという想いを漠然と抱いたように思う。教員になるかどうかはまだ分からないけれども教員免許が無ければ成りたい時になれない！ということで、近郊の教員養成大学である東京学芸大学を志望したのだった。高校生活を謳歌きった後、1 年間の浪人生活を経て、2002 年に東京学芸大学教育学部 B 類理科（BO2）に入学することになった。

「inch と私」を語る上では「木俣先生と私」から振り返る必要がある。大学 1 年の共通科目に『学校園の活用と計画（担当教員：木俣美樹）』という講義があった。第一回目のガイダンスに現れたのが、木俣美樹男先生、その人である。その第一声は、「“木俣美樹”と書いてあったのに髭を生やしたおじさんが来て皆さんビックリしたでしょう」だっただろうか。当時の学芸大のシラバスでは、教員名が最大 4 文字までしか反映されずに”男”が抜け落ちてしまう、という話だったように思う。その講義の中で「今度、子どもを対象とした公開講座を開講します。興味がある方は、スタッフ会議を行いますのでぜひ参加して下さい。」というアナウンスがあった。それをきっかけにスタッフ会議に恐る恐る顔を出したのだった。木俣先生（カツンボ）、原子先生（アトム）、黒澤さん、そして学芸大の学部生 25 名（A 理、B 理、F 環、F 自、音楽、A 学校教育、A 家庭科、とかなり多彩なメンバー）が集まった（2002 年 5 月 10 日当時）。ここでその後の苦楽を共にする事務局の黒さん、現理事のひっしーとも初顔合わせしたことになる。そして、5/19（日）から東京学芸大学環境教育実践施設農園（彩色園）を舞台に第 1 期「平成 14 年度東京学芸大学公開講座 ぬくい少年少女農学校」（参加者 17 名）が開講したのだった（※1）。テーマは「種から胃袋まで」。年 8 回（夏の宿泊を含む）の活動準備をする中で、当時、農園勤務だった黒さんとの交流も増えて行った。でもまだ「自然文化誌研究会（inch）」は、農学校の当日に集まってくれる大人のスタッフの皆様方という感じの認識と緩い繋がりだったと思う。今思えば、浪人生活 1 年が無ければこの縁も違った形になっていたと思うと不思議である。



写真 1：最後のクリキャン(2002 年冬)



写真 2：浜仲間の会、本会もお世話になっている田中惣次さんを交えて囲炉裏端で(2005 年夏)

自然文化誌研究会のキャンプに初めて参加したのは、2002 年冬のクリスマスキャンプ（檜原村、フォレストイングコテージ）（写真 1）。間伐をして、薪を皆で割って、河原で石を拾ったり氷柱を見つけたり、恐竜の卵を暖炉で焼いて、夜にはサンタクロースも登場した。今は「まふゆのキャンプ」というハード系のキャンプに様変わりしているが、クリキャンはかなり緩めの年末イベントだった。ところがこのクリキャンへの参加が、自分自身の新たな興味や好奇心を刺激する大きなきっかけとなったのだった。林業家 田中惣次さんの世界観に触れ、日本の山村への意識、山林の現状や輸入木材の状況（ひいては資源・エネルギーの現状）に興味を持つようになった。inch はこのクリキャンを最後に檜原村での活動を終えることになったが、個人的に間伐や山仕事にもっと触れる機会を持ちたい！と「浜仲間の会（代表：南淳人さん）」に参加し（※2）、惣次さんの山だけでなく檜原村・五日市を中心とする個人所有の山林の手入れを手伝うことになる。間伐だけでなく下草刈り、根回し、枝打ちなどを体験しながら山の手入れに関する道具や技能の習得、作業後の地権者の方々との何気ない雑談、更にメンバーと時には泊りで囲炉裏端で農山村の現状や未来を憂いながらも楽しく談笑しながら（写真 2）、山村に暮らす人々の息遣いや感性（世界観）に触れて過ごす機会を得ていた。講義やアルバイト、研究に追われるようになり、次第に参加機会を確保できなくなって行ってしまったが、この「浜仲間の会」での経験はとても充実したものだった。そのきっかけはクリスマスキャンプなのだから、どこに繋がりがあるのかは分からないものである。自然文化誌研究会、恐るべし。

「ぬくい少年少女農学校」の第 2 期（2003 年、学部 2 年）、第 3 期（2004 年、学部 3 年）と活動を続ける中で、小菅村への宿泊体験をプログラムに入れるなど inch との連携も増えて行くことになる。個人としても 2003 年度はまふゆのキャンプ（小菅村、玉川キャンプ村）、2004 年度は野草の天ぷら会（4 月）、新緑キャンプ（5 月）、野生のキャンプ（8 月）、まふゆのキャンプ（12 月）と、密に関わるようになっていった。「ぬくい少年少女農学校」の参加をきっかけに、inch の活動にも参加する児童や携わる学芸大スタッフも出るようになっていった。2003 年 10 月にはスタッフ何人かでレンタカー（ハイエース）で秩父の中津川（民宿中津屋、以前の inch 冒険学校の拠点）に訪問したこともあった（写真 3）。ぬくい少年少女農学校は、現役の学芸大生が中心となって企画・運営をすることで、ナチュラリストを養成する活動を介した実践からの学びの場となっていたが、それを見守り、不足している部分に助言や支援の働きかけを求めることができる（頼れる）先が inch のスタッフだった。何よりも木俣先生の「待つ」姿勢には感服である。自然文化誌研究会、恐るべし。

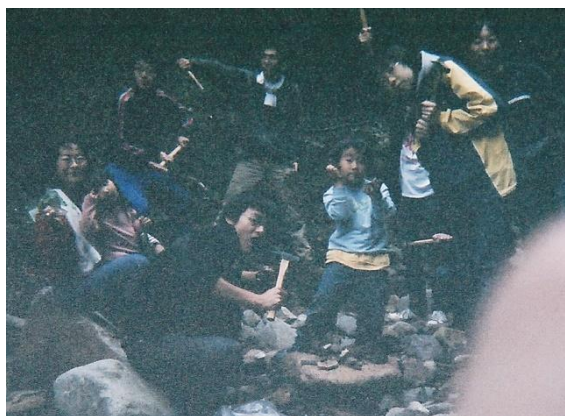


写真 3：中津屋さんを訪問（2003 年秋、中津川の河原



写真 4：小菅交流会「NPO 法人自然文化誌研究会 ご挨拶」（2004 年夏、小菅村大久保の拠点）

丁度この頃は、自然文化誌研究会の活動・事務局の拠点が本格的に小菅村へ移り変わる時期（2004年～）でもあり（写真4）、その後に学芸大の現代GP「多摩川エコモーション（2005年10月～2009年3月）」が始まったりと、inch・学芸大共に小菅村での活動展開も急激に増えて行った。元々、井村礼恵さんが多摩川源流研究所の研究員として勤務していた繋がりや、学芸大の生活科などの実習でも小菅村が使われていたが、現代GPの期間はより多くの協働イベントや課外活動が学芸大生を交えて行われていた（植物と人々の博物館、雑穀展、糸づくり体験ワークショップ、小菅の名人、雑穀発泡酒 Sobibo・ピーボの醸造など）。振り返れば、村の中に入って散策をしながら交流し、村の人からお祭り飾りや伝統食の作り方を教わったり、なかなかできない経験をしていた大学生時代だったように思う。この活動にも日常的にinchの事務局（黒さん）を村内に構えていたことは大きい意義になっていたし、言うまでもなく小菅村での井村礼恵さん（あべちゃん）の人望と人脈も凄まじく豊かだった。個人的にinchの小菅村での活動の中で、2003年のまふゆのキャンプでは鶏、2007年にはウサギ（写真5）を絞めて捌いたことは、振り返ってみてもかなり強めのinchらしい体験だったと思う（人に話すと驚かれる）。中山間地の文化や風土に直接触れる実体験の反復は、1つ1つの実践の積み重ねによる技能鍛錬にまでは至らなかったけれども、自分の中の世界観には大きく変化をもたらしたように思う。そして、それはinchの支えがあってこそだった。自然文化誌研究会、恐るべし。

2004年の夏には中国・内モンゴル自治区への学術探検にも参加している。自分自身の初海外渡航。当時、内モンゴル自治区から木俣研究室に留学中だった学生さんが、地元の砂漠化調査を研究テーマにしており、その現地調査に同行させて頂いた形だった。私を含めて学大生3人と木俣先生の4人メンバー。当時は、自然文化誌研究会の学術探検の歴史を知ることも無かったが、創立50周年記念座談会（2025年6月21日zoom）に参加して、あの時の内モンゴル自治区への調査もinchの学術探検の流れの一端だったのか、と気づかされた。自然文化誌研究会、恐るべし。

2011年の夏にはタイ環境学習キャンプにも参加し、タイとの深い交流の絆にも驚かされた。国内だけでなく海外でも当たり前のように日常に溶け込める。その場に参加者が行くことで知る・見る・感じる・触れるを自然とアシストしてしまう。こういった場の提供の力は、私の人生にも大きく影響を与えてきたのだった。自然文化誌研究会、恐るべし。

「inchと私」を振り返ってみると、いつの間にか自然文化誌研究会の活動に誘われて、魅了されて、そこから新たな自分の考え方や判断基準が創出されてきたように思う。学芸大学の修士課程修了後は、石川県での博士課程（および教員生活、その後の子育て）に移ったものの、石川県でも山村（白山ろく旧5村）を中心とした中山間地域振興についてアンテナを張り、議論できるメンバーと出会い活動を共にするようになった（※3）。白峰地区の焼き畑体験に参加したり、雑穀のホームガーデン調査を行ったり、鳥獣害の被害に触れて自分でも狩猟免許を取得してみたり（8年間標的射撃しかしなかったけれども）。毎年、手植えの田植え・稲刈り（富山県南砺市）への参加も時間が許す限り参加するようにしている。住処と活動の場所が変わっても、農山村への想いをきっかけに新たなメンバーと集い、農山村文化と関わる意識が自然と身に着いていた。専門分野の触媒化学だけの探求心では、ここまで広く環境や資源エネルギーの循環や持続可能性に目を向けることは無かっただろうと思う。自然文化誌研究会、恐るべし。

自然文化誌研究会の組織論はこれまでに何度も「不思議」と称されてきたと思う。組織としては緩く繋がりながら絆と信頼関係はとても強い。表立って活動を動かしていない場合でも、その活動を行う上での理念や基盤形成には自然文化誌研究会の積み重ねが活かされている。「自然文化誌研究会（INCH）」という組織が全く無かったとしたら、自分の興味・関心はここまで広がってこなかったのではないかなと思うし、inchに関わるそれぞれの皆さんの活動も違ったものになっていたのではないだろうか。表立った組織というよりも、ホームのような安心感。これも立派な

組織の形なのだろう。創立 50 周年を迎えて、自分が知らなかった冒険探検の歴史や創成期のメンバーの想いにも触れる機会を得た。2002 年の初顔合わせから通算したら私も 23 年間余、inch と共に歩んできたことになる。今年で 43 歳、その半分余が自然文化誌研究会との歩みなのだから、びっくりである。この 50 年の歩みを次の 50 年へ。新しい自然文化誌研究会の歩みが始まっている。「自然文化誌研究会、恐るべし」を次に繋いでいきたい。

※1「ぬくい少年少女農学校」の活動、その後のちえのわ農学校については

民族植物学ノート第 6 号（2013）『彩色園における農学校の始まり—ぬくい少年少女農学校』、

民族植物学ノート第 16 号（2023）『ちえのわ農学校小史』

に概要を記載しています。

※2「浜仲間の会」の活動については

民族植物学ノート第 5 号（2012）『地域の再建を担う非地域住人による市民活動』

に概要を記載しています。

※3 石川県での活動については

民族植物学ノート第 5 号（2012）『持続可能性を指向した中山間地域の活性化』

環境教育学研究第 23 号（2014）『中山間地域のホームガーデンと地域活性化策から捉える地域形成の変化』

民族植物学ノート第 10 号（2017）『里山資源の活用に向けた伝統的・科学的知恵体系の変化と展望』

民族植物学ノート第 12 号（2019）『白山ろくボタン鍋プロジェクト構想 —発案から 10 年—』

民族植物学ノート第 13 号（2020）『パーソナルツーリズムをターゲットとした地域資源の再構成』

民族植物学ノート第 14 号（2021）『コロナ禍を起点とする身近な生活におけるデジタルトランスフォーメーションとデジタル化による新しいネットワーク形成への期待』

などに概要を記載しています。

リ 梨 日 日 新 聞 2007 年（平成 19 年）2 月 18 日 日曜日



小菅村の伝統文化継承を
目的に活動している NPO
法人「自然文化誌研究会」
（中込卓男代表理事）は十
七日、三十年ほど前まで村
内に伝わっていた伝統行事
食「ウサギの刺し身」を再
現した。

研究会によると、ウサギ
はモノがなかった時代に貴
重なタンパク源とされ、刺
し身は主に結婚式のときに
振る舞われる習慣があった

伝統のウサギ料理味わう

小菅の習慣を再現 自然文化誌研究会

この日は、東京や村内か
ら学生や教員ら十五人が参
加。家畜として飼われてい
たウサギ二羽を地元猟友会
の青柳一男さん（七四）の指
導で調理した。一口サイズ
に切った豆腐の上に切り身
を乗せ、皿に散りばめるよ
うに盛り付け。参加者は昔
から伝わる結婚式の様子を
聞きながら村の伝統食を味
わった。

同村の守屋アキ子さん
（七三）は「若いころは周囲の
山に野ウサギがたくさんい
た。当時、村で刺し身と言
えば魚ではなく、ウサギの
ことだった」と言う。

ウサギの刺し身はくさみ
もなくさっぱりとしてい
て、千葉県の大学生鈴木美
也子さん（二一）は「小菅村の
文化や昔の伝統を学ぶこと
ができ、貴重な経験になっ
た」と話していた。

ウサギの刺し身を配る参加者
＝小菅村

写真 5：伝統のウサギ料理を再現、うさぎを捌く（2007）

小さな冒険からはじまること

井上尚子（自然文化誌研究会運営委員・冒険学校参加者出身）

子どもの頃、とにかく汚れることが嫌いだった。

濡れた水着に着替えること、靴が泥だらけになること、砂浜で足に砂がつくこと――どれも避けたいことばかりだった。

そんな私が 12 歳のとき、初めて一週間の冒険学校「山コース」に参加した。冒険学校には、季節や地域ごとにさまざまなプログラムがあり、「山コース」はその中でも山を舞台とした本格的な登山・野外活動の企画だ。重い荷物を背負い、慣れない山道を歩き、高山病にもなって、美しい景色よりも「帰ったら何を食べよう？」と考えていた記憶がある。

その後も、他のプログラムへの参加が続いた。その一つが、中津川村でのキャンプだ。このプログラムでは、キャンプ場での生活を拠点に、地域の文化や人々と触れ合う。私は、村の民宿「中津屋」に入り浸り、みどばあ、進ちゃん、みっちーといった温かい人たちと、中津芋の植え付けや郷土料理・田楽芋づくり、ずり揚げうどんなどを楽しんだ。田舎の帰省先を持たない私にとって、彼らは親戚のような存在で、キャンプのない時期にも泊まりに行くほどだった。

工作や手仕事が好きだった私は、織物や染め物に詳しいスタッフの美穂さんと編み物を楽しみ、普段はあまり接する機会のない年代の人たちとの交流を満喫した。

一方で、プログラムに組み込まれている川遊びや山登り、ナイトハイクにも参加し、少しずつ野外活動の面白さを知っていった。

中でも忘れられないのは「野生キャンプ」だ。生活そのものがハードで、サバイバル要素が強いこの企画では、テント設営場所を誤れば思わぬ事態が起こる。川が増水して夜中に豪雨の中テントを移動し再設営したり、テント内の着替えが水没して全滅したこともあった。当時の私にとって「着替える服が一枚もない」という状況は大きな衝撃で、それ以来「着替えは小分けにしてビニール袋に入れる」ことを徹底している。

過酷なキャンプに参加し続けた理由は自分でもよく分からなかった。

村での穏やかな時間や仲間との関わりの中で、「まあ、どうにかなるだろう」という図太い心が育まれ、小さな工夫で困難を乗り越えられるようになっていった。その経験から、不思議な安心感が生まれ、「汚い」「面倒くさい」という感覚は次第に気にならなくなっていった。

キャンプでは大学生スタッフと夜遅くまで語り合い、彼らの旅や挑戦の話を聞くうちに、私の中で「冒険」という言葉が自然の中だけでなく、まだ見ぬ世界に一步踏み出すこと全般を意味するようになっていった。

テントを張る場所や道具の工夫ひとつで状況が変わるキャンプの経験は、「知らない環境でも何とかできる」という感覚を育ててくれた。それはそのまま、海外や異文化への興味、そして実際に行動するための後押しになったのだと思う。

大学生になってからは、その延長線上で海外協力隊で活動する先輩を訪ねてミャンマーに行ったり、青春 18 きっぷで下関から釜山へ渡ったり（計算ミスで下関で野宿する羽目にもなった）、美術を学ぶために 6 年間イタリアに留学し、中国・蘇州で 3 年間暮らした。現在は台湾に在住し、毎年夏にはスタッフとして再び冒険学校に参加している。

いま、二人の子どもを育てながら、休暇にはテーマパークや美術館、企画展など、都会のきれいな場所へも出かける。それらは楽しくて、想像力をかき立ててくれる。でも、どこか物足りない。海や山、自然に触れると思いつき遊び回る。そして、心が落ち着く。

息子にとっても、年に一度の冒険学校は、何より楽しみにしているイベントだ。キャンプに来ている子どもたちを見ていると、本当に生き生きしている。テーマパークでは、あんな顔はなかなか見られない。

「着替えを小分けにしてビニール袋に入れる」——この小さな知恵は、自然を安心して楽しむための第一歩だ。遊び方を知れば自然は豊かで優しく、知らなければただ汚くて怖いだけ。

あらためて、「汚い、面倒くさいがどうでもよくなった」ことに感謝している。冒険学校で過ごした時間と、そこで出会ったすべての人たちに——ありがとう。



アムステルダムにて 自転車



台北にて 神社



イタリア時代 ミラノコレクションにて



冒険学校参加者の頃

やっほーはるこだよー

黒澤東江（小菅村民・冒険学校運営委員）

この原稿を書いている 8 月 8 日、2025 年の夏の冒険学校が無事に終了しました。息子が発熱したので家でゆっくりと振り返りながら書いています。

今年の子どもたちもすごくかわいかったな。みんなよく食べよく遊びました。自己紹介欄に特技は胃袋を掴むことです！って書いていいかもな、と思うくらいにみんな「美味しかった」と言ってくれたのでとても嬉しかったです。

INCH のキャンプに初めて参加してから小菅村にきてざっくり 20 年が過ぎようとしています。時空が歪んでいるのでは？！と思うくらい早かったと思うし、培ってきたものを思えばなかなか長かったと思えるから不思議です。

この 20 年間、毎年右往左往しながらみんなで冒険学校を実施してきました。わたしはキャンプしかしていないので自分のことをいわゆる「INCH の人」とは思っていないのだけど、INCH の大人たちは皆優しいから好きです。

そうそう、冒険学校で参加者の皆が羨ましいと思うことが多々あるのですが、その最たるものの一つが色んな大人と一緒に生活をして話ができること。わたしも小学生の時にこんな大人たちと出会いたかったよーと心から羨ましく思います。だって変な大人ばかりじゃん（これを褒め言葉だと思ってくれる INCH の人、好きだよ！）

さて、そんな環境にどっぷり 20 年もおりますと肌で感じる INCH イズム。難しいことはよくわからないのが本音だけど、想いの上でこのキャンプが成り立っているのは重々承知しています。

冒険学校のキャンプスタッフは無償で、何なら交通費を自腹で支払って小菅村まで来て、お風呂もキャンセル界隈の過酷なキャンプを終えて帰っていきます。それなのに皆また来たいと言ってくれる。予定がブッキングしてしまったら残念だと言ってくれる。大学を卒業して社会人になっても来てくれる。本当にありがたい気持ちです。そんなわたしも仕事を休んで、寝る間も惜しんでこんな過酷なことを毎年毎年繰り返している。来年はぜってーやんねーぞと思うこともあるっちゃあるけど楽しさの方が勝っているからまた来年も楽しみながら繰り返すのでしょうか。

こんなに楽しい夏の冒険学校も暗黒の時代がありました。参加者が集まらない、スタッフが集まらない、とか。それでも開催が危ぶまれる事はなくて、その時々を精一杯過ごしてきました。今思えば安全管理が、保護者対応が、等足りないところだらけだったと思うけど、その中でも子どもたちと全力で遊んでお腹いっぱいご飯食べて楽しかったね！で終わるキャンプをいつも心がけていました。そして 2025 年の今、夏の冒険学校は参加募集人数を上回る応募が！すごいねー、やったねー！評価されることは悪いことばかりではなくて、いいものは良いと言ってもらえてるみたいでとても嬉しく思います。

あの頃蒔いていた種がぽこぽこ発芽して花が咲いたみたいな感覚です。当時はわたしも若かったから、いっぱいいいっぱいの時もあったし、参加者の子を泣かせたこともあります（実は今年も泣かせてしまった）。それでもこうして夏の冒険学校が続けていけるのはあの頃のわたしたちが必死で築いた財産なのだと思います。そしてそれはこの先も続いていくのだと感じています。

わたしは小菅村に家を建ててここに居ることを決めました。村で仲良くなった友だちも殆どが村外へ引っ越していきます。それはとても寂しい事だけど、今は彼らの新しいスタートを笑って見送るようになりました。今大学生のスタッフの皆も卒業したら足が遠のくかも知れないよね。それが寂しかった時期もあったけど、今はまたねと言えます。

みんなへ

わたしは小菅村にいます。いつでも遊びに来てね。



次の曲がり角へ

宮坂朋彦（自然文化誌研究会運営委員）

「みややんが、なんか偉い人になっててびっくりした」

久しぶりにキャンプにきた元参加者の高校生スタッフからこんなことを言われた。確かに、私自身びっくりしている。長年このキャンプに関わっている鈴木風馬や熊本日向が村長となったことは、わからない話ではない。ひきかえ私は、サークルちえのわの代表や副代表だったわけでもないし、なんなら途中で辞めた身ですらある。なぜ、私は「偉い人」に見え、INCHの50周年記念誌に特別寄稿をするまでに至っているのか。

ことの経緯が、単に私の略歴を示すに過ぎないのであれば、わざわざ記念誌に寄稿するほどのことではない。だが今振り返ってみれば、それは、私個人とINCHとの関係だけでなく、当時の社会的な事情、特にコロナ禍を境とする転換と密接に関わっていたように思う。自分語りにはなってしまうが、私の目線からこの数年間の冒険学校の変化について記録を残しておくのは悪いことではないだろう。というわけで本稿では、私が今の立場になるに至った経緯を語ることを通して、こすげ冒険学校の現在地、そしてその先を示す補助線の一つを描いてみたい。

1. 出会い

私が最初にINCHのキャンプに参加したのは大学1年生のとき、2015年のむらまつりキャンプである。学科の一つ上の先輩に(半ば強引に)誘われて参加したちえのわ4月農学校でくろちゃんの説明を聞き、3人の同期と一緒にキャンプに参加した。今思えば、なかなかのスピード感である。当時は、くろちゃんとはるちゃんが二人で山菜採りを教えてくれたのを覚えている。

特に野外活動の技能が高かったわけではないが、幼少期にファミリーキャンプによく連れて行ってもらったこともあって、夏には冒険学校に参加したほか、高校時代の友人に誘われて別の子ども向けキャンプもハシゴした。余談だが、その他団体のキャンプは、大学1年生の私に、小学2年生から4年生の小集団をいきなり数日間任せ(ホームシックの女子の夜泣き対応が一番きつかった)、実踏もしたことのないフィールドでの登山を1班分丸投げするほどの人手不足だった。INCHのキャンプで雫さんに習った基礎的な技術を駆使しながらなんとか乗り切ったが、今思えば冷や汗ものである。

ちなみにその際、数万円かけて装備を整えたのだが、後から聞いた話によると、くろちゃんが私をよく覚えていたのは、自前の沢タビを買うようなやつが珍しかったかららしい。

ちえのわでも私は「ガチ勢」だった。部会と農学校には毎回欠かさず出た。熱心かつ尖っていたので、よく先輩方に迷惑をかけたし、衝突したことも多かった。先日、数年ぶりにキャンプにきたじゅんいちろうが、私について他のことはあまり覚えてないが、先輩(おそらくせいじゅさん)と喧嘩していたのは覚えていると言っていたく

らいである。とはいえ、互いに真剣に教育について考えているからこそそのぶつかり合いだと思っていたので、居心地の悪さを感じたことはなかった（相手もそうであることを願う）。

そのため、ちえのわを辞めたのは、仲違いのような後ろ向きな理由からではない。兼サーしていたフォークソング愛好会にものめり込んでしまい、そちらの部長になったためである。強く意見を言えるのも、それを他の部員に聞いてもらえるのも、自分が一番、部会にも農学校にも参加しているという自負があったからだ。たまにしか来なくせに口うるさいだけのやつになるよりは、潔く辞めてしまった方が、どちらのサークルに対しても誠実だと思った。

2. 再会、そして中断

ちえのわを離れたことに伴い、INCH とも疎遠になった。再びキャンプに来ることになったのは、2019 年、大学を卒業して教職大学院に入ってからのことである。学内で、生まれたばかりの竹晴を連れてくろちゃんと立ち話しをした記憶がぼんやりとある。いつも行楽シーズンと被っていたフォークの行事に行かなくなったことで、キャンプに行けるようになった。見返してみると、その年はむらまつり、冒険学校、やまめいわな、まふゆのキャンプと軒並み参加しているし、前入りや後日帰りもかなり行っていた。

とはいえ、この当時は学部生よりも多少長い付き合いであるというだけで、ただの一般スタッフであった。私のキャンプへの関わり方を決定的に変えたのは、2019 年末に発生したコロナ禍である。

当時、私は判断の主体となる位置には居なかったが、多くのイベントや行事の例に漏れず、冒険学校もコロナ禍において開催判断を迫られた。難しいのは、目先の中止判断以上に「いつまで自粛するか」、「いかに再開するか」である。学校も臨時休業し、オリンピックさえ延期された 2020 年はひとまず中止するとして、2021 年はどうするのか？当時多くが閉業に追い込まれた飲食業界などのように、今日に明日にという切迫状況では無いにしても、いつまでも中止していれば、再開が難しくなっていくのは必至である。

なかでも懸案となるのは、「INCH のキャンプらしさ」をいかに損なわずに再開するか、という問題だ。学校現場をはじめ、世間に流布している多くのコロナ対策は、ある種の管理主義を部分的にとは言え肯定せざるを得ない。それは、子どもたちの自主性を重んじる INCH のキャンプにとって、本来望ましくない「強制」の場面が増えることを意味している。根本の理念を曲げるくらいなら、万全の状態で開催できるまで待つべきか。それとも、INCH キャンプの本質とコロナリスクの最小化を両立する方法があるのだろうか？

2020 年の末、たった 3 人で行われたキャンプは、こうした問題を話し合う場であった。佐伯さん、だにえるさんと共にそこへ参加したことが、その後のキャンプへ私が深く関わる一つのきっかけである。

今だから言いやすいことではあるが、私はキャンプに限らず、コロナを理由に社会的活動を極端に制限すべきでは無いと考えていた。無論、実施しないことが最も感染リスクの低い選択肢であることは承知していた。しかし、リスクの話をすれば、そもそもキャンプもそれ以外の活動も、何らかのリスクを伴わずには行えることなどない。関連する諸要素を天秤にかけながら、最大限できることを模索することこそ重要であり、INCHのキャンプでも、それができると考えていた。

話し合いの結果、2021年はGWにスタッフのみの研修を実施したうえで、夏の冒険学校の再開に踏み切ることとなった。

3. 再開か、再構築か

再開に向けさまざまな対策を行った。テント場にあった大きな切り株を引き抜いたり、暗渠排水の土木工事をしたり、みどりさんに昼食を作ってもらいながら食器棚のペンキを塗ったことは忘れられない。他にも数々の対策を講じたが、ここで特筆すべきは就寝時間の厳格化と、個人用テントの導入である。というのも、両者は先に述べた「INCHらしさ」と関わる要素であるように思われるからだ。

結論から言えば、これらは共通して、スタッフと参加者という区分の明確化という作用を持っていた。従来のキャンプでは、子どもの就寝時間は曖昧で、寝床もスタッフと混在していた。そのため、一部の学生スタッフと参加者の心理的な関係は、一般的な教育活動と比べ独特な空気をまとっていたように思う。この空気は、現在活躍している20代前半のスタッフに元参加者が多いことにも関係があるかもしれない。

就寝の時間と場所の指定は、感染拡大の防止だけでなく、スタッフだけの時間の確保、子どもの健康状態の向上、自分だけのスペースがあるという秘密基地的な魅力などをもたらした。だが、引き換えとして、これらの独特な空気を薄めるものであったことは間違いない。

しかも、マスク着用や事前の検温、手指のアルコール消毒など、コロナの終息と共に社会全体として下火となっていった対策と異なり、個人テントと就寝時間はその後のキャンプにも残存することとなった。もちろんそれはメリットがあるからこそ残存しているわけだが、ともかく、この二つの変更は、INCHのキャンプの雰囲気を多少なりとも変化をさせたはずだ。その意味で、2021年のキャンプは、単なる再開ではなくポストコロナに向けた「再構築」であったのではないかと思う。

そんな「再構築」としてのキャンプにおいて、私は子育て中のくろちゃんに代わり、現場で指示を出す、という役割を担うことになった。何の因果か、友彦から朋彦へという運びである。ただ、難しかった(し、今でも難しい)のは、私自身の元来の性格と、感染対策のために一定の規律・規範が要請される状況が相まって、「みややんが仕切っている」感が強くなり過ぎてしまったことである。

冒頭の「偉い人」という印象も、ここに起因するものだろう。無論、コロナ禍という状況である以上、従来のキャンプよりも意見や判断を統一すべき場面が多かったことは確かだし、その意味で役割は果たしたと考えている。しかし、良い意味でみんな考え方がバラバラで、でもどこかで同じ方向を向いている、というのも、INCHの良さの一つである。私より下の世代に対して、果たしてその良さを伝えていけているのか

は疑問が残る。特に、コロナ禍の影響が残る 2021 年に参加してくれた学生の皆さんには、多くの我慢を強いてしまったし、感染がひと段落した今でも、キャンプ中に私に指示を仰ぐスタッフは多い。それ自体はありがたいのだが、自分が学部生やコロナ前に参加していたときのことを思うと、もっと自由にのびのびと活動にのめり込んでほしいとも感じてしまう。間違いを恐れず、周りの目を気にしすぎず、自分なりの教育との向き合い方を模索する場として欲しいし、自分がその邪魔になっていないか不安でもある。

4. 次の曲がり角へ

変化できないものはいずれ滅びる定めであるから、いつかは変わっていたのかもしれないし、常に微細な変化は起きている。だが、コロナ禍とその対策は、良くも悪くもキャンプを急激に変化させるものであった。その変化が正しい選択だったのか、私にはまだ判断がつかない。

しかし、確かなことが二つある。一つは、少なくとも私がその変化に大きく関わったことだ。これは思い上がりではなく事実だと思う。だとすれば、私が果たすべき責任は、その変化が一部でも良かったと言えるように、修正すべきところを修正し、守るべきところを守ることである。

同時にもう一つ確かなのが、この変化に関わった同世代は、私だけではなかったことだ。むしろ、変化のあるこの時期だったからこそ、いま、若手村長たちを中心として、共に INCH について語れる関係があるとも感じている。そしてそれは、私個人にとっても（おそらく INCH の今後にとっても）、良い変化だったのではないだろうか。この 5 年で起きた変化は、きっかけとしてはコロナというネガティブな要因によるものであった。INCH のキャンプにとって次の曲がり角がいつになるのかはわからないが、次は同世代とともに、未来への前向きな志によって変化を起こしていけたらと願っている。



成合健次君の思い出

1985 年度 B 類職業科卒業 宮本透

成合君は自然文化誌研究会草創期のメンバーで、雄迦寮(現東久留米国際学生宿舎)に暮らしていた。私は木俣さんの授業がきっかけで探検部に入部したが、クラス仲間が雄迦寮長をしていて彼の後輩が成合君だった。藤沢市出身の私は自宅通学だったが成合君は隣の茅ヶ崎市出身の寮生、湘南地域のローカルな話をするうちに親しくなった。当時の雄迦寮は学生自治が確立しており、寮生たちは寮生大会・寮祭等を企画運営する中で卒業後も続く太い絆を育んだ。律儀な彼は寮長の友人である私をいつも「先輩」と呼んでくれた。

1984 年 10 月 31 日、成合君は「探検部がんばれ！」のメッセージを部室に残して亡くなった。前日彼は久しぶりに部室を訪れ旧友や後輩たちと談笑して帰宅、深夜にバイクで寮祭に向かう道中交通事故にあった。早朝河口君から電話があり泣きながら「成合が亡くなったんですよ」と言われた時は信じられず、「朝から悪い冗談はやめてくれ！昨日部室で会って、国分寺から中央線に乗って新宿まで一緒だったんだよ」と叫んだ事を鮮明に記憶している。悲しい葬儀の後に探検部の仲間が彼をしのび、日暮里駅近くの居酒屋へ寄ったのが第 1 回成合会だった。

翌年以降 10 月最終土曜日は日暮里駅に集合して成合家の菩提寺に向かい、ビールと煙草を墓前に供えて手を合わせた後に呑み会をする事が草創期メンバーのならわしとなった。皆仕事を持つようになったので集合時間は 18 時、成合君の人柄を慕って 40 年間途切れることなく成合会は続いている。高校に勤務していた頃、文化祭が終わった後学校を飛び出して新幹線に乗って東京駅へ向かった事は懐かしい思い出である。

何時の頃からか健次君の兄上の正和さん、中込君や横山さん、後輩の瀬谷君や佐伯君、草創期メンバーに加えて参加するようになった事がとても嬉しい。ここ数年昼間の時間に集まっているが、仲間の話題は健康問題や老後生活についてが多くなった。自然文化誌研究会 50 周年、これからも長く成合会を続けたい。



2014 年



2019 年



2024 年



こまっちゃんの思い出

岩谷美苗

ジンチョウゲが香る季節になると、こまっちゃんが亡くなった日を思い出します。こまっちゃん
は小松真木子さん。私と同じ家庭科で一つ後輩。秋田美人で、真面目でしっかり者の頼れるアネゴ
って感じの人でした。冒険学校でこまっちゃんがいると場は明るくなり、飲み会では一升瓶を持っ
て「飲んで飲んで」と注いで回っていました。私たちが散らかすと「また散らかしてる！」と片づ
けてくれたり、よく気が付く世話焼きです。こまっちゃんは虫好きなんだけど、ツンデレなのか？
あまり大っぴらにしたくないのか？密かにスズムシやカマキリを飼っていました。カマキリはトマ
ト置いとけばショウジョウバエが来るから飼えるとか、スズムシは枕元に置いとくとうるさくて眠
れないとか、こまっちゃんに教えてもらった気がします。

こまっちゃんが亡くなる前に、何か相談したような雰囲気だったのを私は感じていたんです。な
のに私はこちらから「何かあった？」と聞くこともせず、こまっちゃんは亡くなってしまいました。
私は自分を責めました。こまっちゃんの死について、ずーと後悔していたら、知り合いのおっちゃん
が「死ぬ人は誰が止めたって死ぬんだよ。おめーが止められるなんておこがましいよ。」と慰め
てくれて、少し心が軽くなった思い出があります。その後秋田へお墓参りに行きました。秋田の雪
は想像以上で、墓場は一面の銀世界。墓のかけらも見えません。こまっちゃんのお母さんはスコッ
プを持ち「たぶん1m以上掘らないとお墓が出てこない。」と言うので、みんなで掘りました。変
な気分でした。(現在お墓は埼玉にあります。)

こまっちゃんの死から、私は「ちゃんと生きよう！」と思うようになりました。すごく元気で頼
っていた人がいなくなったので、自堕落に生きてきたみんな(私含め)もピリッと変わった気がし
ます。それ以来わがママが言える人は心配ないけど、真面目でしっかり者で頼られる人は心配にな
ります。そういう人に私は過剰におせっかいします。もう後悔したくないので、空回りでも「大丈
夫？」って聞きます。

昨年、こまっちゃんのお母さんが亡くなり、お葬式にいきました。私はこまっちゃんのお母さん
にもたくさんお世話になったので、すごく悲しくてつらかったです。不謹慎ですが、うちの父が亡
くなった時より悲しかったです。なんでだろう？

スーパーの棚に餡ドーナツを見つけると、こまっちゃんを思い出します。こまっちゃんは、なん
でもずーっと頑張って、餡ドーナツで復活していました。

そうだ！私が死んだら棺桶に餡ドーナツをいれてもらえないでしょうか？あの世でこまっちゃん
と餡ドーナツを食べながら、「あんとき、なんかあった？」と、話をしたいと思います。私がボ
ケてなければですけど。



K O S E : 薮田耕生君のこと

脇田晋也 (1992 年入学・冒険探検部)

耕生君 (以下、当時のように K O S E と呼ばせて下さい) と出会ったのは、彼が私より 1 年後に学芸大入学 (心理臨床科)、冒険探検部に入部してきた 1993 年春でした。入部順では後輩にあたる訳ですが、実際は昭和 48 年度生の同期でした。

入部した年の夏、いきなり我々の在籍当時の部のクライマックスとも言える韓国済州島調冒隊…の渡航前、東京都小金井-山口県下関までの徒歩での日本縦断だけ参加したいと希望したのが K O S E でした。我々の代では初めてと言える、部をあげての大型企画である済州島調冒隊に部員誰もが昂る気持ちを抑えられない状況下、その番外編だけの参加…というのは考えてみれば K O S E だからできた、すでに確固たる個があったと思えてなりません。さて、その行動の理由ですが、同年、K O S E は吉村作治主催の地球探検塾なるものに論文を送って応募、『Geel[へール]で生活』(Geel: メンタル・ハンディキャップのある人々を一般家庭の中でケアする活動で知られたベルギーの地方都市) のタイトルで奨励賞を見事受賞し、副賞の往復航空券を手に入れた翌 1994 年 2 月、ヨーロッパへ旅立っています。気持ちは既にそちらに向かっていた…のかも知れません。その旅は途中、パリでバケット主食にバイトで金を貯めつつ、スペイン〜トルコ横断を含む長期周遊となりました。

このヨーロッパ旅から帰国後、「音楽会」と呼ぶフリー・ジャンルの音楽を朝までかけ、聴かせ合う会を主催し、その会が長く続いた関係で私は K O S E とより親しくなりました。K O S E は幼少期から中学生までピアノを習い (お母様もピアノ教師)、中学時には吹奏楽部でユーフォニアム (現在、アニメで一般にも知られる楽器に) を担当していた素地もありつつ、クラブに通いつめるほどダンス音楽にハマったり、オペラ・ジャズ・ロック・ソウル・ブラジル…等、ほぼオールジャンルに造詣が深い印象がありました。ある時、探検部の山行から戻った彼が「自分が山登りは楽しめないことが分かった (笑)」と語ったことを思い出すのですが、むさ苦しい部の中では珍しく垢抜けた、芸術志向の強い持ち主でした。高校のあった千葉県市川市から銀座に通い、資生堂の P R 誌『花椿』を愛読していた経歴にも納得します。大学時代から酒・茶・葉巻・料理・菓子作りなど独自の世界を部に持ち込み、部内文化醸成に際し、確実に影響をもたらした人物でした。

1998 年、学習研究社に入社し、新鋭編集者として活躍、交遊の場が一気に広がります。見巧者・モラリストとしての厳しさと、きめ細やかな心配りや打ち解けた人に見せる人懐っこさ、双方併せ持つ独特の魅力は社内外に同志・ファンを作り続けていましたが、2008 年 11 月、胆管がんの告知をされ、翌 2009 年 2 月 1 日、35 歳の若さで永眠しました。

冷夏と称された 1993 年夏。頂いた食パンの耳 (だけ) とパスタソース缶で豪勢に祝った K O S E 誕生会、JR 山北駅構内で暖をとらせてもらうため列車内に忍びこみ寝ていて朝捕まったこと、牛乳パック内にコーンフレークを入れて食べていたら他 2 人 (K O S E と丸岡君) から「ブルジョア」と揶揄われたこと、ゴールの JR 下関駅が近づくと誰からともなく 3 人とも走り出したこと…今でも時々、あの夏の徒歩行が懐かしく思い出されます。



山中進さん、山中三千恵さん、鈴木美穂さんを偲んで

立川信史（自然文化誌研究会運営委員）

中津川時代の冒険学校を語る上で必ず登場する人物が、民宿中津屋のご夫婦と、村コースの重鎮である美穂さんだ。

当時、大学生スタッフだった私は、参加者の子どもたちやジュニアスタッフたちと一緒に遊んでばかりいたが、ある時しゃがれた声に呼び止められた。山中進氏である。内容は、なんと飼っている犬のリードを持っていてくれという何だかよくわからない話であった。進氏は慣れた様子で冒険学校スタッフたちの輪に入って行き、しばらく会話した後、その犬と私を連れて中津屋へ向かった。そこには三千恵さんが待っており、フキのスジを取るという業務を私に命じた。その日の午後は子どもたちと遊ぶことなく、中津屋のお手伝いで終わってしまうのかと思ったが、スジ取りしたフキを煮た料理と中津芋を持たされ、キャンプ場に戻り、その日の夕食として出されたのだった。これが私と山中夫妻との出会いだった。

それから何年もの間、中津屋にはお世話になった。時には1か月以上中津川に滞在して中津屋で食事させてもらったり、酒を飲ませてもらったり、泊まらせてもらうこともあった。どんな時でも拒絶されることはなく、受け入れてくれた。三千恵さんの葬儀の際、きっと我々は三千恵さんたちにとって保護した猿や鹿と同じようなものだったのだろうという、ヤス氏の言葉が胸に刺さった。来るものを拒まず、すべて愛で包んでくれる人たちに甘えまくっていたし、本当にありがたいと思って止まない。

美穂さんとの出会いも、中津川の冒険学校だった。参加者の子ども以上に落ち着きのない私に、優しく、厳しく、分かりやすく声をかけてくれた。美穂さんの手は魔法の手だった。普段捨ててしまうようなもので手ぬぐいやシャツを染め上げていき、全く染め物に興味のなかった私には驚きでしかなかった。編み物なんてやったことがなかったけど、道具を使わなくてもマフラーが編めることを教えてもらって、参加者そっちのけで無心で編んでみたりした。美穂さんはスタッフにも子どもたちにも分け隔てなくいつでも何でも答えてくれる、みんなのお母さんのような人だった。顔を閉じれば今でも両方の腰に手を当てて少し怒った顔で飲みすぎて寝坊した私を叱ってくれる美穂さんの顔が浮かんでくる。

私の10代後半から20代前半は、こうやってたくさんの優しさに包まれて育ったのだとこの文章を書きながらあらためて思った。

進さん、三千恵さん、美穂さん、ありがとうございます。これからも私たちを見守ってください。



発行物一覧

発行年月日	タイトル
1977 年	自然と文化（創刊号）
1978 年 3 月	自然と文化（2 号）
1982 年 4 月	自然と文化（3 号）
1983 年 4 月	自然と文化（4 号）
1985 年 2 月	自然と文化（5 号）
1985 年 7 月	自然と文化（6 号）
1986 年?	自然と文化（7 号）
1989 年 3 月	自然と文化（8 号）
1992 年 3 月	自然と文化（9 号）
1993 年 12 月	自然と文化（10 号）
	
1987 年 10 月	冒探王（創刊号）
1987 年 11 月	冒探王（vol. 2）
1988 年 10 月	冒探王（vol. 3）
1991 年 7 月	冒探王（vol. 4）
1992 年 11 月	冒探王（vol. 5）
1994 年 4 月	冒探犬
1996 年 2 月	冒探王（vol. 6）
1997 年 2 月	冒探王（vol. 7）
1998 年 2 月	冒探玉（創刊号）
1998 年 10 月	冒探玉（第2号）
2002 年 1 月刊	冒探王（vol. 8 1999. 1-2000. 12）
2005 年 11 月刊	冒探王（vol. 9 2001. 1-2004. 2）
2007 年 3 月刊	冒探王（vol. 10 2004. 3-2007. 2）
2015 年 3 月刊	冒探王（vol. 11 2013. 4-2014. 10）
	
	
1990 年 3 月	「アジアを考える」報告書
1992 年 6 月	「アジアを考えるⅡ」報告書
1995 年 9 月	済州島調査冒険隊報告書（1993. 9. 3-14）
1997 年 12 月	中央アジア学術調査探検隊報告書（1993）
1995 年 11 月	らぞう（20 周年記念誌）
1990 年	全国大学探検部シンポジウム'90「風と人と」報告集
2005～2025 年	民族植物学ノオト（第1号～18号）
2015 年 8 月	冒険と子どもたち（「冒険学校」のあゆみ）
	
	

編集後記

まずは、お忙しい中を寄稿にご協力いただいた皆様に心から感謝申し上げます。自然文化誌研究会冒険探検部は50周年を迎えたわけですが、冒険学校やINCHが培い継承してきた活動の歴史、多様な価値観や熱き思い、大学時代の躍動的な国内外の冒険や探検、若さ溢れる数多くの奇行・愚行などの懐かしい思い出を、それぞれの立場から語っていただきました。

半世紀を経ると必然的に別れもあります。今回は、成合健次さん（1984年没）、小松真木子さん（1995年没）、藪田耕生さん（2009年没）、山中進さん（2023年没）、山中三千恵さん（2021年没）、鈴木美穂さん（2003年没）の追悼文を掲載させていただきました。この方々以外にも多くの仲間や関係者との別れを経験してきました。お名前をお一人お一人挙げられませんが、皆さんとの記憶に改めて思い馳せつつご冥福をお祈りしたいと思います。

編集作業は、黒澤友彦さん、宮坂朋彦さんとの共同作業でした。若い二人のエネルギーが編集作業の原動力で、正直頼り切りでした。また、印刷作業では、立川信史さんにもお世話になりました。3人に改めて感謝申し上げます。95年に発行した20周年記念誌「らぞう」にも助けられました。私が編集長でした。自分でいうのも変ですが、20年分よくまとまっており、何度か記録として見返しました。

木俣先生にはやはり特別の謝辞を述べさせていただきます。75年に学内に貼られた「西原へ行きませんか。雑穀の調査をやってみませんか」という手書きのポスターから、すべてがスタートしています。50年絶えることのないエネルギーに驚嘆と感謝を込めて。

この50周年記念誌が、手に取ったすべての人々に、当時が思い出され、また自分の知らない時代や世代の活動に思いを馳せることができるものになっていれば幸いです。

さて、我々はこれからどこへ向かいましょうか。

日比野真士（1989年入学）

編集後記（その2）

事業のはじまりは楽しみや喜びよりも面倒くさい気持ちが先に出てしまう、いつもそうだ。

毎年春になると、「いよいよ今シーズンも始まるのか…」冒険学校の準備を始めなくちゃ、ナマステ書かなくちゃ、草刈りしなくちゃ…「父ちゃんは夏が好きじゃないんだよ、早く冬にならねえかなあ」とついつい息子にぼやいてしまう、50歳を前にしても自堕落な人格のままである。

創設40周年記念行事は小菅村で開催しました。小菅村役場の会議室を借りて、40年の歩みをそれぞれの事業担当者が発表して共有し、今は取り壊した舩木民宿で盛大な宴会を行いました。その時すでに私の心は決まっていた。「10年後の50周年記念の際には記念誌を発行すべきである」と。「50周年以降に記念すべき節目のキリの良い数字は無い。そして創設者たちの多くは既に旅立っているかもしれない、生きていてもオジイとオバアで寄稿すらできないかもしれない」と。

2015年に「冒険と子どもたち～冒険学校のあゆみ」を発行した際は、内容は俺の世代じゃないからヤスさん（小川泰彦）、美苗さん（岩谷美苗）さん、頑張ってくださいよ～、と逃げ腰のポジションでした（少し反省）。

今回の50周年記念誌でイメージしていたのは、自然文化誌研究会冒険探検部20周年記念誌の「らそう」です。これは私が東京学芸大学に入学する前年の1995年に発行されたものであり、冒険探検部に入部したての10代の私にはとても眩しくて、何度も何度も読み返しました。

その編集長の日比野（真士）さんに50周年記念誌と一緒に編集してもらう事はイメージどおりの進行で、快く引き受けてくださり、会議と作業と+αを共にした日比野さんにこの場を借りて御礼申し上げます。

50周年記念誌の中身についてはこう考えました。50年という歴史が存在し、20周年記念誌のようにはいかない部分が多いな、関わった人の自己紹介や寄稿も全員には頼めない。自然文化誌研究会はNPO法人になり、サークルちえのわも含めて裾野が広がっている、そのすべてを拾いきれないけれども時系列でどのようなムーブメントがあったのかは分かるようにしたい。やや中途半端な完成形になることも否めない…そんな事情もありました。

執筆依頼については、全体テーマ：「創設50周年を迎えた2025年の今、当時のムーブメントを見つめ直して感じたところを書き残す」としました。2025年に振り返ってみて、やはり最先端にいたな、真のパイオニア・ワークであった、バカな事をしていたな、あの時代の背景はね、など見えてくれば良いなと思いました。

執筆者には、自然文化誌研究会の公式見解というよりも、その時々当事者がどのように考え、実際に動いていたのかを遠慮せず書いてください、と依頼しました。時代背景もあるし、立場によって見え方（目指すところ）って全然違うんですね。木俣（美樹男）さんが見えているものと、現場でせかせかと動くだけの自分では大きな差があります。

その両方、いやすべてが大切でして、各世代、各立場の人が議論して、協働して、時には妥協もしつつ、創り上げてきたのが自然文化誌研究会の50年の歴史ってことで。

当時の生きた言葉、目指していたこと、やろうとしていたことは、運営委員会議事録、総会資料などに詳しくありました。コチラもそのうちまとめられればおもしろいかなと思います。

自然文化誌研究会を常日頃から支えてくださっているみなさん、本当にありがとうございます。

私も書こうかな、書き足りない、などありましたら会報ナマステやWEBに掲載もできますので、ぜひ筆を取って（メールかLINEで）ご寄稿ください。

NPO法人自然文化誌研究会事務局長 黒澤友彦